国士舘史研究年報

楓原

FUGEN

2023

第15号

学校法人国士舘

Kokushikan

国士舘史研究年報

楓原

FUGEN

2023

第15号

学校法人国士舘

Kokushikan

『楓原（ふうげん）』名称の由来

本誌の由来は、創刊号（平成22年3月）の巻頭言「『楓原』を繹（たず）ねる（室長阿部昭稿）」を抜粋し次に示す。

百年史の編纂を進めるにあたり、調査・研究した成果を発表、蓄積するため、年ごとに「国士舘史研究年報」を公刊することにした。年報には「楓原（ふうげん）」の愛称を付す。「楓」は創立者柴田徳次郎が国士舘教育の象徴として、校章や校旗の意匠に用いてきた。「原」は湧き出たばかりの泉を意味し、ものごとの起源を表す。すなわち「楓原」は国士舘教育の淵源を意味する。

中学校・高等学校
創設100年

1917（大正6）年11月4日、現港区南青山に私塾として産声をあげた国士舘は、その2年後に世田谷の現在地に移転し、高等部を開設する。1923年に中学校・高等学校の前身となる中等部を開き、1925年には法令に基づく国士舘中学校を創設して、地域の青少年に向けた中等教育を開始した。また、1926年に創設した国士舘商業学校は、その後の定時制課程の淵源となる。戦後には新たな教育制度のもとで、新制・中学校および高等学校を設置して現在に至る。

2023年、時代の変遷と共に移り変わる社会の期待に応じつつ発展を遂げ、創設100年の節目を迎えた。

中学校・高等学校校舎（1994年）

中等教育のはじまり

国士舘における中等教育の歴史は、1923（大正12）年の中等部開設にはじまる。1925年には中学校令に基づく国士舘中学校を創設し、専用校舎も整備した。教育課程には国語・漢文のほか、外国語や博物、また文部省の規定よりも週2時間多い体操・武道を開講し、現在も受け継がれる文武両道の教育を実践する。

1926年に創設した国士舘商業学校は、中学校の授業がない夜間に校舎を活用して、地域の勤労青年に向けて実業教育を実施した。市街地化や商家の増加により、商業教育を求める地域の期待に応えた。

旧制中学校校舎（1928年頃）

中学校生徒の通学風景（1937年）

商業学校の珠算授業（1940年）

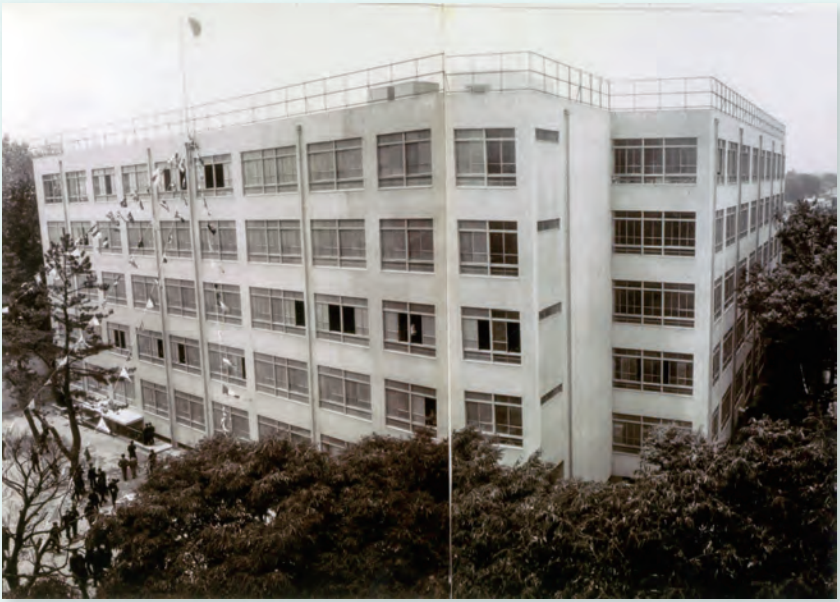
新制中学校・高等学校の創設

１９４６（昭和21）年、戦後の占領政策の影響を受け、校名は、「至徳」に変更となり、新教育制度に応じて１９４７年に至徳中学校を、翌１９４８年に至徳高等学校を創設した（１９５３年に「国士舘」に復称）。

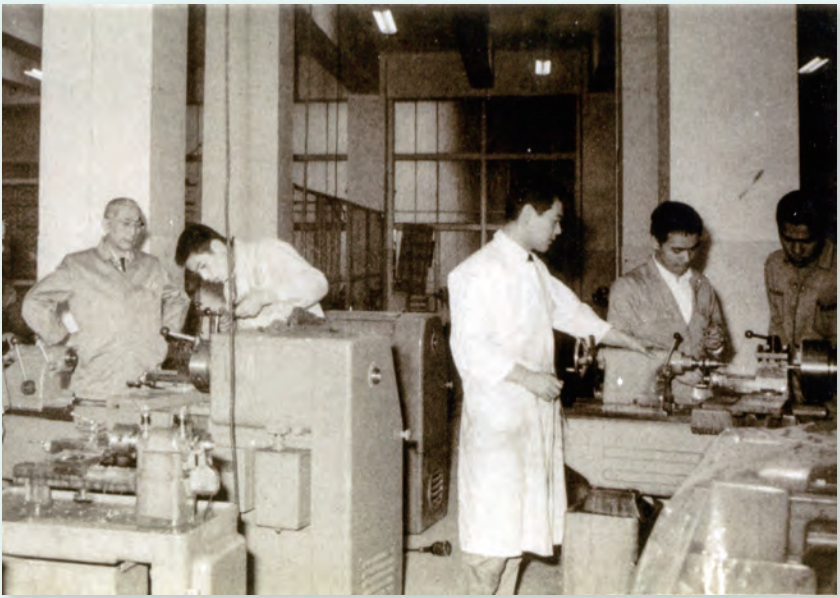
当初、高等学校には全日制普通科と、旧制商業学校の伝統を引き継いだ定時制商業科を設けた。

その後、日本の高度経済成長などを背景として、１９６３年に工業科を設置し、翌年には中学校・高等学校専用校舎（現８号館）を整備した。１９９４年には定時制商業科を発展解消し、定時制普通科へと改組した。

至徳高等学校の生徒（1951年頃）



中学校高等学校校舎８号館（1964年）



高等学校工業科（機械科）の授業（1967年）

飛躍する 中学校・高等学校

１９９４（平成６）年、中学校・高等学校は、男女共学化（高等学校定時制普通科は２００４年）へ移行するとともに、制服を蛇腹の詰襟からブレザーへと一新した。また、同年には新たに専用校舎を整備するなど、その教育環境は大きく飛躍を遂げた。

その後、多様化する社会のニーズに応えて、高等学校は２０００年に通信制課程を新設し、定時制普通科では２００４年から昼間授業へと段階的に移行した。

２００８年にはグラウンドの人工芝化、２０１５年からは放課後の自学自習を支援するシステム「K-improve」の導入など、学習環境の充実に取り組み、今日に至っている。

男女共学化へ移行（1994年）

巻頭言　国士舘中学校・高等学校創設一〇〇年の節目に

国士舘史資料室室長　長谷川　均

創立一〇六周年を迎えた二〇二三（令和五）年は、中学校・高等学校の創設一〇〇年という大きな節目の年でありました。大講堂で開催した創立記念展では「応変×伝統」と題し、大正から令和へと時代が移り行く中で、各時代の社会的な要望に応えるべく、教育理念や伝統を重んじながら大きな発展を遂げてきた中学校・高等学校の進展を紹介しました。次の一〇〇年に向けて更なる発展を期待したいと思います。

本年は、五月八日に新型コロナウイルス感染症の感染症法上の位置づけが五類へと移行し、コロナ禍で敷かれてきた様々な規制が大きく緩和されました。五月一〇日には大学各キャンパスの入構制限が全面解除され、昨年来から少しずつ進行していた日常が戻りました。これに伴い資料室では、学外者の資料展示室及び閲覧室の利用、土曜日の開室を再開しました。また、昨年から開始した「大講堂開放週間」に加え、学外者を対象とした「大講堂見学ツアー」を新たに実施しました。これらの取り組みは、文化財としての大講堂に親しみ、その存在価値を多くの方々に理解いただく貴重な機会となりました。博物館実習生の受け入れも昨年に引き続き実施し、学徒出陣八〇年にちなんで企画した「国士舘と学徒出陣」展を実習成果として開催しました。

行動制限の緩和を受け、ようやくコロナ禍前の諸活動や新たな試みに取り組むことができるようになりました。資料室では、更なる本学に関する資料の収集・整理を進めるとともに、歴史的資料の利用・公開に努めて参ります。今後とも、国士舘史資料室の活動にご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

二〇二四年三月吉日

国士舘史研究年報　二〇二三　楓原　第15号

国士舘史研究年報

目次

巻頭言

国士舘中学校・高等学校創設一〇〇年の節目に……長谷川　均　7

論文

研究ノート
水野錬太郎の教育観
―大正期における小学校教育の国庫負担をめぐる発言の検討―……高岡　萌　11

講演録

全国大学史資料協議会東日本部会　研究会
企業アーカイブズと大学アーカイブズ　―企業史料協議会での経験より―…阿部　武司　33

国士舘の思い出

「生き様」学んだ国士舘……大神　硬司　49
音楽に燃え、仲間に支えられた四年間……館　正史　67

参考

『国士舘百年史　通史編』索引　人名編……国士舘史資料室　98

令和5年事業報告

……国士舘史資料室　99

国士舘史資料室の活動

1　調査・収集

(1) 主たる資料調査　(2) オーラル調査　(3) 主な寄贈資料

2　整理・保存

(1) 資料目録作成状況　(2) 資料電子化・保存処置

3　利用・公開

(1) 収蔵資料の公開（収蔵資料検索システム運用状況）　(2) ホームページ

(3) 教育普及活動
4 室の構成
(1) 職員 (2) 施設の概要
5 活動日誌

関係規程

国士舘史資料室規程

研究ノート

水野錬太郎の教育観

―大正期における小学校教育の国庫負担をめぐる発言の検討―

高岡　萌

【キーワード】水野錬太郎、小学校、市町村義務教育費国庫負担法、臨時教育会議、大正期

はじめに

本稿は、国士舘専門学校初代専門学校長となった水野錬太郎の小学校教育についての教育観を検討するものである。より具体的には、臨時教育会議諮問第一号「小学教育ニ関スル件」審議における水野の発言とその答申、および第四〇回帝国議会[1]で成立した「市町村義務教育費国庫負担法」の内容を比較・検討するものである[2]。

水野の来歴については西尾林太郎[3]によって詳しく紹介されている。また、その教育観については国士舘との関わりを中心に、漆畑真紀子[4]や西田彰一[5]が詳細に検討している。また、朝鮮総督府政務総監時代の朝鮮における教育政策についての研究も進められている[6]。これらの研究によって、水野が初代校長となる国士舘専門学校創設前後における水野の教育観や国士舘との関わりが明らかにされてきた。

しかし、これまでの研究は、国士舘との関係に焦点をあてたものであり、国士舘専門学校創設以前の水野の教育観に関する研究は管見の限り多くはない。特に田中義一内閣で文部大臣に就任するまでは、水野は一貫して内務畑を歩み、内務次官や内務大臣を歴任していた。職務として教育行政に深く関わることはほとんどなかったことも、研究が手薄になっている要因のひとつと考えられる。また、国士舘以前の教育について水野が直接語った

1918 年頃の水野錬太郎
（『水野博士古稀記念論策と随筆』1938 年）

ものがあまり残されていないことも、水野の教育観の解明を困難にさせているといえよう。

そこで本稿は、臨時教育会議における水野の発言と臨時教育会議の答申、「市町村義務教育費国庫負担法」の内容を比較・検討する。これにより、水野の小学校教育に対する教育観が、近代日本における小学校政策の転換点となった「市町村義務教育費国庫負担法」にどの程度反映されているのかを明らかにすることができる。さらに、国士舘専門学校長に就任するまでの水野の教育観の起源をたどることも可能となるだろう。

まず、本論に移る前に水野の経歴を確認しておきたい。ただし、学習歴も含め西田によって詳細が明らかにされているため[7]、ここでは本稿に関わる範囲にとどめる。

水野は一八六八（慶応四）年一月一〇日（新暦二月三日）に秋田藩分家（のち岩崎藩）の藩士の子として生まれた。水野は一〇代で両親を亡くすが、遠縁の豪農である遠山家の資金援助を受けて学業に励んだという。その後、一八八〇（明治一三）年から一八八一年頃に共立学校（のち開成中学、開成高校）に入学し、優秀な成績を残し、一八八四年に大学予備門（のち旧制第一高等学校）に一一七名中三位で合格した。一八八九年に帝国大学法科大学に進学し、法科大学教授で法学部長も務めていた穂積陳重の下で英法を専攻した。

一八九二年に法科大学を首席で卒業後、第一銀行に勤めることとなった。しかし、翌一八九三年に帝国大学法科大学教授で農商務省参事も兼任していた梅謙次郎を通じて、同省農務局長藤田四郎に請われ、農商務省鉱山局に移ることとなった[8]。

次いで、内務省土木局長の都築馨六から内務省転入を依頼され、一八九四年五月に内務省参事官に転属した。その後、内務大臣秘書官（一八九六年）、内務省書記官（一八九八年）、神社局長（一九〇四年）、地方局長（一九一

一年）を歴任し、一九一二年に貴族院議員に就任（交友倶楽部に所属）したことで内務省を退官した。そして、翌一九一三（大正二）年には一度目の内務次官就任を果たし、前後して立憲政友会に入党する。第二次大隈重信内閣下で内務次官を退くこととなるが、一九一六年一月に成立した寺内正毅内閣のもとで再度内務次官に就任する。一九一八年四月には内務大臣となり、寺内内閣が総辞職（一九一八年九月）するまで在任した。

後継の原敬内閣では朝鮮総督府政務総監（一九一九年）を経て、加藤友三郎内閣（一九二二年）、清浦奎吾内閣（一九二四年）で内務大臣を務めた。一九二七（昭和二）年には田中義一内閣で文部大臣に就任するが、一九二八年五月には「水野文相優諚問題」によって辞任に追い込まれた。そして、一九三四年には政友会を離党することとなった。以後は貴族院議員を務め、政府委員会の会長や名誉職などに就任した。第二次世界大戦後は戦犯に指定されたことで逮捕命令が出されたが、病身を理由に軟禁にとどまり、一九四七年に指定が解除された。そして、翌一九四八年に死去する。

ここまで見たように、水野は農商務省・内務省で官僚としてのキャリアを積み、内務大臣・文部大臣にまで昇りつめた。しかし、経歴をみる限り、教育に関する分野についての明確な職歴は確認できない[9]。強いて挙げれば、一八九九年から一九〇三年にかけて早稲田専門学校・日本法律学校・専修学校・英吉利法律学校・独乙協会学校・帝国大学・第一高等学校で講師（行政法・破産法・著作権法を担当）を勤めていたことくらいである。

こうした点から、水野自身には文部省などで教育行政、とりわけ小学校政策に携わった経歴は見られない。ただし、内務省地方局長を務めた経歴から、地方行財政の面で教育行政に携わったと考えられる。

一、水野の臨時教育会議委員就任と答申案の作成

（一）臨時教育会議委員への就任

先にみたように、水野は寺内内閣で内務次官となったが、その立場において臨時教育会議に関わっていくこととなる。

臨時教育会議とは、寺内内閣によって一九一七（大正

【表 1】臨時教育会議委員一覧

職域		氏名（任命時の役職）	備考
枢密顧問官		小松原英太郎、一木喜徳郎	
貴族院議員	文部官僚系	久保田譲（副総裁・勅選議員）、柴田家門（勅選議員）、木場貞長（勅選議員・行政裁判所評定官部長）、澤柳政太郎（勅選議員・帝国教育会長・私立成城中学校校長 / 小学校校長）、古市公威（勅選議員・帝国学士院会員議員 / 第二部部長）、田所美治（勅選議員）＊1	古市は手島の後任（1918 年 4 月 30 日任命）
	内務官僚系	平田東助（総裁・勅選議員）、江木千之（勅選議員）	
	大蔵官僚系	阪谷芳郎（勅選議員）	
	その他	水野直（伯爵議員）、桑田熊蔵（多額納税者議員）	
衆議院議員		大津淳一郎（憲政会）、山根正次（新政会・日本医学専門学校理事長）、三土忠造（立憲政友会）、関直彦（立憲国民党）	
官立学校	帝国大学総長	山川健次郎（東京帝国大学・貴族院勅選議員）、真野文二（九州帝国大学）、荒木寅三郎（京都帝国大学）、福原鐐二郎（東北帝国大学・貴族院勅選議員）	
	その他	手島精一（東京高等工業学校名誉教授）、北条時敬（学習院長）＊2、瀬戸虎記（第一高等学校長）、嘉納治五郎（東京高等師範学校長）、湯原元一（東京女子師範学校長）	手島は 1918 年 1 月 21 日死去時に被免
私立学校関係者		高木兼寛（東京慈恵会医院医学専門学校長・貴族院勅選議員）、鵜澤総明（明治大学理事・同教授・衆議院議員〈立憲政友会〉）、鎌田栄吉（慶応義塾塾長・貴族院勅選議員）、成瀬仁蔵（日本女子大学校長）、平沼淑郎（早稲田大学維持員・同理事・同代表者）	
軍部	陸軍	山梨半造（教育総監部本部長）、菊池慎之助（教育総監部本部長）	菊池は山梨被免に伴う後任（1918 年 10 月 30 日任命）
	海軍	村上格一（教育本部長）、平賀徳太郎（教育本部第一部長）、下村延太郎（教育本部第一部長）	平賀は村上死去に伴う後任（1918 年 7 月 13 日任命）、下村は平賀被免に伴う後任（1918 年 11 月 18 日任命）
官僚	内務省	**水野錬太郎（内務次官・貴族院勅選議員）**、井上友一（東京府知事）	
	大蔵省	市来乙彦（大蔵次官）、神野勝之助（大蔵次官）	神野は市来被免に伴う後任（1918 年 10 月 12 日任命）
	司法省	平沼騏一郎（検事総長）	
	農商務省	上山満之進（農商務次官）、犬塚勝太郎（農商務次官）	犬塚は上山被免に伴う後任（1918 年 10 月 12 日任命）
	内閣書記長官	児玉秀雄（内閣書記官長・貴族院勅選議員）、高橋光威（内閣書記官長・衆議院議員 / 立憲政友会）	高橋は児玉被免に伴う後任（1918 年 10 月 12 日任命）
	法制局長官	有松英義（法制局長官・内閣恩給局長）、横田千之助（法制局長官・衆議院議員・立憲政友会）	横田は有松大任に伴う後任（1918 年 10 月 12 日任命）
実業家		早川千吉郎（三井銀行常務取締）、小山健二（三十四銀行頭取）、荘田平五郎（明治生命保険会社取締役会長・東京海上火災保険会社取締役）	
主務省	幹事長	田所美治（文部次官）＊1、南弘（文部次官）	南は田所被免に伴う後任（1918 年 10 月 1 日任命）
	幹事	牧瀬五一郎（陸軍中央幼年学校教授・文部省参事官兼秘書官）、吉田熊次（東京帝国大学文科大学教授）、下條康麿（内閣書記官・内閣記録課長）、武部欽一（文部大臣官房文書課長・文部省参事官〈普通学務局勤務〉）	
	書記	西内又十郎（内閣属〈書記官室〉）、村田太郎（内閣属〈会計課勤務〉）、石黒覚太郎（文部属〈大臣官房文書課〉・元教育調査会書記）、稲垣茂一（文部属〈普通学務局〉）、菊澤季麿（文部属〈専門学務局〉）、小畑善吉（元教育調査会書記）、小杉醇（内閣属〈書記官室〉）	小杉は西内被免に伴う後任（1918 年 12 月 19 日任命）、菊澤は被免となるが後任なし（1918 年 6 月 6 日被免）

『資料臨時教育会議第一集』より作成。「氏名」欄の括弧内の特記事項は、貴族院議員については議員任命の要件、衆議院議員は所属政党を示す（筆者の判断で「貴族院議員」欄以外に区分した人物もいる）。備考欄に任命日・被免日が記載されていない人物については、臨時教育会議設置（1917 年 9 月 21 日）から廃止（1919 年 5 月 23 日）まで委員を務めている。＊1　田所美治は委員兼幹事長となっており、寺内内閣退陣に際して文部次官を解任され幹事長を退き委員専任となった（1918 年 9 月 21 日に貴族院勅選議員任命）。＊2　学習院は宮内省外局管轄ではあるが便宜上官立学校とした。

【表 2】臨時教育会議への諮問・建議

	回数	名称	委員数	委員長	
諮問	1	小学教育ニ関スル件	9	小松原英太郎	○
	2	高等普通教育ニ関スル件	15	一木喜徳郎	○
	3	大学教育及専門教育ニ関スル件	15	小松原英太郎	
	4	師範教育ニ関スル件	15	小松原英太郎	
	5	視学制度ニ関スル件	9	一木喜徳郎	
	6	女子教育ニ関スル件	9	小松原英太郎	
	7	実業教育ニ関スル件	9	一木喜徳郎	
	8	通俗教育ニ関スル件	15	小松原英太郎	
	9	学位制度ニ関スル件	15	小松原英太郎	○
建議	1	兵式体操振作ニ関スル建議	9	江木千之	
	2	高等教育機関増設ニ関スル建議	9	一木喜徳郎	○
	3	教育ノ効果ヲ完カラシムヘキ一般施設ニ関スル建議	15	小松原英太郎	

『資料臨時教育会議　第一集』27～32 頁より作成。右欄の「○」は水野が主査委員となったものを示す。

【表 3】総会における「小学教育ニ関スル件」の審議日程

回数	年月日		内容	
1	1917 年	10 月 1 日	諮問第 1 号審議	○
2		10 月 3 日	同上	○
3		10 月 4 日	同上	○
4		10 月 6 日	同上	○
5		10 月 25 日	第 1 回答申議決	○
9		12 月 6 日	第 2 回答申議決	○
14	1918 年	5 月 1 日	第 3 回答申議決	

『資料臨時教育会議　第一集』24 頁より作成。右欄の「○」は水野が主査委員となったものを示す。

六）年九月二一日に設置された諮問機関であり、[10] 大正期における教育の諸問題を解決し、教育制度の完成を期して設けられた。ただし、臨時教育会議以前に存在した教育に関する諮問機関である高等教育会議、教育調査会とは、いくつかの点でその性格が大きく異なっていた。

第一に、臨時教育会議は総理大臣の諮問に応えるものと定められた。臨時教育会議以前にも諮問機関として高等教育会議と教育調査会が設置されていたが、[11] ともに文部大臣の諮問に応えるものと定められていた。総理大臣の諮問に直接応えると定められた点で、臨時教育会議は従来の諮問機関よりも高く位置づけられていた。

第二に、その委員構成である。高等教育会議と教育調査会では事実上文部省関係者、教育関係者が委員の中心となっていた。[12] しかし、臨時教育会議では文部省以外の次官も委員となり、[13] 内務省も諮問機関において直接意見を表明することが可能となったのである。[14]

こうして、水野は内務次官として臨時教育会議に参加した。[15] そして、一九一八年四月二三日の内務大臣就任以降も残留し、[16] 原内閣成立後も臨時教育会議廃止まで委員を続けた。[17]

臨時教育会議では、諮問九件と建議三件が審議されたが、水野はそのうち四件に主査委員として加わっている。

なお、議事録をみる限り水野は頻繁に発言を繰り返すタイプではなく、それまでの各委員の発言を整理・要約しつつ、自身の見解を一度にまとめて発言する傾向が見られる。[18]

（二）小委員会・主査委員会による答申案の作成

第一号「小学教育ニ関スル件」は一九一七（大正六）年一〇月一日の第一回総会で寺内首相より諮詢され、その内容は「小学教育ニ関シ改善ヲ施スヘキモノナキカ若シ之アリトセハ其ノ要点及方法如何」である。[19] その後、第二回から第四回総会を経て主査委員会が選定され、[20] そこで審議が開始され答申案が作成された。

臨時教育会議に関する日程通知など公的な記録や参考資料などは、文部省（臨時教育会議の幹事および書記）によって整理され、七冊の簿冊にまとめられた。それらは、現在国立公文書館で保管されている。[21] ただし、総会の議事録は保存されているが、小委員会・主査委員会については議論された項目が摘記された日誌が残されているだけで、[22] 出席者や発言者、その発言内容までは分からない（主査委員会での審議項目は【表4】を参照）。

そこで、本節では小委員会・主査委員会が作成した答申案の比較を行う。なお、水野が積極的に発言したのは第一回答申案（一九一七年一〇月一五日に寺内首相に提出）での審議であることから、主に第一回答申案の作成過程を分析対象とする。[23]

主査委員会においては、第一回答申案を作成するために審議を重ね、一〇月一五日に小委員会によって第一号答申案が起草され、一〇月一八日に主査委員会で小委員会案が討議にかけられた。小委員会案の内容は次の通りであった。[24]

一、市町村立小学校教員俸給ハ国庫及市町村ノ連帯支弁トシ、国庫ハ財政ノ許ス限リ多額ノ支出ヲ為スヘシ

一、国庫支出金ヲ分配支給スルニハ最モ有効ナル方法ニ依ルヘシ

希望事項：市町村立小学校教員俸給ノ国庫及市町村連帯支弁方法ヲ実施セラルルニ就テハ、政府ハ其一部ヲ以テ教員ノ増俸ニ充テ、同時ニ市町村ノ負担ヲ軽減シ、地方ノ財政及税制ヲ整理シ、且校舎ノ設備其ノ他ニ関シ努メテ冗費ヲ節約センコトヲ希望ス

小委員会による答申案からは「財政ノ許ス限リ」など、小学校教育に対する国庫からの支援を強く求めている。ただし、小委員会案の時点では支給方法はまだ決定しておらず「俸給」を支援するために国庫支出を行うことを

【表 4】諮問第 1 号「小学教育ニ関スル件」主査委員会の開催日程

回数	日時		審議対象	概要	備考	水野の出欠
1	1917 年	10 月 8 日	第 1 回答申	小学教員俸給国庫支弁、義務教育年限延長、補習教育、教授改善		
2		10 月 10 日		小学教員俸給国庫支弁、教員優遇	懇談会（非公式）開催	
3		10 月 13 日		小学教育国庫補助	懇談会（非公式）開催、起草小委員（小松原・江木・三土・木場）を任命	
—		10 月 15 日		答申案起草	小委員会として開催	
4		10 月 18 日		起草原案の討議		
5		10 月 24 日	第 2 回答申	教員優遇・改良		
8		11 月 3 日		小学教員優遇・改良、師範教育改善		
11		11 月 8 日		師範教育改善		
12		11 月 10 日		教員改善		
13		11 月 12 日		教員改良、師範教育改善		
14		11 月 14 日		小学改良、義務教育年限延長		
15		11 月 16 日		補習教育義務化		
16		11 月 19 日		補習教育義務化（時期尚早と結論）、義務教育年限延長（時期尚早と結論）	起草小委員（小松原・澤部・嘉納・三土）を任命	
17		11 月 22 日		答申案起草	小委員会として開催	
18		11 月 26 日		起草原案の討議		
19		11 月 28 日		答申案理由書の内容相談（小学教育内容改善・体育問題・徳育問題）		
20		12 月 1 日		徳育問題		
28	1918 年	2 月 2 日	第 3 回答申	学校課程・学校衛生		
29		2 月 9 日		学校教科書改善	懇談会（非公式）開催	
31		2 月 27 日		小学教育内容改善、教科書問題		
32		3 月 8 日		教科書以外の読物、学校と家庭との連絡問題	起草原案の作成を幹事（文部省）に一任	
35		3 月 29 日		幹事（文部省）作成原案の討議	起草小委員会設置（非任命者は不明）	
36		4 月 1 日		主査委員間の意見検討、各種調査実施	会の名称は「委員会」のみ	
39		4 月 6 日		小委員会の調査結果報告、当局者との懇談後に答申案を作成・議決		

「各種調査会委員会文書・臨時教育会議・六日誌」（国立公文書館所蔵、請求番号：委 00218100）「各種調査会委員会文書・臨時教育会議書類・一ノ二雑録（第二）」（国立公文書館所蔵、請求番号：委 00209100）より作成。「概要」については各回で表記に異同が見られるが、史料中の表記に準拠した。史料中に委員の「出席」「欠席」が記載されていない回があるため、主査委員の出欠状況は不明である。

定めただけであった。

一方で、希望事項のなかでは教員増俸を国庫によって行うことで地方の財政負担を軽減することを求めており、教育行政だけでなく地方財政まで踏み込んだ指摘を行っている点は特筆される。

その後、一〇月一八日に主査委員会案が作成され、小委員会案の内容の一部が改められた[25]。

一、市町村立小学校教員俸給ハ国庫及市町村ノ連帯支弁トシ、国庫支出金額ハ右教員俸給ノ半分ニ達セシメンコトヲ期スヘシ

一、国庫支出金ヲ分配支給スルニハ最モ有効ナル方法ニ依ルヘシ

希望事項：市町村立小学校教員俸給ノ国庫及市町村連

帯支弁方法ヲ実施セラルルニ就テハ、政府ハ其ノ一部ヲ以テ教員ノ増俸ニ充テ、同時ニ市町村ノ負担ヲ軽減シ、地方ノ財政及税制ヲ整理シ、且校舎ノ設備其ノ他ニ関シ努メテ冗費ヲ節約センコトヲ希望ス

小委員会案と比べて最も大きな変更点は、第一条の国庫支出について、小委員会案では「財政ノ許ス限リ」であったものを「右教員俸給ノ半分ニ達セシメンコトヲ期スヘシ」に改めたことである。政府の果たすべき役割を明確にし、支出すべき金額も明示したことは画期的で主査委員の意向を強く示していると考えられる。そして、この主査委員会案が一〇月二五日の第五回総会で審議にかけられたのである。

二、水野錬太郎による道府県の小学校教育への意見

（一）市町村における小学校費負担と小学校教員の地位向上

第一章第二節では、小委員会案と主査委員会案の内容を検討した。本章では、主査委員会案としてまとめられた答申案が臨時教育会議の答申となっていく過程における、水野の発言を検討する。先に述べたように、小委員会・主査委員会での水野ら委員の具体的な発言内容はわからない。そこで、本章では総会における水野の発言内容を分析することで、主査委員会案作成時の水野の主張の一端を明らかにする。[26]

水野は、第一回から第三回総会まではあまり発言していないが、第四回・第五回総会では積極的に発言を行った。本節では、第四回総会における発言を取り上げる。[27]

水野の発言全体をみると、主査委員として答申案を作成した立場上、答申案を擁護する発言が中心であった。

また、水野は当初、市町村の小学校費負担の大きさの指摘に終始していた。水野は、道府県の中学校費の教育費負担が全支出の三割程度であることに比べ、市町村の小学校費の負担は「四割乃至五割、中ニハ六割乃至七割ト云フ御話」があると認識していた。そのため「已ムヲ得」ないと前置きしながらも「教育費ト云フモノハ町村ニ於テノ最モ大ナル割合ヲ示シテ居ル費額デアル、ソレデアリマスカラ町村ニ依リマスレバ随分教育費ノ大ナル

ニ窮シテ居ル」ことに問題があると捉えている。

また、教員の俸給が少ないだけでなく「今日デハ小学校ノ教員ト云フト極メテ低イ、社会上ノ地位モ低イ、又人ガ之ヲ尊敬スルコトモ少」なく「甚ダシキハ当時ノ有力者ノ為ニ進退ヲセラレル」など、教員の立場が不安定であることも問題視している。「物質的優遇ノミヲ以テ足レリトシナイノデ、謂ハユル精神的優遇ノ途ヲ開クコト」がないと、人材確保にも困難をきたすと述べている。

第四回総会における水野の発言を総合すると、以下のようにまとめることができる。まず「一面ハ今日ノ地方費ハ重イ、ソレデアルカラ地方費ヲ軽減スルノ意味ニ於テ教育費ヲ国庫カラ補助シテ貰ウ、若クハ支弁シテ貰フ、一面ノ観察ハ、今日以上ニ小学教員ト云フモノヲ改善セネバナラヌ、改善スルニ付テハ費用ガ要ル、ソレデアルカラ其費用即チ小学教育ヲ改善シ、或ハ教員ヲ良クスルト云フ意味ニ於テ国庫ノ支弁ヲ仰グ、若クハ補助ヲ仰グト云フヤウナ両様ノ観察ガアリマス」と国庫支出の意義が強調されている。

一方、市町村財政との関係においては「一方ニ於テハ地方費ヲ軽減シ、一方ニ於テハ教育ニ関スル設備ヲ改善シヤウト云フ両様ノ意味ヲ以テ出テ居ルノデアラウト思ヒマスガ、ソレハ何レニ致シマシテモ今日ノ行政ニ於テ国費ヲ以テ相当ノ支弁ヲ為シ、相当ノ補助ヲ為スト云フノデアリマスレバ、此国費ヨリ支出致シテ市町村ノ財政ヲ助ケルト云フコトニ付テノ実際問題ト致シマシテハ余程攻究ヲ要スルコトデアラウト思フ」として市町村財政のために国庫支出を行うことに対しては「攻究ヲ要スル」と述べており、この時点では強く主張しているわけではなかった。

そして「小学教員其モノヲ国家ノ官吏ト同ジニシテ国費ヲ以テ其俸給ヲ支弁スルト云フ方法ヲ執ッタラ宜カラウ、詰リ市町村ニ補助スルノデナクシテ、小学教員ヲ国家ノ官吏トシテ国費ヲ以テ支弁スル役人トシタイト云フノデアリマス」と述べており、単に金銭的な支援を行うだけでなく、支出方法の工夫によって、教員の社会的な地位の向上を図ろうとしていたのである。

（二）小学校教育費の国庫補助による市町村財政の支援

第四回総会において水野は、教育費がいかに市町村財政を圧迫しているかを指摘し、その救済策として国庫補

助を行うことが必要であることを主張していた。ただし、市町村財政については踏み込んだ発言を行っていたというわけではない。

しかし、第五回総会では、市町村における小学校費の財政負担をいかに軽減するかについて、より踏み込んだ発言を行っている[28]。冒頭から「元来今日小学校教員ノ俸給ハ国庫カラ之ヲ一部支弁若クハ補助セントスルノハ小学教員ノ品位及ビ地位ヲ高メルト云フコトモ固ヨリ一ツノ理由デアルト云フコトハ疑ヒモナイ、併ナガラ同時ニ今日市町村ノ教育費ニ費ス額ガ課題デアルカラ市町村ノ負担ノ軽減ヲシタイト云フコトモ理由ノヒトツニナッテ居ルト云フコトハ疑ヒハナイ」と述べている。ここからも、第五回総会での主張の要点が、市町村財政をめぐるものであることは明らかである。

まず、教員俸給の支出方法は「国庫及ビ市町村ノ連帯支弁トスルト云フ主義」をとっている。そのなかでも水野は、「若シ此趣旨ナクシテ千万円ナリ千五百万円ナリ全部小学校ノ俸給ニ充テルト云フヤウナコトデアリマシタナラバ、是ハ如何ニシテモ賛成スルコトハ出来ナイ」としている。「国家財政ノ急ヲ告グルノ時ニ当リマシテ千万円若クハソレ以上ノ額ヲ市町村ノ教育費ノ一部ニ充テヤウト云フコトハ必ズシモ之ヲ全部市町村ノ教員ノ俸給ニ充テルト云フヤウナコトデナクチヤナラヌト、斯ノ如キコトデアレバ是ハ余程考ヘナケレバナラヌコトト思フ」と、教員俸給を全額国庫でまかなうことについては難色を示していたのである。

水野の考えでは、「是等ノ額ガ市町村小学教員ノ俸給ノ一部ニ充テラレルモノトシテ国庫ヨリ支出セラレルコトニナリマスルナラバ、之ヲ此機会ニ市町村ノ負担モ軽減スルガ宜シイ、同時ニ市町村ノ財政及ビ税制ヲ整理スルコトニシタガ宜シカロウト思フテ居ル」のである。俸給の一部を国庫支出でまかなうことで「市町村ノ財政及ビ税制」の議論につなげることを期待していた。

それが、主査委員会案の希望事項である「政府ハ其ノ一部ヲ以テ教員ノ増俸ニ充テ、同時ニ市町村ノ負担ヲ軽減シ、地方ノ財政及税制ヲ整理シ、且校舎ノ設備其ノ他ニ関シ努メテ冗費ヲ節約センコトヲ希望ス」という「此両様ノ目的ヲ考ヘナケレバナラヌ」のいう主張につながるのである。すなわち、教員俸給を行ったのち「残リガアッタナラバ市町村ノ負担ヲ軽減シロト云フヤウナコト

デハ甚ダ意ヲ得」ず「此原案ニ書イテアルヤウナ趣旨ガ恰モ今日ノ時勢ニ適シテ居ルコトデアラウト考ヘルノデアリマス」というのである。

一方で水野は「地方ノ財政及ビ税制ヲ整理シ云云ト云フヤウナコトハ教育会議ノ決議トシテハ不適当デハアルマイカ、ソレハ一体余計ナコトヲ言ッテ居ル」、「教育会議トシテハ教育ノコトヲシテ居レバ足リテ居ル」とも述べている。この点は「主査委員デモ小委員会デ其説モ出タ」ものであり、水野自身も「御尤モ」と認識していた。臨時教育会議における議論としては「余計」とされていたと考えられる。

しかし、主査委員会案の希望事項で明確に市町村財政に対して指摘されていることから、結局は財政についての提言は「余計」なものと切り捨てられることはなかったようである。いずれにせよ、水野は「国費カラ支出ナイ（ママ）ニ致シマシテモ」、「地方ノ財政一般ニ於テハ整理ヲ要スベキ時機デアル」ことは強く認識していた。

むしろ水野としては「詰ラナイ教育ニ使ハナイデ、市町村ノ方デハソレニ伴ッテ地方ノ財政税制ヲ整理スルヤウニシロト云フヤウナ希望デアリマスカラ、此希望ハ決シテ無理ナ希望デ、之ヲ言フコトガ必ズシモ害ガアルコトデハナイト云フ考ヲ持チマシテ、斯カルコトヲ言フコトハ教育会議ト致シマシテモ、教育費ノ一部ヲ国庫カラ支出スル、ソレハ支出スルニ付テハ其使ヒ方ハ斯ウ云フ風ニシテ貰ヒタイ、ソレヲ使フニ付イテハ今日問題トナッテ居ル所ノ地方ガ財政税制ノ整理ヲシタラ宜イデハナイカ」というように、地方行財政を所管する内務次官としての立場から力説し、市町村の財政整理が議論の中心に移っていったのである。

本章でみた水野の発言をまとめると、まず小学校教員俸給の国庫補助は「小学教員ノ品位及ビ地位ヲ高メル」ことと「市町村ノ教育費」負担の軽減のために必要であると主張していた。一方で、俸給の全額を国庫支出でまかなうことには慎重であった。

市町村財政・税制については、第四回総会の時点では「攻究ヲ要スル」と述べるにとどめていたが、第五回総会では、転じて市町村財政の負担軽減の必要性を主張した。また、臨時教育会議全体としても、当初は市町村財政・税制に関する提言を行うことは「不適当」としており、水野も同意していた。しかし、最終的な答申では提

言を行うことも答申の希望事項に反映されていたことから、「妥当」であると判断されたようである。

そして、発言の最後には「財政税制ノ整理」を市町村に求めるなど、臨時教育会議委員というより内務次官としての立場を優先する傾向が見られた。

三、臨時教育会議答申と「市町村義務教育費国庫負担法」

（一）臨時教育会議答申の成立とその内容

前章では主査委員会の答申案の審議における水野の発言を検討した。すでに指摘したように、臨時教育会議における水野の発言と密接に関わる答申は、第一回答申に相当する。そこで本節では、水野の発言と第一回答申の内容を比較する。第一回答申は次の二項目と希望事項からなっている。[29]

一、市町村立小学校教員俸給ハ国庫及市町村ノ連帯支弁トシ、国庫支出金額ハ右教員俸給ノ半分ニ達セシメンコトヲ期スヘシ

一、国庫支出金ヲ分配支給スルニハ最モ有効ナル方法ニ依ルヘシ

希望事項：市町村立小学校教員俸給ノ国庫及市町村連帯支弁方法ヲ実施セラルルニ就テハ、政府ハ教員ノ増俸ヲ行フト同時ニ市町村ノ負担ヲ軽減シ、地方ノ財政及税制ヲ整理シ、且校舎ノ設備其ノ他ニ関シ努メテ冗費ヲ節約センコトヲ希望ス

これらの二項目と希望事項には理由書も添えられており、以下の二点の理由が述べられていた。[30]

第一に、小学校教育費が市町村によって負担されていることで教員の俸給が薄給となるだけでなく「町村有力者ノ左右スル所」に置かれることとなり、教員の地位が「安固」とならないことが問題点として挙げられている。そのため「国民教育ノ改善ヲ期セントセハ、教員ノ待遇ヲ厚ウシ、且ツ其ノ地位ヲ確保スルコトヲ要」し、具体的な方策として小学校教員の俸給の半分程度を国庫から支弁することが必要であると主張している。

第二に、「市町村ノ小学校教育費ニ対スル負担苛重ニシテ市町村ノ財政ヲ困難ナラシムルモノアリ、故ニ市町村立小学校教育費ニ対シ、国庫ヨリ相当ノ金額ヲ支出シ、

以テ教育費ニ対スル市町村ノ負担ヲ軽減シ、其ノ財政ヲ緩和スヘシト云フニ在リ」と地方財政への補助も重視している。[31]

ここからわかるように、臨時教育会議が強調しているのは、教員の経済的・社会的な面での環境改善の必要性であり、その手段としての国庫補助・支出である。それは小委員会案や主査委員会案の内容を維持したものであり、より具体的に示したものである。

特に注目すべきは、市町村財政を教育費の負担から解放することを国庫補助の目的であると明確に示した点である。この点は、水野が総会において最も強く主張した点でもある。したがって、完成された第一回答申は、水野の主張した内容がほぼすべて含まれることとなったといえる。

以上の点から、市町村財政・税制に対する主張について、水野は自身の主張を一時的に後退させた場面もあった。しかし、臨時教育会議が答申において小学校教育を財政的にいかに取り扱うかという方針を定めるにあたっては、地方財政・税制の整理の必要性の提言を復活させ、最終的には水野の主張が答申に大きく反映されたのである。

(二)「市町村義務教育費国庫負担法」における補助の方針

最後に本節では臨時教育会議による答申の内容と「市町村義務教育費国庫負担法」の内容を比較する。

「はじめに」でみたように、大正七年三月二六日法律第一八号「市町村義務教育費国庫負担法」[32]が公布された。だが、これだけで国庫補助が実施されたわけではない。同年四月八日文部省訓令第四号「市町村義務教育費国庫負担法施行規程」[33]、同年四月一五日勅令七五号[34]（勅令は基本的に法令文がないが、公布の目的として「朕市町村義務教育費国庫負担法ノ施行ニ関スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム」と定められている）を公布することによって国庫補助が実施された。

まず「市町村義務教育費国庫負担法」のうち、水野の主張や臨時教育会議の答申の内容と関わる条文を抜き出す。[35]

第一条　市町村立尋常小学校ノ正教員准教員ノ俸給ニ要スル費用ノ一部ハ国庫之ヲ負担ス

第二条　前条ノ規定ニ依リ国庫ノ負担トシテ支出スヘキ金額ハ毎年度千万円ヲ下ラサルモノトス

第三条　国庫支出金ハ第四条ノ規定ニ依リ交付スル金額ヲ除キ、其ノ半額ハ前年六月一日ニ於ケル市町村立尋常小学校ノ正教員及准教員ノ数ニ、他ノ半額ハ前年六月一日ニ於ケル市町村ノ就学児童数ニ比例シテ之ヲ市町村ニ交付ス

第四条　文部大臣ハ国庫支出金ノ十分ノ一ヲ超エサル範囲内ニ於テ資力薄弱ナル町村ニ対シ特ニ交付金額ヲ増加スルコトヲ得

「市町村義務教育費国庫負担法」の第一条は法律の目的を定めたものだが、その内容から同法が臨時教育会議の答申に基づいて定められたものであることがわかる。まず、第一条は臨時教育会議の第一回答申第一項の内容が踏まえられている。また、答申第二項における「国庫支出金額ヘ教員俸給ノ半分ニ達セシメンコト」が、第二条の「毎年度一千万円ヲ下ラサルモノトス」に反映された。そして、第三条・第四条については、答申第二項の「有効ナル方法」を具体的に定めたものと考えられる。なお「市町村義務教育費国庫負担法施行規程」は「市町村義務教育費国庫負担法」を実施する際の基準を定めている[36]。

次に、勅令第七五号の条文のうち「市町村義務教育費国庫負担法」を実際に運用することに関わる条文を抜き出す[37]。

第一条　文部大臣ハ市町村義務教育費国庫負担法第三条及第四条ノ規定ニ依リ国庫支出金ヲ交付スル場合ニ於テ、其ノ支途（使途）ニ関シ必要ナル事項ヲ市町村ニ命スルコトヲ得、地方長官ハ文部大臣ノ委任ニ依リ前項ノ事項ヲ市町村ニ命スルコトヲ得

この法令は勅令であり、法律よりも高く位置づけられていた。勅令では文部大臣に強い権限が与えられており、市町村に国庫支出金の使途を指定・遵守させることが可能とされた。また、その権限は文部大臣から地方長官へ委任することができるとされた。この勅令の存在によって、文部大臣（文部省）が所管する国庫支出金を運用することが地方長官（内務省）でも可能となった。すなわち、地方長官が国庫支出金の使途を命じる形をとって、市町村財政・税制の整理を実施することができるようになったのである。

このように国庫支出金を市町村財政・税制の整理に利

用することは、水野が臨時教育会議で強く主張していたことである。こうして水野の主張は、小委員会案・主査委員会案・答申、さらには「市町村義務教育費国庫負担法」に反映されることとなったのである。

おわりに

本稿は、水野の臨時教育会議での発言や臨時教育会議の答申の内容と、「市町村義務教育費国庫負担法」の条文を比較することによって、小学校教育における水野の教育観を検討した。

寺内内閣が臨時教育会議を設置したことによって、文部省以外の官僚も教育諮問機関に加わることが可能となり、水野は委員として意見を表明する機会を得た。水野は、小学校教育の抱える問題を小学校教育費が市町村財政を圧迫していることと、教員の社会的地位の低さ、職業としての不安定さであると捉えていた。そしてその解決のために、小学校教員の俸給を国庫からも支出すること、教員の地位の向上を訴え「物質的優遇ノミヲ以テ足レリトシナイノデ、謂ハユル精神的優遇ノ途ヲ開クコト」を主張した。

だが水野の主張において、最も特徴的であったのは、国庫支出を利用した市町村財政・税制の整理を求めたことであった。教員俸給を補助した「残リガアッタナラバ市町村ノ負担ヲ軽減シロト云フヤウナコト」では不十分であるとまで主張している。この主張は、明らかに教育行政ではなく地方財政・税制に重点を置いた主張であり、臨時教育会議内でも「教育会議トシテハ教育ノコトヲシテ居レバ足リテ居ル」といった意見も見られた。

そして、小委員会案・主査委員会案に記されていた「政府ハ其一部ヲ以テ教員ノ増俸ニ充テ、同時ニ市町村ノ負担ヲ軽減シ、地方ノ財政及税制ヲ整理シ、且校舎ノ設備其ノ他ニ関シ努メテ冗費ヲ節約センコトヲ希望ス」という内容が、答申でも「政府ハ教員ノ増俸ヲ行フト同時ニ市町村ノ負担ヲ軽減シ、地方ノ財政及税制ヲ整理シ、且校舎ノ設備其ノ他ニ関シ努メテ冗費ヲ節約センコトヲ希望ス」とほぼ同内容で維持された。内務官僚としての水野の主張が答申に強く反映されたといえよう。

さらに、「市町村義務教育費国庫負担法」で教員俸給の補助が示される一方で、勅令第七五号という独立した

法令のなかで、文部大臣が「其ノ支途ニ関シ必要ナル事項ヲ市町村ニ命スルコトヲ得」という条文を定め、加えて、地方長官が「委任」を受ける形で市町村に命じることが可能となった。すなわち、地方長官が教育費の補助を背景に市町村財政・税制に深く関与することが可能となったのである。これも、臨時教育会議において水野が強く主張していたことである。

以上のことから、水野が内務官僚として臨時教育会議に加わって以降主張し続けた、国庫補助を背景に地方長官が市町村財政・税制に関与するという構想は「市町村義務教育費国庫負担法」に結実し、実際の政策として実行されていくこととなったのである。水野は終始一貫して内務官僚としての立場を維持し続けたといえよう。

その約一〇年後の一九二九（昭和四）年に、水野は国士舘専門学校初代専門学校長に就任する。臨時教育会議の時点で内務官僚的な立場を貫いた水野の教育観は、校長就任までに「変化」したのだろうか。この点は、水野がどのような「教育者」として国士舘と向き合ったのかを理解するうえで重要な視点といえるだろう。

〈注〉

（1）衆議院・貴族院あわせて会期は一九一七年（大正六）一二月二七日～一九一八年三月二六日であった。

（2）一九一八年三月二六日に、大正七年三月二六日法律第一八号として「市町村義務教育費国庫負担法」が公布されたが、帝国議会で審議されている際は、「市町村立小学校教員俸給国庫負担法案」として審議されていた。

（3）西尾林太郎「官僚政治家・水野錬太郎」（尚友倶楽部・西尾林太郎編『水野錬太郎　回想録・関係文書』、山川出版社、一九九九年）。

（4）漆畑真紀子「国士舘を支えた人々　水野錬太郎」（国士舘史資料室編『国士舘研究年報　楓原』第四号、学校法人国士舘、二〇一二年）。

（5）西田彰一「水野錬太郎と国士舘の教育―国士舘の高等教育機関化への関わり」（国士舘史資料室編『国士舘研究年報　楓原』第一三号、学校法人国士舘、二〇二一年）。

（6）稲葉継雄『朝鮮植民地教育政策史の再検討』（九州大学出版会、二〇一〇年）。李炯植『朝鮮総督府官

僚の統治構想』（吉川弘文館、二〇一三年）。

（7）前掲注5西田「水野錬太郎と国士舘の教育―国士舘の高等教育機関化への関わり」。

（8）水野の入省は鉱業条例の改正のために法学士が必要されたことが背景にあり、水野は鉱業条例の改正案、鉱業法案を作成した。また、山林局において山林法案の起草も行った。

（9）前掲注3西尾「官僚政治家・水野錬太郎」。

（10）「大正六年九月二〇日勅令一五二号臨時教育会議官制」。

（11）高等教育会議の設置を定めた「明治二九年一二月一七日勅令第三九〇号高等教育会議規則」の第一条で「高等教育会議ハ文部大臣ノ監督ヲ受ケ教育ニ関スル事項ニ就キ文部大臣ノ諮詢ニ応シ意見ヲ開申ス」とされた。また、教育調査会の設置を定めた「大正二年六月一三日勅令第一七六号教育調査会官制」の第二条で「教育調査会ハ教育ニ関スル重要ノ事項ニ付文部大臣ノ諮詢ニ応シテ意見ヲ開申ス」とされた。

（12）「高等教育会議規則」の第三条では議員を「帝国大学総長及各分科大学長、文部省各局長、高等志願学校長及女子高等師範学校長、高等商業学校長東京工業学校長及東京美術学校長、高等学校長一人、学識アル者又ハ教育事業ニ閲歴アル者七人以内」と定めている。また、「教育調査会官制」は会員の条件を定めていないが、実業家（渋沢栄一・荘田平五郎）、陸海軍人、衆議院・貴族院議員が会員に加えられるにとどまり、教育に直接関与しない内務省などは参加できない状況であった。

（13）現役官僚としては、内務次官（水野錬太郎）・大蔵次官（市来乙彦、のち神野勝之助）・検事総長（平沼騏一郎）・農商務次官（上山満之進、のち犬塚勝太郎）・内閣書記長官（児玉秀雄、のち高橋光威）・法制局長官（有松英義、のち横田千之助）が委員に就任した。

（14）なお、衆議院議員についても主要な政党から委員を多数任命しており、議会対策を意識した委員構成であったと指摘されている（文部省『資料臨時教育会議　第一集（総覧）』、一九七九年、三七頁）。

（15）東京府知事である井上友一も内務官僚にあたるが、

水野と同時に委員に就任したことを踏まえると、自治体首長として委員に加わっていたと位置づけられる。

(16) 水野の内務大臣就任後は、小橋一太が後任の内務次官となった。

(17) 原敬内閣の成立に伴い、検事総長平沼騏一郎と内務次官小橋一太を除く各省次官は交代した。そのため、臨時教育会議の委員も平沼以外すべて原内閣の各省次官に交代した。そのため、水野だけが寺内内閣以来の行政当局者の立場として委員に残留した。

(18) 【表3】に示した「小学教育ニ関スル件」の総会議事録は「各種調査会委員会文書・臨時教育会議書類・二ノ一速記録綴自第一号至第十号」(国立公文書館所蔵、請求番号：委〇〇二一一一〇〇)および「各種調査会委員会文書・臨時教育会議書類・二ノ二速記録綴自第十一号至第二十号」(国立公文書館所蔵、請求番号：委〇〇二一一二〇〇)に綴じられている。また、文部省『資料臨時教育会議』(一九七九年)にも議事録は復刻掲載されている。本稿では煩雑さを回避するため、以下の注記では議事録の号数・頁数のみ掲載した。また、一部を除き旧字・異体字は新字に、繰り返し記号を書き改めた。適宜句読点を付した。

(19) 臨時教育会議では諮問文は抽象的な内容にし、具体的な政策・方針の可否を問うことが避けられた。これは、政策・方針への批判に議論が矮小化することを避けるためである。

(20) 主査委員は水野のほかに澤柳政太郎・江木千之・小松原英太郎(委員長)・木場貞長・関直彦・大津淳一郎・三土忠造・嘉納治五郎である。また、第一回・第二回・第三回答申案のすべてがこれら九名の主査委員によって審議されている。

(21) 総会の議事録は活字印刷されており、印刷の都度委員など関係者に配布されていたと考えられる。

(22) 「各種調査会委員会文書・臨時教育会議書類・六日誌」(国立公文書館所蔵、請求番号：委〇〇二一八一〇〇)。ただし、「事務分担申合セ」には「速記ハ総会ノミナラス主査委員会ニモ之ヲ付スコト」と定められており、残された日誌が速記録にあた

ると考えられる。

(23) 水野は第二回・第三回答申案の審議中はあまり発言を行っていないが、第二回答申案（一九一七年一一月二二日作成）では、①国民道徳の涵養、知能・体力の向上、②小学校教員の改良、③視学機関による指導監督の充実、④補習教育の改善、⑤義務教育年限延長の時期尚早論、が議決されている。また、第三回答申案（一九一八年四月一日作成）では、①尋常小学校・高等小学校の教科課程の整理、②小学校教科書の国民教育・道徳教育の徹底と科目間での連絡関係の改善、③中等学校入学のため準備教育的性格の矯正、④学校と家庭・社会との協力関係の構築方法の攻究、⑤体育の教育方法の調査研究、が議決された。

(24) 「各種調査会委員会文書・臨時教育会議書類・一ノ二雑録（第二）」（国立公文書館所蔵、請求番号：委〇〇二〇九一〇〇）。

(25) 「各種調査会委員会文書・臨時教育会議書類・一ノ二雑録（第二）」。

(26) 水野は主査委員会案に対する賛否を明確に述べている。主査委員でもあった水野の総会での発言は主査委員としての水野の主張を一定程度反映したものと考えられる。

(27) 『臨時教育会議速記録　第四号』五四～六四頁。以下、水野の発言はここで示した箇所から引用している。

(28) 『臨時教育会議速記録　第五号』六二～六六頁。以下、水野の発言はここで示した箇所から引用している。

(29) 「各種調査会委員会文書・臨時教育会議書類・一ノ二雑録（第二）」。

(30) 「各種調査会委員会文書・臨時教育会議書類・一ノ二雑録（第二）」。

(31) 先に見た通り、水野は「市町村ノ負担ヲ軽減シ、地方ノ財政及ビ税制ヲ整理シト云フヤウナコトハ教育会議ノ決議トシテハ詰リ要ラヌコトデアル、余計ナコトデアルト云フ御説モアッタノデ、現ニ是モ主査委員デモ小委員会デ其説モ出タ、私モ是ハ御尤モダト思フ、余計ナコトヲ教育会議デ言ハナクテモ宜イデハナイカ」と自己の主張を後退さ

せる発言もしている。

(32)『官報　第一六九二号』（印刷局、一九一八年三月二七日）五五三頁。

(33)『官報　第一七〇一号』（印刷局、一九一八年四月八日）一七六～一七七頁。「市町村義務教育費国庫負担法施行規程」は北海道庁・府県への訓令という形式がとられている。なお、同日に出された大正七年四月八日文部省訓令第三号は地方長官への訓令として市町村義務教育費国庫負担法の運用の心構えを説いている。「惟フニ近時我国義務教育ノ進捗ニ伴ヒ市町村ノ経費著シク増加シ、之カ軽減緩和ノ途ヲ講スルノ要アリ、而モ又将来益々義務教育ノ改善ヲ図リ、其ノ振興ヲ促し以テ国家ノ根底ヲ鞏固ニシ、国力ヲ充実シ、国運ヲ伸長セシムルノ方策ヲジュリツスルハ洵ニ一日ヲ緩ウスヘカラサルノ急務タリ、是レ本法ノ制定ヲ見ルニ至レル所以ナリ・・・（中略）・・・地方長官ハ本法制定ノ趣旨ヲ体シ、小学教育ノ実況ニ鑑ミ、指導督励其ノ宜シキヲ制シ、以テ本法ノ施行ヲシテ最モ適切有効ナラシメ国民教育改善ノ効果ヲ挙ケンコトヲ努ムヘシ」と記されており、文部省は地方長官に対して第一次世界大戦後の社会・国際情勢への対応のために小学校教育の充実を求めていた。

(34)『官報　第一七〇八号』（印刷局、一九一八年四月一六日）三九一頁。

(35) 法令は全五条、付則一条で構成されている。

(36) 規定は全六条で構成されており、地方長官は正教員数・准教員数・就学児童数の調査し文部大臣に報告する（第一条）、国庫支出金は四月・一二月の二回に分けて半額ずつ市町村に交付する（第二条）、市町村の廃置分合・境界変更時には、それ以前の分配割合に基づいて国庫支出金を分配交付する（第三条）、尋常小学校設置のために学区を新設するときは国庫支出金を分配交付する（第四条）、地方長官は市町村別に交付した国庫支出金額を文部大臣に報告する（第五条）、第四条に関わる国庫支出金の交付については別に定める（第六条）と、市町村義務教育費国庫負担法を適正に運用する基準が定められた。なお、大正七年四月八日文部省訓令第三号は地方長官への訓令として、市町村義務教

育費国庫負担法の運営の心構えを説いている。「惟フニ近時我国義務教育ノ進捗ニ伴ヒ市町村ノ経費著シク増加シ、之カ軽減緩和ノ途ヲ講スルノ要アリ、而モ又将来益々義務教育ノ改善ヲ図リ、其ノ振興ヲ促し以テ国家ノ根底ヲ鞏固ニシ、国力ヲ充実シ、国運ヲ伸長セシムルノ方策ヲ樹立スルハ洵ニ一日ヲ緩ウスヘカラサルノ急務タリ、是レ本法ノ制定ヲ見ルニ至レル所以ナリ・・・（中略）・・・地方長官ハ本法制定ノ趣旨ヲ体シ、小学教育ノ実況ニ鑑ミ、指導督励其ノ宜シキヲ制シ、以テ本法ノ施行ヲシテ最モ適切有効ナラシメ、国民教育改善ノ効果ヲ挙ケンコトヲ努ムヘシ」とあり、文部省は地方長官に対して第一次世界大戦後の社会・国際情勢への対応のために小学校教育の充実を求めていた。

(37) 規定は全二条、付則一条で構成されている。

全国大学史資料協議会東日本部会研究会　講演録

（二〇一三年一月二六日・於国士舘）

企業アーカイブズと大学アーカイブズ

―企業史料協議会での経験より―

政経学部教授、企業史料協議会副会長
阿部　武司

会場校挨拶（国士舘史資料室長・長谷川均）

国士舘大学の長谷川と申します。会場校を代表して、ご挨拶を申しあげます。

本日は、一月末のご多忙のところ、ようこそ国士舘大学へお越しいただきましてありがとうございます。

全国大学史資料協議会東日本部会、第一三一回研究会の会場校となり、大学史資料の専門家として日々の実務にあたられている皆さまを、本日お迎えできることを大変光栄に思っております。ご参集に感謝を申し上げるとともに、この研究会の企画・運営にご協力をいただきました会長校はじめ事務局校の方々にも厚く御礼を申し上げたいと思います。

本学での研究会の開催は、二〇一一年一月二七日に開催された第七四回以来、一二年ぶりとなるそうです。その際は、室長であった阿部昭先生のもとで、今の資料室が発足した直後でありまして、当面の目標であった百年史編纂の計画概要について、お話をさせていただいたようです。おかげを持ちまして、国士舘は二〇一七年に創立一〇〇周年を迎え、また「国士舘百年史」の編纂も完了して、史料編二冊、通史編一冊を刊行することができました。ご尽力・ご協力いただきました方々への感謝とともに、無事に刊行に至りましたこと大変嬉しく思う次第です。

さて本日は、私の挨拶の後、本学政経学部教授の阿部武司先生の特別講演からとなりますが、講演に先立って、阿部先生のご紹介をさせていただきます。

阿部先生は、東京大学で経済学博士を取得され、長きにわたり大阪大学にて教鞭をとられました。経済学部長兼大学院経済学研究科長、また大阪大学文書館設置準備室長、大阪大学アーカイブズ室長等の要職を歴任され、大阪大学名誉教授となられた二〇一四年から国士舘大学に籍を置かれています。この三月で定年退職となられます。ご専門は、近代日本経済史・比較経営史で、経営史学会の元会長、企業史料協議会の副会長も務めておられます。

アーカイブズの分野において第一線で活躍されている阿部先生には、本日「企業アーカイブズと大学アーカイブズ　―企業史料協議会での経験より」をテーマにご講演をいただきます。その後は、国士舘史資料室の熊本から「百年史編纂事業と国士舘史資料室の取り組み」と題して、近年の当室の活動について講演いたします。そして最後に施設見学として、国登録文化財でもあります国士舘大講堂をご覧いただく予定としております。

短い時間ではございますが、本日の研究会が皆様にとりまして実り多きものになれば幸いでございます。簡単ではございますが、挨拶とさせていただきます。

講演（政経学部教授・阿部武司）

はじめに

阿部でございます。私も大学史資料協議会東日本部会の個人会員でして、コロナ禍のため長らくご無沙汰しておりましたが、今日久しぶりに皆さんとお会いできるのを大変ありがたく思っております。それでは時間も限られておりますので、「企業アーカイブズと大学アーカイブズ」というテーマで、お話をさせていただきます。

さきほど長谷川先生からご紹介いただきましたけれども、私の前の職場は大阪大学でございまして、今から二〇年近く前の話になりますが、二〇〇四年に国立大学が法人化されました。その春から足掛け一〇年、大阪大学にアーカイブズを作るという仕事に従事しました。その間、二〇一二年一〇月に「大阪大学アーカイブズ」が発

足し、次いで今から一〇年前の二〇一三年四月にそれが内閣総理大臣による国立公文書館等の指定を受けて任務を達成しました。その一年後に初代室長の任を終えて、国士舘大学に移籍いたしました。この間の詳しいことは拙著『アーカイブズと私―大阪大学での経験―』（二〇二〇年二月、クロスカルチャー出版）に書いております。

私が大阪大学でこの仕事をする前には、実はアーカイブズを使うだけで、専門知識をまったく持っていなかったのです。その状態でいきなり「アーカイブズを作れ」と言われましたので、京都大学の西山伸先生、名古屋大学の堀田慎一郎先生、広島大学の小池聖一先生、九州大学の折田悦郎先生、こういった先学に教えを仰ぎました。大阪大学にも大西愛さん（大阪大学出版会）、米田該典先生といったアーカイブズに詳しい方々がおられ、そうした皆様のお勧めによりまして、はっきり覚えていないのですが、二〇〇四年か二〇〇五年に全国大学史資料協議会西日本部会の個人会員に加えていただきました。二〇〇六年夏に、大阪大学アーカイブズの前身である大阪大学文書館設置準備室という組織ができた時にスタッフとして菅真城さんを講師としてお迎えし、菅さんの提言を受けて大阪大学文書館設置準備室が機関会員としてこの大学史資料協議会の西日本部会に加入しました。その後二〇一四年四月に、私が国士舘大学に移ってからは、東日本部会に個人会員として入れていただいている、というわけです。

大学史資料協議会の機関会員は、国立・私立を問わず、まずその所属する大学の沿革と現状に関する資料を集めて保管して、主に大学史執筆の際の資料としてそれらを提供します。さらに資料の展示であるとか、授業や講演、それからホームページなどを通じてその学校に関する情報を学内外に広く発信します。これらは皆様も日々行われているのではないかと思います。国公立大学の機関会員の多くは、それらに加えて公文書管理法に基づく法人文書の選別・受入・保管・公開を実施しており、そうし

た大学が増えてきているのもご存知の通りです。

他方で私は、二〇〇九年一月から二〇一二年末までの四年間、さきほどご紹介いただきました経営史学会の会長を務めたご縁で、この学会と関係が深い日本経営史研究所の評議員を二〇一一年四月以来、今までお引き受けしています。また同じ年の五月には、この研究所と深い関わりがある企業アーキビストの団体、企業史料協議会の副会長に就任し、現在も同職を務めております。

1. 企業史料協議会について

(1) 企業史料協議会の成り立ち

今日は、企業史料協議会を中心にお話したいと思います。この協議会は、一九六八年にできた日本経営史研究所の関係者を含む、会社史や企業博物館に関心を持つ人々が一九八一年一一月に作った企業アーキビストの任意団体です。企業（またはビジネス）アーキビストとは何かといいますと、実は該当する日本語がないのですけれども、企業史料協議会のホームページの文言を借りれば、「企業史料の収集・保存・管理、企業史の編纂に関係する」人びとを指しています。その企業史料協議会は、二〇二一年に創立四〇周年を迎えましたが、同年末時点では、主に会社企業、とくに大企業が中心ですが、機関会員が九二、それから個人会員が五五名です。

関連団体である日本経営史研究所の主要業務は何かといいますと、これも研究所のホームページから引きますと、①経営史に関する資料の調査・収集・公開　②経営史に関する研究および成果の発表、③会社史・団体史等の研究・編集の受託、④経営史関係図書の編集・制作・出版、⑤優秀会社史の選考　⑥経営史に関する研究者の育成、となっています。

経営史といいますのは主に企業の経営の歴史を研究する学問です。ここにあがっている会社史または社史について触れておきますと、図書館に行かれるとお気付きになることもあると思いますが、日本ではたくさんの会社が社史を熱心に作ってきた。これは外国にはあまりない慣行なのですが、置物のような立派な体裁のものが多く、取引先企業などへの贈呈が普通に行われていて、市販されることはほとんどありません。残念ながら実際に読まれることは少ないのですが、手に取って読んでみると有

益で面白い情報にあふれています。

（2）企業史料協議会の役割

さて企業史料協議会は、どういった仕事をやっているかというと、①「企業史料の管理」、②「企業博物館の設立・運営」、③「会社史の編纂」とホームページにあります。実際には、社史を作った経験がない企業がその作り方を知りたい場合に、あるいは先ほど説明したとおり、協議会と関連が深い日本経営史研究所が社史の編纂に深く関与していますので、経営史研究所を通じて社史を作った企業が、社史を作るプロセスで、あるいは社史ができたあとに、集めた史料をその後どうしてよいかわからない場合に会員になって、すでに入会している企業の方々と交流し知見を深めることが活動の中心でした。

ただし、二〇世紀末から二一世紀になりますと不況が長く続いたことを背景として、会社のほうも今までのように立派な社史をお金をかけて作ることがだんだん難しくなってきて、大部の社史を作る企業が激減しました。そうなると経営史研究所も、大きな仕事がだいぶ減ってしまい、スタッフも足りないので、最近では、本格的社史の作成に消極的になっているのが現状です。かつては企業史料協議会の活動の柱であった「会社史セミナー」も、現在は開催しておりません。

しかし他方で、企業史料協議会は、新しい発展を遂げてきています。企業史料協議会では先に挙げた3つの役割のうち、すでにふれた③「会社史の編纂」のほか、もともとは重要であった②企業博物館の活動も最近は下火なんですね。

一例を挙げますと、バブル期以前から当時の通産省が旗をふって、関西に産業史関係の大きな博物館を作ろう、という運動がおこり、今もある産業技術史学会という学会や、大阪工業会という団体（二〇〇三年に大阪商工会議所に統合）が、それを熱心に進めていました。そうした動きに刺激されて企業史料協議会も、一九八一年に発足したときには博物館作りに大変熱心に取り組んでいたのです。当時は、海外視察などなかなか難しかったのですけれども、頑張って外国の産業博物館を何度か見に行き、いろいろな知識を蓄えるというようなことをやっておりました。

最近では、立派な産業博物館を作ろうとしてもなかな

か出来ない時代になり、企業博物館の設立・運営もだいぶ下火になっている。それに加えて、社史編纂もかつての勢いがない、となりますと、現在の企業史料協議会の活動の中心は、③「会社史の編纂」から派生した①「企業史料の管理」になるわけです。

（3）企業史料協議会の近年の活動

現在の企業史料協議会が、具体的に何をやっているかを申し上げますと、第1に、毎年五月に会員総会を開き、その後に企業を経営されている方の観点から、アーカイブズをどうお考えになっているか、といった趣旨の記念講演をお願いしています。第2に、定例理事会を年に三回、開いています。ここでいろんな活動が最終決定されます。

第3に、シンポジウムやセミナー、研修講座を開催しています。特に一一月五日は、企業史料協議会の創立記念日ですが、この日の頃に「ビジネスアーカイブズの日」と称するシンポジウムを開催しています。これにも特別講演や基調講演、そして企業史料を扱っておられる現場のアーキビストの方を中心とするパネルディスカッションを実施しています。もうひとつ重要なのが「ビジネスアーキビスト研修講座」でして、東京中心ではありますが、たくさんの方が参加して下さっています。関西では一日で終了する「関西ビジネスアーキビスト研修講座」を設けています。それから、これは今年から始めるのですが、アーカイブズの世界ではご存知のとおりデジタル化にどう対応するかという課題があり、そういうニーズに応じて「デジタル文書資料管理講座」を東京大学経済学部資料室の後援で開いております。さらに「くずし字研究会」をやっております。企業史料には、江戸時代の史料もあるかもしれませんけれども、明治時代の肉筆の史料も多いですね。これらも解読できたらいいということで、東京と大阪で開催しています。それから「博物館セミナー」も開いています。

このほか第4に産業博物館や産業遺産の見学会。第5に関西部会というのがありまして、なかなか運営が難しいのですけれども、関西で独自に見学会等を開いてくださっている。それから第6に、広報誌・刊行物。これについては、研究誌『企業と史料』を毎年総会のときに会員にお配りする。けっこう厚い立派な雑誌です。それか

ら「ニューズレター」の年約四回の発行。そのほか適宜に書籍を出すことでして、比較的最近では企業史料協議会編『企業アーカイブズの理論と実践』を丸善出版から二〇一三年に刊行しております。

2．日本における企業アーカイブズの課題

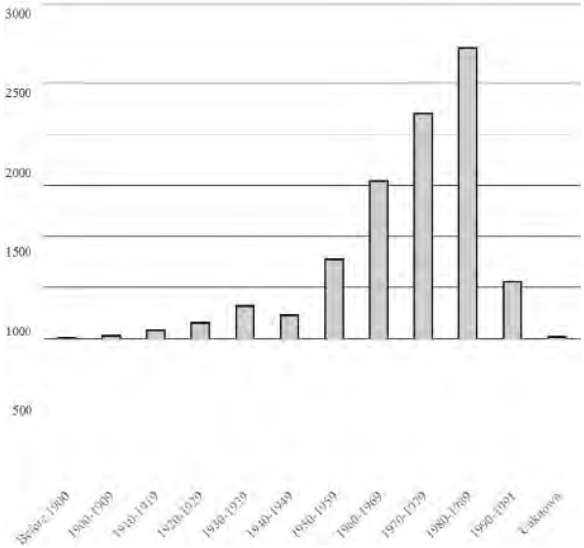
（1）社史編纂の意義

これまでの話からおわかりになると思うのですが、日本の企業アーカイブズは社史編纂がもともと中心でした。これは世界的にみると、必ずしも一般的ではないのです。日本は国際的に見て社史の刊行が大変盛んです。社史は欧米でも編纂されていますけれども、日本ほどには出版されておりません。そしてアメリカやイギリスの社史をみますと、ある企業について詳しい経営史研究者が長年かけて執筆する、というたぐいの学術的研究書といえる書物がかなり出ています。

日本の場合はそうではなくて、社史がその会社の担当者によって編集され、執筆も社内で行われることが多いのです。社史を、経営史学会の会員などの研究者が執筆することもありますが、それは数年間という割と限られた期間内で行われる仕事なんですね。

日本では社史の刊行が、ずっと昔から盛んだったわけではない。一九五五年から七三年（昭和三〇年から同四八年）まで続いた高度経済成長期からたくさん登場し、それから何といってもバブル期に多くの社史が出版され

図１　1992 年以前における日本の社史刊行点数
（Donze & Smith, 2018, p.243）



ました。バブル期といいますと一九八〇年代後半、あるいは昭和の最後の時期ですが、その頃までは日本の経済が非常に順調に発展していて企業もお金のことはあまり心配しないでよかった。先ほどの日本経営史研究所も、この流れにそって社史編纂に大いに貢献していたといえると思います。

ところが、一九九〇年ごろに始まるバブル崩壊後、社史の刊行点数は、図1をご覧いただきたいのですけれども、激減いたします。さらに、先ほどもお話した通り、従来の置物あるいは飾り物のような立派な社史に代わって、読みやすさを追求したものが増えていきます。活字がぎっしりつまった分厚い書物から、写真や絵が多く、悪く言うとお手軽で薄っぺらい、子供向けのような内容になっていきます。装丁においてもコンテンツ面でも、ずいぶん大きな変化が見えます。先の図1では、高度経済成長期からバブル期にかけて社史が増えてくるのですけれども、バブルがはじけると、社史の刊行が激減してしまったことが分かります。この状況は、これから先もそんなに変わらないことでしょう。

（2）社史の変質をどう受け止めるべきか

それでは、社史の変質をどのように考えたらいいのかということなのですが、企業史料協議会の理事会のメンバーに意見を聞いてみますと、状況が変わってなかなか社史を出しにくくなった事情は理解できるけれども、従来型の重厚でコンテンツもしっかりしている社史を作るのが、やはり望ましい、という声が強いように思われます。

従来型の立派な社史には企業の歩みをその企業の関係者、そして歴史学に関心をもつ研究者や学生などにも大変有益な知識を与えてくれるという利点があるのは確かです。こうした社史が日本でこれまでたくさん作られてきたのでして、これは世界に誇ってもよいことだろうと思います。

私は経営史の研究者ですので手前味噌なのですが、私たち経営史研究者には日本経営史研究所などを通して社史を執筆する機会がしばしばありました。通常、大学の文科系の研究者は、現実の企業と接する機会が実はあまりないのです。そうしたなかで経営史研究者にとっては、企業がお持ちの資料を集中的にきちんと読み、それで社

史を執筆することは大変な勉強になります。社史の執筆あるいは監修は、研究能力の向上にも大いに寄与する面があったのは間違いありません。

こうした利点はあるのですけども、先ほど申し上げましたように、これから先はどうかというと、従来型の重厚で立派な社史の刊行は大変難しいだろうと思って、おそらく間違いありません。この点については、大阪大学の私の後任で、スイスご出身のドンゼ先生（Pierre-Yves Donzé）が分析し、先ほど掲げた図1のデータを示してくれました。そうなりますと今後、日本の企業アーカイブズの目的はいったい何になるのか、これを少し考えなければいけません。

（3）安江明夫氏の提唱

企業史料協議会で私と一緒に副会長をお務めになった安江明夫さんという方がおられます。残念ながら数年前に亡くなられましたが、二〇一六年にその安江さんが、先ほど挙げた企業史料協議会がまとめた『企業アーカイブズの理論と実践』を大変上手に引用されながら、次のようなことを言われています。

1点目は、企業アーカイブズでは、歴史資産である資料を「遺す」ということよりも「活かす」ことが大事なのだということ。2点目は、企業アーキビストの基本的役割は記録・史料の管理者であるといわれているが、もっと積極的に情報提供者や歴史資産活用者へと転換するべきだということ。3点目は、資料収蔵庫だとか閲覧スペースというのは必ずしも必要ではないということ。大胆な提言ですね。

それから4点目、これは皆様ご存じだと思いますけれども、アーキビストの領域、あるいはアーカイブズの世界基準に関するご提言です。「文書公開の原則」とか「30年原則」とか、すべて挙げませんがアーキビストとしていろいろ知っておくべきことがございますね。これらについて安江さんは、「原秩序尊重・出所の原則」を除く大部分が、実は企業アーカイブズには適合していないのだとおっしゃっている。言い換えると、企業アーカイブズは、なによりもその企業そのもの、さらに言うと担当しているアーキビスト自身のためにあるのだという主張です。よく私達は「アーカイブズは、外部に史料を公開すべきだ」と考えるわけですが、企業アーカイブズ

の場合には自己主義でよろしい、つまり必ずしも史料を外の人に見せなくてもよい、という提言です。

さらに5点目は、企業ライブラリーがある場合には、ライブラリアンがアーキビストを兼ねても構わないということ。よく「ライブラリアンとアーキビストは違う」と言われるのですけれども、史料を扱う組織には普通では、限られた人材しか割り当てられないわけです。その場合例えば、図書館の司書の資格がある方が、ご自分で研鑽を深められてアーキビストになる、ということでも一向に構わない、といったかなり斬新なご提言をされて、企業史料協議会の会員にも賛否両論にわたる白熱した議論を引き起こしてくださいました。

（4）松崎裕子氏の主張

この安江さんのお話と関係するのですが、現在も企業史料協議会の理事で、世界各国の企業アーカイブズの研究を続けている方に松崎裕子さんがおられます。松崎さんは、渋沢栄一記念財団情報資源センターにも所属されているアーカイブズ研究者なのですが、安江さんの論文にもこの方の研究が引かれていて、アーカイブズを会社経営へマッチングさせることが大事だ、といわれている。

これまで企業史料協議会では、社史編纂が非常に大切だといわれていたけれども、松崎さんは、そのほかに、企業の教育研修とか経営理念の継承、マーケティング、製品開発、ブランド戦略、広報宣伝、意思決定、透明性確保、コンプライアンス、説明責任、リスク管理、法務、ＣＳＲ、といった企業経営に関連する様々な事柄にアーカイブズを積極的に活用することこそが重要だという。ＣＳＲ（Corporate Social Responsibility）は、ちょっと古い言葉で、今はＳＤＧｓ（Sustainable Development Goals）と聞いたほうがおわかりになりやすいと思いますが、要するに企業の社会的責任への活用も挙げておられます。こうして松崎さんも、企業アーカイブズが、社史編纂とかあるいは経営史研究者がそれを活用するためだけにあるのではなく、まずは「広く」「すべて」企業経営のためにあると主張されているわけです。

松崎さんは、国際アーカイブズ評議会（ＩＣＡ）、特に企業アーカイブズに関する専門部会に所属されています。そのため別のご論文で、欧米のほか中国、インド、日本などのアジアの諸国の企業アーカイブズの現状を概

観されている。その要点を申し上げます。

1点目は、ヨーロッパの企業アーカイブズの発展は、二〇世紀初頭のドイツで始まり、一九三〇年代にイギリス、第二次大戦中にはアメリカやカナダ、その他の諸国では戦後、特に一九七〇年代以降にようやくその発展が開始されたとのことです。日本では、明治期から三井や三菱の修史事業に代表されるように、歴史資料を集めて書籍に構成していく仕事はなされていたのですが、本格的な企業アーカイブズの構築は敗戦後、特に日本経営史研究所主催の社史編纂事業からはじまるとみられます。その反面、恒常的な社内プログラムとしてのアーカイブズ管理の仕組みの確立は低調だったと、いわれます。つまり、社史を作ることが第一目的になっていて、集めた史料を経営に役立てるという発想は、およそなかったということなのです。他方中国には、档案館という組織がありますが、社史作成のため、あるいは研究者に史料を見せるためといったような外部からの要請にそれがまったく応えてくれない訳ではありませんけれども、档案館は収集した様々な資料を何よりも国家戦略のために使っているところなのです。中国の档案館には企業史料も入っています。インドでは、20世紀末から企業アーカイブズがはじまっているそうです。

それで2点目ですが、ヨーロッパでは企業アーカイブズがすでに社会的に高く評価されるということです。一九八〇年代末に冷戦が終わりますが、この頃になるとヨーロッパでは、ナチスドイツの戦争中の犯罪、例えばホロコーストがありますけれども、「これこれこういったことで、この企業は何十年も悪いことをしてきた」と特定の企業が批判にさらされることが非常に多くなってきました。つまり、「過去の歴史の問い直し」が盛んになってきます。そうなると、企業アーカイブズが力を発揮する機会がかえって増えたと、松崎さんは指摘されています。企業がそういった過去の出来事を外部から批判された場合に、アーキビストがそれに関わる資料を、「こういうものがある」と公開し、批判に対する説明をきちんとやりきることを通じて、企業アーカイブズがその企業にとって大変重要な役割を果たす、というわけです。

それから3点目。世界でグローバル化やデジタル化が進むなかで、ヨーロッパでは企業アーカイブズが社内のいろいろな経営業務に積極的に使われるようになり、

アーキビスト自体がマネージャーとしての役割を期待されるまでになりました。アーカイブズの資料がマーケティングやブランディングに使われるようになってくる。こういった例として、企業史料協議会の研究誌『企業と史料』第一七集（二〇二二年刊行）には、スイスの製薬大手企業のロシュ社でアーカイブズが、どのように活用しているかが、これも松崎さんのご尽力によって紹介されています。

おわりに

日本の企業アーカイブズについてまとめますと、まず、高度経済成長期からバブル期まで企業が盛んに社史を刊行し、そのために必要な企業史料を集めることが進められるようになりました。それに関連して、社史作成後の史料の収集・保存・公開への取組みも定着していきました。これが日本での企業アーカイブズの原点だったといえますが、アーカイブズ論でいうところの収集アーカイブズに近いものでした。

その反面、いわゆる機関アーカイブズあるいは組織アーカイブズとしての企業アーカイブズの展開は、欧米に比べて遅れました。まず、教育研修・経営理念継承・マーケティング・製品開発・ブランド戦略・広報宣伝・意思決定といった、企業経営の支援です。さらには、二〇世紀末以降のグローバル化やデジタル化に伴う、透明性の確保・コンプライアンス・説明責任・リスク管理・法務・ＣＳＲ・ＳＤＧｓ・ＥＳＧ（Environmental, Social, Governance）などへの対応です。二一世紀に入ってからようやく、そうした海外の企業アーカイブズの実態の日本への紹介も進んできたので、機関アーカイブズの重要性が、日本でも最近ようやく企業アーキビストの間で認識されつつあるというところです。

最後になりますけども、大学アーカイブズについても少し触れたいと思います。少子化が急激に進行すると、

「弱小大学」は淘汰されていってしまう。すると、今後は大学史の刊行点数が減ってくることもあり得ます。もっとも、競争力のある大学のアーカイブズでは、校史編纂を主な目的とする史料の収集・保存・公開は、今後も活動の柱として続くだろうと私は思っておりますが。さらに、すでに皆さんは実行されていることでしょうけれども、大学のブランドを維持向上させるための展示・講演・自校史教育など広い意味での宣伝活動が、今後ますます重要になると予想されます。

企業アーカイブズの事例を概観した今、それらに加えてもう一つ重要と思われるのが、大学運営への貢献です。大学史資料は単なる記録ではなく、明日の大学を創造する知恵の宝庫でもあります。古い時代の史料ももちろん重要ですけれども、実は毎日毎日事務方で生み出されている文書があります。これらの中には、今はどうということのないように見えても、後になると大事な史料になる文書も必ず含まれています。それらを日常的に整理していく。これが一つの重要な業務であって、この作業を通じて蓄積された資料が、大学のこれからの生き残り戦略を打ち出す武器にもなり得るのです。そのためには歴史的資料の収集と並んで、国公立大学の一部がすでに実施している公文書の受け入れに準じた、非現用文書の選別・保管が大事になると思います。

日本では、アーカイブズの重要性に関して政府の認識がそもそも大変低い。こうした風土のなかで、皆様のようなアーキビストの上司である管理者がおられると思います。大学の場合は、おそらく教員だろうと思うのですけども、そういった上の方が文書の管理責任者であるといっても、なかなかそれに割ける時間も、あるいは関心もないのが現実でしょう。そうした状況であっても、アーカイブズが大学運営の戦略策定において武器となることを、皆様方アーキビストが、大学執行部へ粘り強く説得してくださるのがよろしいのではないでしょうか。これで私の話を終わりにしたいと思います。本日はご清聴ありがとうございました。

〈参考文献〉

阿部武司『アーカイブズと私―大阪大学での経験』（クロスカルチャー出版、二〇二〇年）
阿部武司・橘川武郎編『社史から学ぶ経営の課題解決』

（出版文化社、二〇一八年）
アレクサンダー・ルーカス・ビエリ（加藤秋子訳）「ロシュ社のアーカイブズ&アーカイブからビジネスに価値を生み出す」（『企業と史料　第一七集　経営を支える企業アーカイブズを目指して―DXへのアプローチ―』企業史料協議会、二〇二二年）三五～五〇頁
大島久幸「デジタル化とアーカイブズによる経営支援」（前同『企業と史料　第一七集』）六六～七八頁
企業史料協議会編『企業史料協議会二〇年史』（企業史料協議会、二〇〇四年）
企業史料協議会編『企業アーカイブズの理論と実践』（丸善プラネット株式会社、二〇一三年）
松崎裕子「経営資源としてのアーカイブズ」（前同『企業アーカイブズの理論と実践』）
松崎裕子「世界のビジネス・アーカイブズ概観」（時実象一監修・久永一郎責任編集『デジタルアーカイブ・ベーシックス5　新しい産業創造へ』勉誠出版、二〇二一年）第一章
安江明夫「『遺す』でなく『活かす』―企業アーカイブズの本領」（『企業と史料　第一一集　ビジネスアーカイブズと情報発信』企業史料協議会、二〇一六年）一六～二四頁
Pierre-Yves Donzé & Andrew Smith「Varieties of Capitalism and the Corporate Use of History : The Japanese experience」(*Management & Organizational History*, Vol.13, No.3、二〇一八年）二三六～二五七頁
企業史料協議会ホームページ（https://www.baa.gr.jp/二〇二二年一月一四日最終閲覧）
日本経営史研究所ホームページ（https://www.jbhi.or.jp/二〇二二年一月一四日最終閲覧）

※本稿は、二〇二三（令和五）一月二六日に、本学で行われた全国大学史資料協議会東日本部会定例研究会での講演をもとに加筆修正したものである。なお、阿部武司教授は二〇二三年三月末をもって定年退職された。

全国大学史資料協議会東日本部会・定例研究会（主催・同協議会東日本部会）

日　時：二〇二三（令和五）年一月二六日
一四時～一六時

場　所：国士舘大学世田谷キャンパス
メイプルセンチュリーホール五階大会議室
対面及びオンライン（zoom）併用

参加者：対面二四名・オンライン二七名

○特別講演
阿部武司（国士舘大学政経学部教授、個人会員）
「企業アーカイブズと大学アーカイブズ　―企業史料協議会での経験より」

○講　演
熊本好宏（国士舘史資料室）
「百年史編纂事業と国士舘史資料室の取り組み」

○見　学
国士舘大講堂（国登録有形文化財）本学学生ガイドによる解説

雑誌『大民』を探しています！

大民

国士舘の源流は、青年大民団の結成にあります。
青年大民団の機関誌、1916年創刊の雑誌『大民』は、本学の沿革を知るための大切な資料です。
しかし本学では、残念ながらほとんど原本を所蔵しておりません。
ついては、雑誌『大民』の原本を探しています。
ご提供または所蔵先の情報などをお寄せ下さい。
皆様のご協力を、何卒よろしくお願いいたします。

雑誌『大民』の概要

創刊：1916年6月15日、月刊誌
発行：青年大民団（後に大民団・大民倶楽部・大民社へ変遷）
注記：1924年7月（第11巻）より『生存同盟』に改題

ご連絡先
国士舘史資料室
TEL 03-3418-2691
E-MAIL archives@kokushikan.ac.jp

所蔵機関済み機関　福井県立図書館／静岡県立図書館／長崎市立図書館／金沢大学図書館／法政大学大原社会問題研究所／神戸大学社会科学系図書館／古市忠一文庫

1916 『大民』創刊 ▶ 1917 国士舘創立

国士舘の思い出

「生き様」学んだ国士舘

文学部教育学科教育学専攻卒業（昭和四八年三月卒・文学部四期生）
大神　硬司

はじめに

中学二、三年生の頃、私は将来どんな職業に就くのか、何をしたいのか、日々漠然と考えていました。自分自身が魅力を感じて本気で取り組める仕事は何だろうかと考えた時、「生徒に対応する教師の姿」を連想し、いつしか「教師になりたい」という希望を持つようになっていったのでした。高校時代の三年間にも、この思いが変わることはありませんでした。

このような教員志望の背景となったものが何だったのだろうかと考えた時、中学生の頃テレビ放映されていた青春ドラマや根性ものアニメの「これが青春だ」「柔道一直線」「巨人の星」等々が、大きな影響を与えていたのだと思います。ドラマの内容そのものが興味深かったことは勿論のことですが、ドラマに描かれた先生と生徒との信頼関係、仲間同士の強い絆、師弟愛、根性論など、心に突き刺さるシーンから、人と人とのつながりの素晴らしさ、友情や強い絆に感動したり涙を流したりしていました。また、夢に向かってひたすら取り組む姿にくぎづけになっていました。純真単純な私は、こうした感動を自分自身の生き方の中に創りあげ、自分の生きざまとしてそれを求めたのだと思います。

進路決定をしなければならない時期、あれこれ悩みながら、数ある大学の中で体育学部のある国士舘大学の文学部教育学科教育学専攻では「社会」と「体育」二教科の教員免許状が取得できることを知りました。これだと

思いました。体育がほどほどに得意で、しかも歴史にも興味がありどっちがよいかと思っていたところ、「社会、体育の二刀流」は自分にとってこの上ない魅力でありました。私が国士舘大学を志望した理由は、ここにありました。

入学・入寮・授業の開始

一九六九（昭和四四）年四月、私は町田市にある鶴川寮にて大学生活のスタートを切りました。そのスタートは、期待と不安、希望と緊張が入り混じった、極めて複雑な思いが重なり合ったものでした。

国士舘の寮での生活が厳しいことは、周囲の知人たちからの情報で承知していましたが、実態は知る由もありませんでした。鶴川寮での部屋は、四年生で寮長の先輩、二年生の先輩、同級生と私の四人が同室でした。皆さん優しく良い方たちでしたが、やはり緊張が連続する毎日でした。朝は午前五時に「起床ラッパ」が鳴り響きます。目覚まし時計を早めに合わせていましたが、ラッパが鳴り響くと改めて目が覚めました。そして、なんとわずか三分の間に一〇〇〇人以上の寮生が二階のベランダに整列し、点呼が終了していました。その後、部屋の掃除に廊下のふき掃除。便所もピカピカです。掃除を終えると食堂にて朝食。あっという間に朝の時間は終了し、午前八時二〇分開始の一時間目の授業に出席します。私たち鶴川寮の学生は、寮と校舎がすぐ近くなので連続の講義がない時は、次の講義までの時間を寮の自室に帰って過ごすことができました。しかし、下手に横になって居眠りなどしようものなら大変なことになってしまいます。

夜にも点呼がありました。最初の何日かはやさしかった先輩方も、入寮三日目、四日目と日が経つうちに、歓迎ムードは別の形に変わってきました。寮での「躾」が始まったのです。夜の点呼が終わり、午後九時の就寝時間を迎える時、「消灯ラッパ」の音が響きます。何ともいえぬ響きだったことを思い出します。一週間ほどたったある朝、気がつくと一人、次の日にまた一人と新入生がいなくなっていました。あまりの環境の変化に、対応できなかったのでしょう。夜の間に姿を消していました。

今でも思い浮かぶ鶴川寮の情景があります。忙しい一週間が過ぎ日曜日を迎えると、さすがにゆったりと過ご

すことができました。日曜日の昼食は食堂が休みのため、あんパン、ジャムパンと果物が配給されました。それをかじりながら、コの字型の鶴川寮敷地内にしみ込むように響く音楽を聞いていたものです。忘れ得ぬその曲名は、由紀さおりさんの「夜明けのスキャット」。静まり返った寮の芝生の上に響くそのメロディーに、何ともいえぬ郷愁を覚えたことが忘れられません。

鶴川寮で忘れられない情景がもう一つあります。一九六九（昭和四四）年入寮の年、四月下旬というのに、関東地方が雪に見舞われたのです。この時、数センチメートルの積雪があり、寮の付近は勿論のこと、鶴川駅から鶴川団地一帯が綿帽子に包まれたような真っ白の世界となりました。季節外れの雪に、驚きと感動を覚えたものでした。

文学部・法学部・政経学部一部は、入学後の二年間の教養課程を鶴川校舎で講義を受けます。週一回館長訓話がある日は、世田谷校舎の剣道場（一〇号館五階）で館長先生の訓話を受けるとともに世田谷校舎で講義を受けるというシステムになっていました。この、週一回の「世田谷行き」の日は鶴川寮を離れて、いつもと違う生活を送ることができたので何だかうれしい一日でもありました。

この時代、専攻や学年ごとに担任ともいうべき「学生監」という立場の先生がおられ、事務的なことをすべて管理（授業時間ごとに出席カードを配り出欠確認、また取得単位の整理なども担当）しておられました。特に出席カードによる出席確認は、非常に重要な意味を持っていました。全授業数の三分の二以上の出席がなければ、その授業の定期試験が受けられないという規定があったのです。他の大学のように、講義を受けるか受けないかは、本人の自由という状況ではありませんから、「出席」の意味は極めて重要であったのです。ですから学生は、自分自身の出席簿を作り、けがや発熱で休んだり何かの都合で欠席したりしたことは、きっちり把握しておくことが必要でした。なお担当の学生監は、一・二年生は玉目利保（元自衛隊中央音楽隊長で東京オリンピック開会式演奏指揮者）、三年生、四年生は国枝治平の各先生でした。

さて私は、体育の教師になりたいという希望を持っていましたので、初心者ではありましたが、鶴川の柔道部に入部しました。勿論、先輩部員の皆さんや私以外の同

級生は、高校時代に柔道部で活躍してきた人ばかりで全員黒帯ですから、私のような受け身くらいしか経験していない者は、いくら頑張っても、何をしても、ポンポン投げられるばかりでした。必死に歯を食いしばって毎日の稽古に参加しました。毎日が忍耐そのものでした。しかし、日々が経過し柔道部の生活リズムに慣れた六月頃、投げ飛ばされた時に受け身がうまくとれなくて、肘に血が溜まってしまう大けがをしてしまいました。夏まで、できる範囲の稽古を続けていたのですが、九月になってもなかなか回復しないまま日々が過ぎて行きました。そのような時、たまたま同じ文学部の阿部義和君も高校時代に痛めた膝の靱帯損傷が悪化しており退部を考えていたので、九月に二人で柔道部を退部しました。退部したことで鶴川寮に居づらいこともあり、玉川学園にある安アパートに一緒に住むことにしました。

レストランでのアルバイト

鶴川寮を出て、今までとは全く違う自由な生活が始まりました。午前五時の「起床ラッパ」で飛び起きるような緊張の日々から解放され、ゆったりとした気分で学生生活を送るようになったのです。自分で食事を作り、時には昼食に弁当を持参するなどして、日々充実した生活を過ごしていましたが、ある日いつも湿布薬を買いに行く薬屋さんで「毎日が平凡で何か物足りない」などと話をしたところ、アルバイト先として「和風レストランおかもと」を紹介してもらいました。

早速、訪問してお願いをしたところ、その場で承諾いただき、アルバイトが始まりました。このアルバイトを通じて様々なことを体験させてもらいました。接客の基本、出前の受付と出前、プロ仕様の食器の洗い方、エビフライやハンバーグの作り方（実際に何度か調理もさせてもらいました）等々を教わりました。講義が終わってからのアルバイトなので、一日三時間から四時間というわずかの時間ではありましたが、色々学ぶことができました。

岡本さんには小学生の男子二人がいました。一日の仕事が終わる頃には、この二人の小学生と一緒に風呂に入らせてもらいました。時給は安かったけれども食事付きでもあったので、ありがたいアルバイト生活をさせても

らったのでした。この頃のアルバイト生活は大変充実しており、今にして思えば、この満たされた学生生活を続けるべきであったのかもしれません。しかし、柔道部をやめたことによる不完全燃焼は、アルバイトでは十分に解消することができていませんでした。

アルバイトを始めて三か月ほど過ぎた頃、日本武道館で空手道の全日本選手権が開催されたので観戦に行きました。この全日本選手権観戦が以後の学生生活を大きく変えてしまいました。

武道館に行ったことで、自分の中でくすぶっていた気持ちが蒸し返され、今のままでいいのかと思うようになりました。空手道部に入部したいという気持ちが沸きあがってきたのです。そのことを「おかもと」のマスターに相談したところ、マスターは快く私の気持ちを受け入れてくださいました。大変お世話なった岡本さんを裏切ったようなことをしている自分に強い嫌悪感を抱きながら、しかし空手道部への入部を決心したのでした。

空手道部への入部

空手道部に入部すれば、柔道で痛めた所をまた痛めるかもしれない、という不安を抱いていました。そんなことを同居する阿部義和君に話していたら、彼の高校時代の友人である斎藤芳男君が空手道部員であることを教えてくれたので稽古の実態を聞いてみました。正拳は鍛錬で強打するが、肘を強打することは普段の稽古ではないことを聞いて安心できました。また、大学の正規の空手道部で、日本空手協会が上部団体であること、師範が駒澤大学の大石武士師範であること、ＯＢの先輩が日本空手協会の師範や指導員で活躍されていることなど、色々と教えてくれました。授業を抜けたりすることがないのかどうかということも知りたかったのですが、そういうことは全くないとのことで安心しました。反対に、授業や稽古をさぼった時には、厳しく指導を受けるとも教えてくれました。

一年生の冬休みが終わった一九七〇（昭和四五）年一月八日、その日は始業式でした。私は坊主頭に変身し、緊張を隠せないまま稽古開始時刻より早めに世田谷校舎

の剣道場（一〇号館五階）に出向いて、同級生や先輩方を待ちました。「入部させてください」と先輩に申し込みをした時、「もう後戻りはできない」という気持ちで緊張のピークでした。

入部した日の翌日から国士舘伝統の「寒稽古」の始まりです。寒稽古は午前五時に始まります。私は玉川学園のアパート生活なので、世田谷校舎にはとても五時には間に合いません。少々遅れることを覚悟して一番電車で参加することになります。小田急線の始発、玉川学園駅午前四時三〇分発の上り電車に乗って、梅ヶ丘駅に到着、そして世田谷校舎へと走って向い稽古に参加します。鶴川寮の合気道部の知人も同じように、皆が梅ヶ丘駅から走っていました。午前七時頃に寒稽古が終わり、とりあえず世田谷校舎前の食堂で朝食をとります。すぐに鶴川校舎に戻って授業を受け、夕方五時頃に授業が終われば、また世田谷校舎に向かいます。空手道部の稽古は、剣道部の稽古が終わった後に剣道場（一〇号館五階）を借りて行っていたので、おおむね午後五時半頃から八時半頃までの約三時間、稽古をすることが通例でした。稽古終了後には、剣道場内の片付けをして、それから一〇号館の一階にある風呂に入ります。私は初めて世田谷校舎で風呂に入った時、「入浴剤が入っているのだ」と思っていましたが、後で聞いたら相撲部の学生が入った後なので、土俵の土で風呂の湯が褐色に濁っていたのだそうです。風呂から上がり、午後九時頃に世田谷校舎を出て玉川学園駅まで帰りました。アパートに着くのは夜一〇時くらい。それから自炊で粗食を摂ります。寝るのは午後一一時から一一時半、次の日は早朝四時一〇分に起きて、再び始発電車に乗った後、駅から走るという生活です。この寒稽古期間の一週間を繰り返すことは、本当に厳しいものでした。

もちろん、寒稽古の期間が終了した普段の生活においても、鶴川校舎での講義が終了した後、世田谷校舎に行き、稽古が終われば玉川学園のアパートに帰る、というこの生活形態は、三年生になって世田谷区太子堂に引っ越すまで続きました。寒稽古の最終日は、全員で号令をかけながら明治神宮までランニングをしました。参拝をした後、寒稽古をやり遂げたことと厳しい一週間が終了したことに、何とも言えない安堵感を覚えたことを思い出します。しかし、この間ほとんどの授業において途中

から居眠りをしていたように記憶しています。

柔道部の時も初心者として入部しましたが、空手道部も一年生の三学期からの入部でしたので、当然同級生とは差ができています。入部早々の寒稽古のつらさは格別でしたが、毎日が本当に「修行」を感じる生活でした。空手道の稽古そのものに加えて、立ち居振る舞い方がよく分からず、おろおろしていたことを思い出します。柔道部の時も必死に取り組んでいましたが、その時以上に必死であったのは間違いありません。若かったからできたのだとつくづく思います。

入部してしばらく経った頃、国士舘大学空手道部創設時の第一期の大先輩であり、日本空手協会の師範であった岡本秀樹先輩が、海外青年協力隊の任務遂行のためシリアに派遣されることが決定しました。岡本師範は空手協会でも有名な方でしたので、大勢の空手関係者の方々とともに、私たちも羽田空港でお見送りをしました。その後、岡本先輩はシリアの警察や軍隊、さらにエジプトをはじめとするアラブ諸国でも活躍され、世界中に知られる日本人の有名な空手家として生涯を送られました。その功績は近年、小倉孝保著『ロレンスになれなかった男』（令和二年六月、角川書店）に評伝としてまとめられています。

一九七〇（昭和四五）年四月、二年次となり、空手道部での生活とともに、多くの授業を受けることにも随分慣れてきました。私は、「教員免許状を取得し、中学校の先生になりたい」という希望を持って国士舘に入学していましたが、空手道部に入部してからは、授業にはきっちり出席していたものの、学問よりも空手道部での活動を中心とした生活になっていました。そこで、年間を通じて前期・後期ともに定期テスト一週間前だけは空手道部の稽古が休みであったため、この期間とテスト期間中の約二週間については、学問も疎かにならないよう徹底的に猛勉強をしました。その結果、履修の各学科は、まずまずの成績を残すことができました。

私は、空手は決して強くはなかったけれども、けがや少々の発熱があっても稽古を休むことはありませんでした。組み手の練習で前歯を折るというようなことも経験しましたが、日々の稽古には必ず参加しました。その間、辛さのあまりに何度も「逃げ出したい」と思ったこともありましたが、只々一生懸命稽古に取り組むことだけが、

1971 年 5 月 23 日東日本大学空手道選手権大会（日本武道館）

私の「とりえ」でもありました。そういう意味での「空手バカ」だったように思います。遅れて入部した時は存在感がありませんでしたが、この姿勢や態度が同級生や先輩方にも伝わったようで、いつしか私の存在を認めてもらえるようになっていきました。

三年次の一九七一年秋、空手道部の大きな儀式がありました。幹部交代式です。四年生は卒業や就職を控え何かと忙しくなるので、部の管理や運営を三年生にまかせて現役を引退するのです。幹部交代式の場で、私は部の機能的な運営に携わる「主務」という職務に就くことを告げられました。当初は、何をすればよいのかよく分からなかったのですが、創部当初は存在していたらしい部員証がその当時は発行されていなかったので、部員の皆に「空手道部員であることを認識」してもらいたいと思い、改めて部員証を作成しました。また当時、部で統一されたユニフォームはなく個々が自由にジャージを身に着けていたため、部として揃いのユニフォームを作ることを提案し、皆のジャージを揃えました。私はこのジャージが気にいっていたので、後に就職して教員になってからも、擦り切れて着られなくなるまでずっと愛用していました。

昇級や昇段は、同級生には遅れましたが、四年の秋には昇段審査に合格し、他の同級生達と同じように「弐段」に昇段することもできました。この時は勿論ですが、後

年になればなるほど「逃げ出さないで最後まで続けて本当に良かった」と思いました。

それにしても、その後の国士舘大学空手道部の活躍には目をみはるものがあります。私たちの同期の主将であった泉賢司（一九七三年三月体育学部卒）君が、空手道部の監督（一九七四～一九九四年度）になって以降、山本英雄（一九七八年三月体育学部卒）君の国体優勝をはじめとして、空手道部はぐんぐん強くなってきました。伝統が積み重ねられるにつれ、男子も女子も全日本大学選手権で優勝するなど大活躍です。また昨年二〇二二年六月には、エジプトで開催された国際大会でも入賞するなど実に素晴らしい実績を積み重ねています。

充実したカリキュラム

大学の四年間で、「社会」と「体育」の教員免許状を取得するためには、それなりに苦労がありました。この当時、卒業に必要な最低取得単位数は一四二単位であったと記憶していますが、それよりも一〇〇単位ほど多くの単位を取得するために、多くの学科を受講する必要がありました。私の場合、一年次から三年次までの各学年でそれぞれ約六〇単位を取得し、三年修了時の取得単位数は一八〇単位ほどになっていました。四年次の履修単位数は、ようやく四〇単位くらいになりましたが、四年間の総取得単位数は二三〇単位ほどになっていました。

私が在籍する教育学科で「社会」と「体育」の教員免許状を取得できたのは、教育学専攻の学科課程で文学部と体育学部が一体となった独自のカリキュラムが組まれていたからでした。各年度初めの履修届により、文学部と体育学部の二つの学部を行き来して、資格取得に必要な授業を受講できるようになっていたのです。とてもありがたい制度とはいえ、一日四時間または五時間というカリキュラムを修得するのはなかなか大変で、大学生というのに毎日が高校生のような生活でした。その上に、夜には空手道部の稽古が三時間以上続くのですから、よく頑張れたと思います。

教職免許状を取得するためには、教室での講義のほかに欠かせないものがありました。それは「実習」です。教育実習は当然ですが、「体育」の教職免許状のために「スキー実習」「スケート実習」「水泳実習」がありました。

1970 年 12 月スケート実習（軽井沢）

「スキー実習」は、一年生の三月に長野県の菅平で実施されました。私は二日目には両足をそろえて滑れるようになり、楽しい一週間の実習を過ごすはずでしたが、調子にのりすぎて転倒し、唇を三針縫合するけがをしてしまいました。指導の池田睦彦教授には「大神は急に上手になりすぎたんだね」と慰めの言葉をかけていただきましたが、みんなが裏ダボスの頂上付近まで滑りに行っている間、私は一人でゲレンデの緩やかな斜面をのんびりと滑ることしかできず、残念な気持ちでいっぱいでしたが、それなりに楽しい思い出となりました。

二年生の一二月には「スケート実習」が、長野県の軽井沢で実施されました。浅間山を背景とした「四〇〇メートル屋外リンク」は、さすがに広大でありました。大きくて一周するのにずいぶん時間がかかり、なかなかスタート地点に戻れませんでした。それでも少し慣れてくると無駄な力が抜けて、左右の足がエッジの真上に乗っていることを感じられるようになり「滑っている」という実感を味わうことできました。この時は、スキー実習の時のようなけがをすることもなく、すべての日程をしっかりこなすことができました。

三年生夏の「水泳実習」は、静岡県の御前崎で行われました。各種泳法の訓練や遠泳の合間には、スイカ割りなどのレクレーションの実習もありました。当然のことですが夏なので、全員真っ赤に日焼けし、楽しく実習を

行うことができました。

教育実習

一九七二年四月、ついに最終学年を迎えました。授業の時間数は、今までとは比べものにならないほど減り、講義もゆったりとした気分で受けることができました。空手道部での活動にもすっかり慣れて、充実した学生生活を謳歌していました。あんなにきつく苦しく逃げ出したいと思ったことが、嘘のように思えるような日々になっていました。

しかし、喜んでばかりいられる状況ではありません。卒業や就職のことを真剣に考えなければなりません。卒業までにのり越えなければならない二つの大きな関門がありました。それは「教育実習」と、四年間学んだことの総仕上げともいうべき「卒業論文」です。

五月の二週間にわたった教育実習は、自分の母校である茨木市立北辰中学校で行いました。茨木市最北端の中学校で、一学年は二クラス、七〇名ほどの小規模校でした。一日目は指導教員の体育の授業を見学させていただきましたが、二日目から授業を任されました。少々焦りましたが、小規模校であり生徒数も少なかったことから、少しでも多くの時間を経験したほうが良いという指導教員のご判断によるものであったと思います。保健の授業でも同様でした。そして帰宅後、毎晩深夜まで学習指導案を作成しながら居眠りをしては「ハッ」と気がつき、また頑張るということを繰り返す日々でした。

実習中、学校行事は当然のことながら、校舎の傷んだ部分の修理や掃除、道具の片づけなどあらゆることを先生方と一緒に行動していたので、「ほんまの先生みたいやな」と評価をいただきました。

教育実習が滞りなく終了してしばらく経った頃、いつものように空手の稽古を終えて真っ暗なアパートの自室に戻った時、一通の手紙が届いていました。実習で教えた生徒からの手紙でした。うれしくて何度も読み返しました。また実習の最終日に、生徒たちに書いてもらった感想文もあわせて読み返し、教師のすばらしさを強く感じたものでした。

そしてやっと夏休み。我が家に帰って、七月の採用試験（一次試験）には「絶対合格しなければならない」と

がむしゃらに勉強を続けましたが、教員採用試験の合格につながる深い思い出が二つあります。一つは、保健体育科の実技試験に必ず課されるであろう鉄棒の「蹴上がり」が、当時の私には完璧にはできなかったのです。なんとしても試験当日までに「蹴上がり」をマスターしなければならないとの思いで、庭の木に「鉄パイプ」をくくりつけ仮設の高鉄棒を作りました。一週間にわたり毎日練習を続けたところ、手の平と指を合わせて一二、三箇所の皮が破れてしまいました。痛みをこらえて傷口に小麦粉を塗りつけて出血を止め、続けて練習をしていたところ、痛みをかばうために軽く握ることから、鉄棒を握るコツをつかみ、待望の「蹴上がり」が美しくできるようになったのです。この時の経験は、後の体育授業での指導、助言をする時に実際に役立ちました。

思い出のもう一つは、筆記試験受験当日、大阪市内の受験会場に行くため「JR大阪環状線」に乗り継いで行ったのですが、車中、吊革にぶら下がりながら「保健体育科学習指導要領」を読み返していました。なんと、ちょうどそのところから問題が出題されていたのでした。こうした、出来事が私にとって幸運であったことは間違いありません。「やるべきことをやるべし」ということだったのでしょうか。

そして私は「体育」の教諭として大阪府教育委員会の採用試験に合格し、翌年四月の採用が内定したのです。この採用試験に臨む中で、忘れられない出来事・ハプニングがありました。二月、内定者に対して実施される最終面接の通知が大学に送られていたのですが、その通知が文学部ではなく体育学部に届いていたようです。しかし、体育学部には私の名前はありませんから、その通知文は何日か体育学部で留まっており、私には連絡が届かないまま日数が経過していたのです。ようやく連絡を受けたのが面接日の前日でした。大慌てで大阪に戻り、翌日の面接を受けることができました。もし、その連絡がもう一日遅れていたら、私の人生は大きく変わっていたかもしれません。

前野ゼミ・卒業論文

専門科目の「教育学演習」では、三年次から引き続き前野喜代治教授のゼミを選択しました。前野教授は、弘

前大学で永年指導をされていたとお聞きしていましたが、私たちが入学した時には国士舘大学の教授として着任しておられました。大変穏やかで優しく、尊敬できる先生でした。ゼミでの研究教材は、貝原益軒の「和俗童子訓」及び「養生訓」でした。これらの教材を基にしたゼミの学習から、「教育の原点」そして「健康的に生きること」についてその根本精神を学びました。ゼミでは、加えて自分の卒業論文の研究テーマを設定して準備と研究を進めますが、私は論文のテーマを「義務教育における道徳の教育学的意義」と決めました。

この当時の社会の風潮として学校教育の現場では、「道徳教育」というと戦前の「修身」と同一視され、ともすれば「軍国主義のなごり」のように考えられていた一面がありましたが、私は納得がいきませんでした。道徳とは、社会の中で人が生きていくにあたって「あたりまえのことをあたりまえに行う基本のこと」と考えていましたので、「道徳とは生きる基本だ」ということを教育の場に示したかったのです。教育実習の始まる前から論文に取り組んでいましたので、教育実習校の先生方にも道徳教育についてのアンケートを取らせていただき、卒業論文の一節にまとめることができました。卒業前の口頭試問では、前野教授から「大変よくまとまったいい論文だ。よく頑張ったね。」との評価をいただきました。「内容が不十分だから、再度論文を書き直せ」ということになればどうしようという不安もあったのですが、最後の関門を通過できて「卒業できる」と安堵したことを思い出します。

かつては、道徳の授業は形式的なものになっており、他の教育内容を扱うなどして確固とした教科の位置付けが確立されていない部分がありましたが、今日では道徳教育推進教員が配置されるなど、その位置付けは明確になりつつある状況に、私は大きな意義を感じています。

卒　業

四年生の一九七二（昭和四七）年秋、はっきりとした月日は覚えていませんが、担任であった学生監の国枝治平先生に呼び出されました。

「何か悪いことでもやったのかな」との思いで、世田谷校舎一〇号館の一階にある文学部の学生監室に出向い

1972 年度文学部卒業記念品メダル

たところ、意外なことを告げられました。国枝先生から「大神君、文学部の卒業記念品を任せるので、君が考えろ。予算はこのようになっている。そして、記念品の目録も君が書け」と言われたのでした。驚きとともに、大変なことになったなと思いました。

卒業記念品は、文学部の卒業生全員に渡るものです。「みんなは何が良いと思うだろうか。何にしようか」と何日も考えましたが、いつまでも悩んでいるわけにもいきません。そこで「いつまでも壊れずに残るもの。あまり大きくないもの。重みのあるもの」という思いから、独断と偏見ではありましたが「メダル」を作成することに決めたのでした。

卒業式では、私は文学部卒業記念品贈呈の代表として「記念品目録」を読み上げるため登壇しました。そして目録の内容を読み上げたのですが、気合を入れ過ぎて読んだためか、女子学生がクスッと小声で笑う声が聞こえ、少し恥ずかしかった思いをしたことを記憶しています。

時は流れて卒業から五〇年、二〇二三（令和五）年一月に発行された『国士舘大学新聞』第五三一号の「国士舘史資料室だより四八」に、文学部の卒業記念品のことや卒業式の記事に「卒業記念メダル」のことが紹介されました。自分が制作企画に関わった「メダル」の記事に触れることができて、懐かしさと喜びで感無量でありました。

思い起こせば、世田谷校舎で過ごした三年生、四年生の二年間、授業を抜け出したことが発覚して国枝学生監からひどく叱責を受けたり、生活面で厳しい指導を受けたりしましたが、温もりのある優しい先生でした。ご自身熊本県出身で、「肥後もっこす」の話をよくお聞きしたことを思い出します。卒業記念品に関して指名をいただいたことが、今このような形で関係の皆さんに知っていただけて本当にうれしい限りです。改めて国枝学生監に感謝申しあげます。

大学としても年度末を間近に控えて、卒業にむけて様々な準備が進められていました。年が明けた一九七三年一月、国士舘創立者である舘長柴田徳次郎先生が逝去されるという大きな出来事がありました。二月には一〇号館五階剣道場で学園葬が挙行され、副学長であった柴田梵天先生が国士舘大学総長として就任されました。館長訓話では、何度も副学長のお話をお聞きしていましたが、学園葬では新たな決意のようなものを感じ取ったものでした。

このような国士舘の大きなうねりの中で、一九七三年三月、私たちは卒業することができました。

就職・教師として

国士舘大学文学部を無事卒業し、一九七三（昭和四八）年四月、私は晴れて新任教員として大阪府茨木市の公立中学校に着任することになりました。大阪府教育委員会が行った辞令交付式では、代表で宣誓書を読むように指示され、気合を入れて読み上げたことが鮮明に思い出されます。

新任教員として赴任した先は茨木市立南中学校。ここで一五年間勤務をしました。初めて校門をくぐった時からのさまざまな出来事が、この原稿を書きながら走馬灯のように脳裏をよぎります。赴任からの数年は、何かと悩む問題はあったものの、「先生」として「教師」として、生徒のみんなと楽しく充実した日々を送ることができていました。

しかし一九八〇（昭和五五）年頃から、教師集団がこれまで経験したことのない大変な問題に見舞われることになります。きっかけとなったのは一人の生徒の夏休み中の問題行動でした。たった一つの問題から学校は大荒れしていったのです。シンナー吸引、対教師暴力、生徒

間暴力、等々。これらの問題は、自分の中学校だけではなく、茨木市内、大阪府下、ひいては全国の中学校に現れた状況でありましたが、とにかく大変でした。テレビドラマ「積木くずし」に代表されるように、青少年の非行が社会問題化した時代でした。しかし考えてみれば「時代の変換期」であったのでしょう。そして、この「とんでもない荒れ」に、私たち教師が出会わなければ、教師も成長できなかったのではないかとも思います。

私たち教師は、指導するということで児童や生徒の前に立ち、学習や生活について教え導く立場にあることから「先生」と呼ばれてきました。ところが時代も変わり、その立場に対する見方も変わってきている中で、「上から目線」が強すぎる独断的な押さえつけ指導が先行すると、子どもたちの信頼や信用を失い、逆に反発の対象となってしまうのです。

一九八〇（昭和五五）年頃の学校の現場は、まさにこの状況となってしまったのでした。この当時の学校の「荒れ」から、学校のスタイルは変わり始めました。保護者にも協力してもらい、いわゆる「開かれた学校づくり」が始まりました。学校と保護者が一体となって教育活動を進める機会が多くなったのでした。権力ではなく指導力と信頼感、そして人間理解ができる「先生」でなければ生徒はついてこない。教師は、きわめて難易度の高い「人間力」を求められる存在であると思います。まさに幕末の松陰師範の姿勢そのものではないでしょうか。なかなか到達できるものではありませんが、人間としての魅力を身につけるため常に学び続けることが大切だと考えます。

一九八九（平成元）年から五年間、市立北陵中学校に勤務した後、一九九三（平成五）年から五年間、茨木市教育委員会学校教育部、社会教育部の指導主事として着任しました。一九九七（平成九）年には大阪府で開催された「なみはや国体」の運営にも関わることができました。一九九八（平成一〇）年四月からは、新任で赴任した市立南中学校の教頭として、一〇年ぶりに戻ることとなりました。南中学校では、生徒の「荒れ」がまだ少し残っており、私は教頭の仕事をしながら生徒指導もしていたので、本来の教頭の仕事は生徒が下校する五時頃以降に行っていました。毎日、午後九時か一〇時頃まで学校で仕事をしたものです。夜遅くまでの勤務は厳しいも

のがありましたが、気持ちを分かち合いながらともに教育活動を推し進めていける教員や、教育活動を支援してくれる保護者や地域の方々がいてくれたので、ここでの四年間は充実感を持って教頭としての職務を果たすことができました。

その後、校長として二つの中学校に赴任しましたが、ある中学校では生徒の荒れとは異なる「新たな波」に遭遇することとなりました。いわゆる「モンスターペアレント」です。子どもたちの多様な問題は心が通じ合えば、難題でも解決することができました。辛くてもやりがいを感じました。しかし、保護者対応については社会問題にもなりましたが、虚しさを痛感することが多々ありました。テレビドラマにあるような「保護者懇談会」を開催するような状況もありました。このような中で、「私は学校を、校長先生を信じています」との発言をしていただいた保護者がおられました。その時、勇気をもらいました。発言いただいた方をはじめ、多くの生徒や保護者の方々の信頼に応えなければ、志を抱いて教師になった意味がないと強く感じたのでした。

退職して

国士舘大学の在学中、鶴川寮、学部、空手道部、間借り生活などの中で知り合った多くの友人や知人と、七〇歳を過ぎた今でも親しく交流を続けることができていることは、金銭には代えられない貴重な財産であると痛感しています。

中学校を退職後は、五年間茨木市教育委員会教育センターの職員として、不登校児童・生徒にふれあう部署で勤務しました。その後、茨木市役所からの依頼を受け、子ども政策課という部署で二年間、行政と学校とが連携して中学生の生活や学習を支援する仕事を担当しました。そうこうしていると、一昨年、七〇歳を目前にした時でしたが市立中学校の体育の非常勤講師の応援依頼があり、九月から年度末の終業式までの半年間体育教師として授業を担当することになりました。この半年間、私の若い時代とは全く違うスタイル、パターンの先生として、楽しく充実した授業をすることができ、大変有難く感じています。

現在、私は保護司・日赤奉仕団の役員・地域の自治会

長、公民館運営委員長等々市や地域の数々のボランティア活動に携わっています。やりたいからではありませんが、少しでも役に立つならばという思いで活動をしています。

更に、国士舘大学同窓会の大阪府支部会長という重責を任されています。会長という「柄」ではないのですが、大阪府の同士の皆さんと集い、懐かしい思い出話や情報交換のひと時は、この上ない時間となっています。また、大学同窓会本部や近畿地区各支部で開催される総会の場で、多くの国士舘卒業生の皆さんにお会いし、親交を深められることは喜びであり、大変感謝しているところです。しかし、いつまでも様々な役をしていることが良いとは思っていません。引退し、次の世代にバトンを渡さなければならないと考えています。

結びに

かつて私たちが学んだ国士舘の構内には、「身を守り、母校を衛り、国護る」と記された標がありました。私は今、世界の状況に目を向ける時、まさにこの言葉を噛みしめています。これからの時代を生きる若い世代の人たちが「自己を大切に、人を大切に、母国を大切に」生きよう、また「夢と希望を持って生きよう」と思える国や世界にするために、みんなで力を合わせていくことが大切だと思っています。

国士舘の思い出

音楽に燃え、仲間に支えられた四年間

文学部教育学科初等教育専攻卒業（昭和五一年三月卒・文学部七期生）
館　正史

はじめに

一九七二（昭和四七）年四月、私は北海道から上京して国士舘大学に入学しました。

私が、本校を選んだ理由は三つでした。

一つ目は、父が教師であり、その生き方に強い感銘を受け、自分も父の様な小学校教師になりたいと願ったからです。進学雑誌に「国士舘大学の就職率や採用率は百パーセントに近い」と載っているのを見て「ここしかない」と決めたのでした。また、「一生に一度は、東京で暮らしてみたい」と思っていたことも後押しとなりました。

二つ目は、高校時代の地理の先生が、厳しさと礼節を重んじ、情熱を持って授業や部活のサッカーに打ち込む姿に感動し、その先生を尊敬していたためです。後から先生の出身校が国士舘大学であると聞き、私も国士舘大学の校風に強く共感しました。

三つ目は、当時の社会状況にあります。この頃は「学生運動」がまだ盛んな時期で、混沌とした雰囲気でした。勉学もままならないばかりか、命さえ脅かす社会ではいけないと日々思っておりました。高校時代、卒業した先輩が警視庁の警察官として勤務していたこともあり、私は、その後に続くべきか、それとも教師になるべきか決めかねていたなかで、警察官採用試験を受け『合格・採用巡査に命ず』の通知が警視庁より届きました。教師になるべきか・警察官になって治安を正すべきか大いに悩

歌う筆者
（中央、『文学部卒業アルバム』1976 年 3 月）

みましたが、国士舘の校風と人づくりに強く惹かれ、この大学を卒業して、明るい未来を築いていく児童を育てる仕事の方が私に向いていると判断し、進学の道を選択しました。

今思えば、国士舘大学で学び、そこで経験したことや学んだことを基に「教職の道」を歩んだことは、私にとって正しい選択であったと思います。

今、六九歳となった私が、大学四年間を振り返ってみると、東京の都会での楽しさと反面苦しさ、お金のない時のみじめさ、梅雨から夏にかけての蒸し暑さを体感したこと、これらを通して親のありがたさを実感したことが強く印象に残っています。さらに、初等教育専攻の個性溢れる沢山の先輩や友人達に、また初等教育専攻を超えた音楽研究会の仲間達にも出会え、彼らの支えがあって卒業出来たことも思い出されます。

他にも、柴田徳次郎先生の大講堂での訓話、諸先生方の情熱溢れる教え、柳楽吉郎学生監を始め学生課の先生方の励ましと助言、テノール歌手でもあった奥田良三先生（非常勤講師）の学生の心を見抜いた的確な独唱指導、声楽の宋鳳悦先生（非常勤講師）が手掛けた素晴らしい初等教育の歌、などです。また、一週間に一度の神辺八重子先生（非常勤講師）のピアノレッスンでは指が震え、頭は真っ白になる程の厳しい指導、その裏には学生を一人でも一人前に育てようとする熱意を感じました。一方、部活動では音楽研究会に入部し、混声四部合唱団の先輩や後輩のなかで調和する楽しさ、リーダーとして様々な困難に直面し悩んでいた時に、私に寄り添って温かい手を差し伸べてくれた先生方と先輩や級友のことを思い出すと今でも胸が熱くなります。

私は、一九七六（昭和五一）年三月二〇日、一〇号館最上階の講堂（剣道場）において総長柴田梵天先生から卒業証書を授かるまで、大学生活の四年間でこれからの人生を生きていくための基礎を養うことができました。

教職（再任用も含め）の道を退いて、今年で四年目。この間、様々な病気（肺炎・心筋梗塞等）で入退院を繰り返す現在、死ぬ前に一度、世田谷本校を見学して「あの時食べた、八号館地下一階の学食のカレーをもう一度食べてみたい」と思い、今年の三月に妻を同伴し懐かしく食しました。あの頃食べた味とは違いましたが、格別な思い出深い味でした。

校内には懐かしい大講堂も現存しておりました。また突き当りの正面校舎の上には、正座をして総長先生の訓話を聞いた講堂（一〇号館・剣道場）があり、当時の思い出が蘇ってきました。左横には主に初等科や短大の講義、中学校の授業で使用していた校舎も残っていました。ただ、校舎を囲むような塀はなく、正門も当時とは違った現代的な造りとなっており、時代の変化に合わせた造りに驚きました。

私が在学していた時になかった、「国士舘史資料室」に寄った際、担当者の方から学生時代の思い出を書いて頂きたい旨の話がありました。近頃は、年齢とともに記憶が薄れていくこともあり、なんとか心に残っていることを、掘り起こして書くことができればと願って筆を執った次第です。

東京での学生生活

思い出その一～五

思い出の一つは、入学直後に受けた強烈な印象でした。国士舘大学の「文武両道」の気風を育むため「武道」が必修であったこと、加えて入学式後にグラウンドでの分列行進が行われたことに驚いたことです。

特に、分列行進では、式台上の総長先生への「頭右！」などの号令に、身が引き締まるとともに、「捧げ杖」「立て杖」などの号令に同調する快感が身体中に走りました。同時に心の中で「これが国士舘大学なんだ」と強く感じた次第です。

大学の授業では「学生監」と呼ばれる教務課職員（私たちの担当は古荘武雄先生・柳楽吉郎先生）が、主に授業開始前に出席票を配り回収されていました。毎回、出

第３回初等教育運動会
（左上・筆者、『文学部卒業アルバム』1976 年３月）

席票（氏名・学生番号を記入）を提出することで、授業を確実に受けている証しになります。私の友人は、出席票の代筆を頼む人は一人もおらず、皆、誠実で真面目に講義を受ける良き学友でした。ただ日々の校内で、長ランを着た運動部や応援団の学生が、大きな声で「オッス、オッス」と挨拶するのには当初身がすくむ思いがしたものでした。

思い出のその二は、東京人になれた喜びです。

確か当時、一・二年生は、小田急線鶴川駅の鶴川分校で基礎的学習内容を習得し、三・四年生は世田谷本校で学習することになっていたと記憶しています。私は当初、鶴川分校に通うことを考えて、鶴川分校の学生課の柳楽吉郎学生監をはじめ様々な方からの紹介があり、そのなかから住む場所を決めました。鶴川分校には寮もあったのですが、高校時代にあまり良い印象がなかったため自炊アパートに決めた次第です。

場所は町田市金井町笹子でした。アパートの周辺は夏には蛙が鳴く田んぼがあり、棟は笹薮に囲まれていました。数棟ある長屋アパートの四畳半の部屋（共同台所、共同トイレ）に居を構えました。鶴川分校の登下校は、「笹子」のバス停から神奈川中央バスで鶴川駅まで行き、鶴川駅前からは小田急バス乗り換えて鶴川団地をとおって通いました。下校時は気の合った友人数名と徒歩で駅まで行くのですが、時々途中で、馴染みの喫茶店に寄り、

学校のことや音楽論を戦わせておりました。そこで、飲み物を注文する時「アイコ一つ」「レスカ二つ」等、この言葉を使うたびに東京人になったような気持ちになりました。

また、鶴川分校のサッカーグラウンドにおいて、日中、テレビ番組の青春ドラマ「飛び出せ！青春」の撮影収録がありました。主演の村野武範や酒井和歌子などの俳優が世田谷本校内やグラウンドで撮影している光景が、四階の教室から丸見えで、つい見入ってしまい授業どころではなかった時もありました。このことからもここが東京であることを実感したものでした。

思い出のその三は、自炊したことによりお金の大切さを知り、計画的に使うことを学んだことでした。

月末になると仕送りのお金も底を突き、お金がない時には登下校は全て徒歩となり、友達が誘う喫茶店通いも、理由をつけてアパートに帰らなければならなかったもので、仕送りが待ち遠しかった思い出があります。

本当に財布の中に数十円しかない時、路上に落ちているセロファンに包まれたお菓子を拾って食べたこともありました。また、空腹で窓の前になっている渋柿をたべて飢えを凌いだものでした。時には一週間食べない時もあり、耐えられないほど嫌いな豚バラ肉が冷凍庫の奥にあったことを思い出し、焼いて食べた時には「こんなに美味かったのか」と驚くと共に、「人間一週間ぐらい食べずとも、水さえあれば生きていけるものだ」と実感したものでした。ガスを数分使うにもお金、駅のトイレを利用するにもお金が必要であり、お金が無ければ生活できないことに気づかせてくれたのも、自分の金銭に対しての計画性の欠如を思い知らされたのも東京での生活を経験したからでした。

思い出の四つ目は、夏の蒸し暑さと冬の柔道です。

大学は勿論、家にもクーラー等はないため、夏の日中の蒸し暑さを凌ぐためには喫茶店やパチンコ屋に逃げ込み時間を潰すことでした。幸いにもアパートの部屋は、周りが孟宗竹林で風も適度に吹き抜ける良環境でしたので、夜は窓を全開にして寝ることが出来ました。また笹林が幸いして藪蚊の苦労はありませんでした。

冬の寒さは北海道出身の私ですから堪えられましたが、柔道場での、新年の寒稽古の畳の冷たさは、堪えがたいものでした。身体が温まるまでが特に辛く、受け身

の際、手で畳を強く叩いて衝撃を逃がすのですが、その時の手のしびれと痛さは、今でも身体が覚えています。指導してくださったのは斉藤先生でした。

思い出の五つ目は、学業とアルバイトの両立の難しさでした。

親の経済的負担を減らすため奨学金を受給しつつ、日中は授業を受け、夜勤のアルバイトをすることにしました。アルバイトは、相模原にある某パン工場での食パンの製造を行いました。

定められた場所に立っているとパン工場の送迎用バスが来ます。夜九時に工場の二階の仮眠室で寝て、午前零時に従業員が起こしに来るまで仮眠をとります。起こされた後、すぐに下の作業所のベルトコンベアー相手に仕事に取り掛かります。疲れていてもベルトコンベアーは自分の疲れた身体に関係なく一定の速さでパン種が来ます。トイレに行きたい場合は、何倍もの速さで仕事をこなし、パン種がしばらく来ないような隙間の中で、走ってトイレに駆け込み、用をたしました。

この様な生活を続けているある日、授業中に疲労から寝込んでしまうことが度々あり、「これではいけない」と気付き、この様なことがひと月続くことを考え、勉学とアルバイトの両立は無理であると判断し、一か月間だけにしました。「何のために大学に入ったのか、何が一番大切なのか」を考えて決めました。アルバイトを本業のようにして単位を落とし、大学を去って行った学友のことを時々ふと「彼は、今はどうしているんだろう」と思うことがあります。

「音楽」に燃えて

思い出その六～七

思い出の六つ目は、音楽に熱中した四年間と自分の性格を変えること（現状からの脱皮）が出来た体験です。

私は、高校時代「男声四部合唱団」を三年間続けてきました。鶴川分校に入り、田代先輩や寺田悟先輩方に誘われ『音楽研究会』へ入部しました。

当初は男女一四名から出発し、後に二四名に増えました。混声四部合唱団で、顧問は確か大島先生であったと思います。部員は全国各地から集まった仲間で、教室で合唱の練習をして、大学祭や初等教育専攻の定期演奏会での発表を目標に日々練習に励み、様々な町（石川県羽

昨市、伊豆大島、長野県白樺湖等）で合宿したりコンパをしたりして心を繋いでいきました。

合唱団のメンバーを列記すると、初代部長の田代先輩のほか寺田悟先輩・平先輩・若林先輩らの諸先輩方、同学年や下級生には、大竹淡紅子・中村悦美・石井よしの・山岸幸美・畠山美津子・大賀淑子・林けい子・森由美子・長沢多津子・福地優子・長谷川洋子・田代知子・内田紀子・高見庸子・岩田幸子・小林まゆみ・松井伊津美・遠藤孝典・田沼孝・城所正年・森合智昭・馬場宏一・鎌田光三の各氏で、お互いに高めあってきました（敬称略）。現在でもその当時の学友が目に浮かびます。

音楽研究発表会
（『文学部卒業アルバム』1976 年 3 月）

初代部長田代先輩の卒業前となり、次の二代目部長が選出されることになりました。私でした。みんなを引っ張って行く力量もない私でしたのでビックリです。「コツコツと努力する姿と公平さ、温厚さが君にはあるから」これが理由であったように記憶しております。

正直、私は、リーダーとしての積極性に乏しく、特に女性に話しかけるのが大の苦手でした。しかし、様々な長期合宿や日々の練習において、女子部員とも話し合いがあり、女子に対して指示や司会、または仲介を要する場面などが必然的にあり、しだいに女性にもズケズケと話しかける自分になっていました。女子の下宿部屋を借りた飲み会では、酔っ払って階段から転げ落ち、壁にへこみ傷を作ったのが自分とは気づかず、後日、私が「誰

だ。こんな傷をつけたのは?」と聞くと、部員から「館先輩ですよ。」と言われ、穴があったら入りたい気持ちでした。部屋主の女子部員には申し訳ない気持ちでいっぱいでした。「人間の性格は自分を取り巻く環境で変えることが出来るし、変えなければならない時が来る」このことを学びました。

後に、小学校教員になってから六年生を担任した時、教師に対しても物おじせず話す気の強い女子児童と、他の女子児童と言い争いがありました。私が間に入って指導していると気の強い女子児童が強い口調で「先生、人間の性格は変わらないんです。だから先生の言うことを聞くことは無理です。」と反発してきました。そこで私は「性格は変わるし、変えなければならない時は、自分が努力すれば必ず変えられる。脱皮出来ないザリガニは死ぬ」と言って指導したことがありました。これは、私が大学時代に音楽研究会で実践していた経験から、確信を持って言えたことでした。

最後の思い出は、三年生の時、初等教育専攻の卒業研究で選択した「独唱」での経験です。

講師の先生は、プロの独唱家・奥田良三先生であり、

第２回初等教育音楽会
（『文学部卒業アルバム』1976 年３月）

また、ピアノ伴奏はＮＨＫでも活躍された神辺八重子先生でした。

高校時代に「男声四部合唱団」を続けてきた私は、常日頃から自分の声に自信があり、当然、自分が一番だと思い込んでいました。そのようなある時、授業の課題曲で「Son Tutta Duolo（私は悩みに満ちて）」という曲を頭声発声と感情を込めて歌い、自分はやっぱり一番上手く歌えたと有頂天になっていたところ、奥田良三先生が言った言葉に、身が凍りつきました。

それは「君は確かに声は良いが、しかしうぬぼれて努力を怠っている。正確に楽譜を読み取った歌唱をしていない。これからは謙虚に自分を更に磨くと本当に素晴らしい独唱家になるよ」という言葉でした。

この奥田先生の一言は、教職に就いてからも私の生き方の指針となりました。今の自分に満足するのではなく、自惚れることなく、常に自己を厳しく見つめ、努力を忘れずに、毎時間どんな時にもベストを尽くしていくことを教えていただいた貴重な指導でした。この言葉は今も、今後も忘れずに大切にしていくつもりです。

おわりにかえて

国士舘大学での学生時代を振り返ると、常に私の周りには、大学の素晴らしい先生方や職員の皆さん、四年間、経済的に支えてくれた両親、そして心優しい先輩と級友が寄り添ってくれました。北海道から上京した私は、一人ぼっちではありませんでした。

私にとって国士舘大学での四年間は、その後の社会の荒波を乗り越えて行く「術」と「気魄」を養うことができた貴重な時間でした。

最後に、思い出深い学生生活を過ごさせてくれた国士舘大学に感謝すると共に、益々の発展を心より祈念申し上げます。

国士舘創立 100 周年記念事業　　国士舘百年史編纂委員会 編

『国士舘百年史』

通史編 ・ 史料編

『国士舘百年史　通史編』
A5 判縦組　上製本　1,200 頁　2021 年 3 月刊行
第 1 部　国士舘の創立と発展
第 2 部　戦後の再建から総合学園化
第 3 部　学園の改革から創立 100 周年へ
資料（配置図・略年表・沿革図・役職者一覧）

『国士舘百年史　史料編』（上・下 2 冊）
【上巻】 A5 判縦組　上製本　1,000 頁　2015 年 3 月刊行
第 1 部　国士舘の創立と発展
校舎配置図・解題
【下巻】 A5 判横組　上製本　1,000 頁　2015 年 3 月刊行
第 2 部　戦後の再建から総合学園化
第 3 部　学園の改革から創立 100 周年へ
解題

創立から今日に至る国士舘 100 年の歩みを、史料に基づいて学術的にまとめた、学園史研究の必携書。『通史編』と『史料編』上・下の 3 冊 1 組。

ご希望の方は下記へお問い合わせください。
学園の募金事業にご賛同をお願いします。

問い合わせフォーム

Kokushikan
学校法人 国士舘
国士舘史資料室

吉井武夫　……　39、125
吉井宝一　……　550
吉井正義　……　551
吉岡輝城　……　847、852
芳沢謙吉　……　244
吉田淳　……　38
吉田磯吉　……　57
吉田茂　……　392
吉田松陰　……　4、9、24、54、55、147、148、162、227、288、289、290、291、442、443、496、559、560、1146、1147、1151、1152
吉田治郎　……　1056
吉田初次　……　39
吉田秀雄　……　416
吉永侃　……　76
吉永敬行　……　711、719
吉野作造　……　4、5、6、24、25、40、42
吉野智子　……　1141
吉原正隆　……　63、125、171
吉本迪　……　39
四方一渤　……　857、1056

【ら】

ライムンド・スプリード　……　1153
ラス・ビハリ・ボース（Rash Behari Bose）　……　34、67、84、90、104、105、110、112

【り】

陸学芸　……　931
李垠王　……　286
利光三津夫　……　453

【る】

ルソー（Jean-Jacques Roussean）　……　536

【わ】

若月胤行　……　39
若菜繁　……　755
若林克彦　……　818、824、901、914、992、993、1005、1007、1075、1077、1078、1132
和歌森太郎　……　353
和田任功　……　551
和田貴広　……　1113、1119
和田豊治　……　96、98、125
渡辺一郎　……　465
渡邊海旭　……　21、49、60、61、63、67、84、90、91、100、104、108、122、124、125、130、148、205、252
渡辺三郎　……　599
渡辺繁興　……　699、700
渡辺中　……　967
渡辺剛　……　914、1121
渡邊東光　……　110
渡辺則芳　……　966、972、1028
渡辺宏　……　617
渡辺盛雄　……　551
綿引紳郎　……　734、754、755、756、757、763、766、1047
和田博幸　……　938
渡部一二　……　593
ワルター・シュネーフース　……　298

安川清三郎　……　57
安川敬一郎　……　123、174
安川第五郎　……　396、426、443
安田家　……　98、123、127、246
安山親雄　……　39
柳川覚治　……　709
柳原源蔵　……　205
柳森優　……　715
矢野閑　……　76
矢野恒太　……　294
矢野博志　……　720、806、1154
山内長昌　……　774、1047
山浦瑛子　……　1032
山岡藤三郎　……　38
山縣有朋　……　54、128、170
山縣伊三郎　……　128、131、132
山縣家　……　131
山川良一　……　397
八巻節夫　……　510
山口開治　……　765
山崎源二郎　……　5、8、37、39、46、48、50、56、61、67、84、104、105、106、108、267、270
山崎四六　……　171
山崎竹照　……　1047
山崎達之輔　……　130、133、134、197、198、262、266、268、269、270、271
山崎直三　……　84、90、104、205、262、263、265、267
山﨑弘之　……　824、976、978、1076
山崎道夫　……　486
山崎義雄　……　39
山崎亘　……　37、39
山下亀三郎　……　98
山下泰弘　……　673
山下義韶　……　204、205、206
山田倉太郎　……　67、69、109、125、126
山田家　……　109
山田耕筰　……　159、255
山田三郎　……　38
山田三七郎　……　5、37、39
山田寿一　……　551
山田昭二　……　713
山田愼吾　……　1125
山田悌一（喜多悌一）　……　5、11、37、39、47、68、69、71、76、77、83、84、96、102、104、105、109、111、113、124、126、130、131、139、149、158、171、248、249、250、251、252、253、254、255、256、257、263、289、422、526、528、862
山田時章　……　69
山田登美子　……　69
山田力弥（椎名力弥）　……　65、75、76、83
山田了然　……　20、50、52
山津俊郎　……　323
山梨半造　……　96、130
山西源三郎　……　236
山根ソマ　……　19
山村延昭　……　453
山本権兵衛　……　26、111
山本昌一　……　893、911
山本条太郎　……　135、199
山本忠親　……　594、595
山本為三郎　……　397、416
山本英雄　……　715
山本正男　……　353
山本昌邦　……　674、1119

【ゆ】

結城豊太郎　……　126
結城虎五郎　……　58
湯川次義　……　869
行元博文　……　441

【よ】

横井時敬　……　58、59、63、67、90
横尾龍　……　38、397
横沢民男　……　892
横田一枝　……　76
横山彦真　……　549、550、615

宮城栄三郎　……　172、187
三宅弘毅　……　38
三宅雄次郎（雪嶺）　……　8、48、50
宮坂幹一郎　……　363、1202
宮崎茂　……　380
宮崎民蔵　……　114
宮崎滔天　……　114
宮沢ミシェル　……　674
宮沢保信　……　673
宮沢林直　……　892
宮島熊蔵　……　380
宮島大八　……　8、48、49、50、68
宮地幸雄　……　640、1049、1202
宮田輝　……　495
宮田光雄　……　126、131
宮田幸吉　……　554、618、626
三好貞雄　……　296、298
三好清一　……　38
ミル（John Stuart Mill）　……　536
ミルコ・アルデマーニ　……　298
美和作次郎　……　58

【む】

向軍治　……　43
武者小路公共　……　316、394
ムッソリーニ　……　69、292
ムバラク（Muhammad Husni Mubarak）
……　717
村井修　……　39
村井吉敬　……　1033
村岡健八　……　149、176
村岡孝純　……　381
村田正志　……　486
村中嘉二郎　……　549、550、614、723
村松恒一郎　……　111
村山龍平　……　131

【め】

メルクリアリス（Hieronymus Mercurialis）
……　536、1021

【も】

毛利元昭　……　147
茂木久平　……　34
持田盛二　……　441
持田巽　……　131
望月圭介　……　134、197、420
望月健一　……　765、774、905
望月信彦　……　755、891
茂木優　……　677、679
本告亮一　……　38
本山彦一　……　131、134
森茂　……　39、74
森純吾　……　486
森武夫　……　453、509、696
森武次　……　551、747
森田健三　……　699、701、703、704、706
森田誠一　……　39
森田久　……　22、352、393、397
盛田弘　……　549
森犢　……　38
森俊蔵　……　49、56、57、61、63、67、
84、104、111
森野茂　……　38
森矗昶　……　294
森秀　……　441、445、554、576、618、
626
森吉義旭　……　218
森喜朗　……　752、753、933
森脇保彦　……　579、672、677、679
諸井貫一　……　416、426
師岡秀麿　……　465

【や】

矢口捷三　……　76
矢口次夫　……　857
矢口統堂　……　1004
矢澤邦彦　……　353
矢嶋宏一　……　1106
矢島鎗司　……　910
安岡正篤　……　206

773、798、810、812、816、817、857、863、865、875、898、899、905、907、908、909、1004、1051、1099
松島博二　……　39
松平頼寿　……　294
松田邦後　……　39
松田登　……　39
松田道一　……　56、61、67、281、284、419
松浪健四郎　……　1153
松野鶴平　……　11、38、56、61、281、284、294、391、392、394、397、398、399、409、423、442、454、455、641、865
松野頼三　……　418、610、615、695、866
松林桂月　……　290
松村辰喜　……　114
松村洋一郎　……　711
松本惇　……　910、1131
松本健　……　1094、1140
松本健次郎　……　174、394、416、426
松本洪　……　204、205
松本栄　……　39
松本生太　……　437、442
松本俊夫　……　765
松本伸夫　……　892
松本幹一郎　……　397
松本良隆　……　152、153
松山守善　……　114
的射場敬一　……　983
真野正順　……　20、255、276、356、389、409
間宮尚香　……　316
マルクス（Karl Marx）　……　536
丸田千代一　……　38
丸野豊　……　149
丸山栄之助　……　75、76
丸山節英　……　551
丸山孝司　……　441
丸山正昭　……　321

【み】

三浦梧楼　……　26、33、48
三浦信行　……　510、610、614、765、810、817、829、863、869、870、875、876、880、882、899、907、908、910、911、930、944、982、988、1075、1091、1092、1144、1199、1203、1204
三浦ヒロ　……　576
三浦広司　……　675、677
三笠宮崇仁親王　……　712、1152
三笠宮崇仁親王妃百合子　……　35
三上弘之　……　449、549
御木本幸吉　……　397
味酒安則　……　848
水城伊三次　……　76
水野秀　……　39
水信健　……　579
水野錬太郎　……　134、135、197、198、206、207、225、233、244、261、269、270、272、273、280、1198
三隅一成　……　576
三田弘　……　176、240
三井家　……　98、119、123、127、128、135、136、139、143、199
光定道次　……　747、753、755、769
光嶌督　……　517、518
光永星郎　……　294
緑川龍馬　……　39、43
水上七雄　……　258、1202
南克之　……　1139、1203、1204、1205
南崎雄七　……　205
南隼一　……　38
峯玄光　……　108
峯村三郎　……　205、486、627
蓑田胸喜　……　162、205、206
三原建夫　……　613
三船久蔵　……　33、441、454
三村哲雄　……　39
宮川一貫　……　5、26、32、33、34
宮川正彦　……　33

藤井真透　……　84、149、240
藤嘉三郎　……　22、29、176、352
藤木邦彦　……　486
藤沢親雄　……　453
藤谷豊松　……　704
藤田正実　……　39、695
藤本忠　……　176
藤本万治　……　205
藤森馨　……　917
藤山愛一郎　……　394
藤原銀次郎　……　135、294、397
藤原咲平　……　91
藤原繁　……　218
藤原俊雄　……　111
藤原英雄　……　76
船橋良二　……　275
古岡力太郎　……　61
古上敦利　……　307
古川義八郎　……　593
古川武　……　76
古庄武雄　……　551
古田重二良　……　442、465

【へ】

ヘーシンク（Antonius Johannes Geesink）　……　664
ヘルドリッヒ（Andreas Heldrich）　……　865

【ほ】

帆足竹治　……　465
星川進　……　380
細貝磯吉　……　90
細川潤一郎　……　275
細川昌男　……　550
堀井竜司　……　551
堀寛平　……　38
堀口清　……　352
堀三太郎　……　98
本郷房太郎　……　125
本庄繁　……　250
本田燕左衛門　……　58
本間憲一郎　……　39

【ま】

前岡彰　……　380
前川和也　……　1032
前川國男　……　382
前川健吉　……　677、679
前川峯雄　……　1019
前城直子　……　892
前田家　……　174
前田隆　……　322
前田利為　……　174
前田利郎　……　817、981、1108
前田裕孝　……　674
前田光世（コンデ・コマ）　……　715
前野喜代治　……　486、547
牧亮　……　896
槇大輔　……　723
牧野元次郎　……　126135
牧勇次郎　……　1056、1063
馬越恭平　……　96、98、130、135
舛井一仁　……　966
益子久吾　……　551
増田栄　……　441
増田信　……　755、1047、1056
桝村公一郎　……　222、308
町田耕一　……　993
町田嘉三　……　715
待鳥清九郎　……　205
町村信孝　……　865
マチルド・カトウ　……　48、50、67
松井石根　……　294
松浦一老　……　39
松岡勇　……　575
松尾忠二郎　……　219
松尾博隆　……　381
松方幸次郎　……　98
松木豊雄　……　549
松下周太郎　……　414
松島博　……　735、751、752、755、764、

花井忠　……　480
葉梨新五郎　……　65
花田筑紫　……　76
花田半助（大助）　……　5、34、35、37、39、43、51、55、57、60、61、68、69、71、104、105、108、110、111、116、122、124、125、126、128、130、142、196、262、263、268、269、270、272、276、281、284、296、356
馬場恒吾　……　90
土生文之助　……　171、188
浜口金一郎　……　480、668、704、706、756
濱地八郎　……　56、58、59、61、104、108、139、268、269、271
濱中修　……　988
浜野瑞樹　……　675
早川和夫　……　678
早川千吉郎　……　98、125
林勇　……　551
林幹　……　1154
林毅陸　……　6、38、90
林末五郎　……　176
林田亀太郎　……　111、112
林芳正　……　1153
原口竹次郎　……　7、8、42、44、46、48、50
原幸子（小林幸子）　……　579
原重信　……　380
原敬　……　6、22、40、42、58
原田金之助　……　58
原田政治　……　37
原田忠一　……　589
原田瓊生　……　298
ハンス・ゲオルグ・ゼフナー　……　930
伴勇資　……　676

【ひ】

日蔭暢年　……　579
東木誠治　……　328
東久邇宮稔彦王　……　251
東信義　……　641、711、719、770
東政俊　……　441
匹田貞太郎　……　149
日高友一　……　551
肥田耕三　……　39
ヒトラー　……　297
ヒューズ　……　79
平生釟三郎　……　294
平島達夫　……　31、32、39
平田一誠　……　75、76
平田四郎　……　220
平塚秀雄　……　65
平沼騏一郎　……　44
平沼淑郎　……　44
平原重幸　……　76
平間光雄　……　429
廣川弘禪　……　394
廣瀬豊　……　291
広田弘毅　……　256
廣野行甫　……　914
廣渡修　……　841

【ふ】

深井靖男　……　575
深川長郎　……　928
深澤亨　……　1047
深水龍雄　……　76
福井亘　……　393
福澤桃介　……　98
福澤諭吉　……　393
福島隆吉　……　76
福田三郎　……　914
福田赳夫　……　611
福田英貴　……　1047
福永年久　……　394
福原八郎　……　236
福本正幸　……　713
藤井新一　……　508
藤井孝興　……　383
藤井武彦　……　550
藤井秀夫　……　553、663、701、712、717

南里祐義　……　31、32、38

【に】

新田ミチ　……　844、849
西岡士郎　……　39
西岡竹次郎　……　43
西尾邦夫　……　483
西澤直則　……　774
西高辻定信　……　524
西田隆男　……　394
西田孝宏　……　672
西津袈裟実　……　76、309、316
西寧　……　551
西原公　……　773
西原春夫　……　738、875、876、878、880、882、884、886、887、888、894、909、926、927、929、944、945、966、1057、1075、1111、1149
西村春夫　……　896
西山一行　……　951
西山将士　……　1113、1118
二条厚基　……　91
新田興　……　353、362、376、380、414
蜷川新　……　91
ニューゼント　……　353
楡井武一　……　593

【ぬ】

ヌール・ヤルマン　……　930
沼田政矩　……　468
沼田安蔵　……　443

【ね】

根津嘉一郎　……　61、63、96、98、130
根本剛　……　353、376、380

【の】

野木将典　……　713
野田卯太郎　……　4、5、21、30、39、53、56、58、59、61、63、95、96、112、114、121、122、126、128、129、130、131、133、134、139、171、196、197、266、279、420、865
野田俊作　……　39、91、104、126、130、186、262、263、266、268、270、273、275、276、278、282、394、396、397、398、409、429、443
野田四郎太　……　39
野田平太郎　……　615、695、751
野田美鴻　……　47、249
野間省一　……　416
野間清治　……　294
野村吉三郎　……　426、442、443、641
野村興兒　……　1152

【は】

ハーディング　……　79
芳賀忠利　……　164
萩原忠　……　361
橋本左内　……　4、9、24、54
橋本孝　……　437
橋本徹馬　……　37
橋本豊司　……　641
橋本恕　……　771
橋本戌子郎　……　176
橋本雅夫　……　1047
柱谷哲二　……　674
蓮沼門三　……　86
長谷川栄次　……　551
長谷川光太郎　……　296、615、695
長谷川五郎　……　1108
長谷川峻　……　695
長谷川均　……　910、1094
長谷川良一　……　39
長谷川良信　……　5、20、21、35、37、39、50、60、62、67、100、104、110、355
秦豊助　……　244
服部金太郎　……　98、126、131、134、135、197
服部利夫　……　441
鳩山一郎　……　394

徳川家達　……　86
徳富猪一郎（蘇峰）　……　4、5、10、23、24、25、58、79、92、116、121、122、124、125、126、128、130、133、134、135、148、196、197、262、266、268、269、274、279、292、293、294、297、299、350、390、396、397、398、409、411、419、426
得能正展　……　328
床次竹二郎　……　96、97、130
時子山常三郎　……　218、219
戸崎徹　……　706、766
戸谷一夫　……　1153
戸田容弘　……　976
土橋友四郎　……　480
富田敬一　……　755、765
冨田芳郎　……　486
友池庶　……　19
豊田章　……　1019
豊田正治　……　171
鳥居龍蔵　……　125
鳥野幸次　……　204、205、265、273

【な】

内藤順太郎　……　50
内藤寛　……　65、75、76
内藤正和　……　1121
内藤政光　……　205、353
中井武三　……　279
永井柳太郎　……　7、8、32、42、44、48、90、104、105
永江清　……　29、39
長岡利幸　……　1132
中尾喬　……　362
中垣内輝　……　29
中島豺　……　719
中島久　……　380、384
中島行雄　……　550
中島利一郎　……　353、362、376、380、414、
長島隆二　……　46、50、90
中島礼子　……　891
中条徳三郎　……　465
長瀬鳳輔　……　49、51、56、59、61、63、68、69、71、81、84、90、104、125、139、142、148、171、176、289
永田秀次郎　……　294
長冨浩志　……　678
中根雅夫　……　910
中根実子　……　381
中野菊夫　……　310
中野金次郎　……　394、397
中野堅司　……　673
中野正剛　……　5、26、33、37、39、43、46、48、50、51、90、104、105、294、297、299
中野宗助　……　38
中野正　……　352、352
中野森蔵　……　39
中橋徳五郎　……　63
中原稔　……　220、404、407、437、442
中部謙吉　……　397
中牟田和子　……　845
中村誠太郎　……　75、76
中村均　……　579
中村浩　……　441
中村房次郎　……　294
中村正己　……　551
中村宗雄　……　22、343、389、409、413、480、615、617、624、626、695
中村屋　……　34、67
中村弥三次　……　413
中村義雄　……　523
中村義麿　……　39
中元令士　……　1047、1049、1063
中山博道　……　204
永山美義　……　328
中山優　……　298
中山義夫　……　421
灘尾弘吉　……　429
鍋島態道　……　397
成瀬正勝　……　421

田中斉之　……　397
田中信彦　……　39
田中秀治　……　896
田中博人　……　76
田中貢　……　413
田中満　……　39
田辺忠男　……　509、510
田鍋安之助　……　125
谷岡貫二　……　171
谷岡三男　……　1132
谷川忠志　……　76
谷公市　……　579、677、678、679
田沼武　……　39、67、82、83、104、105、111、149
ダヌンツィオ（GabrieleD`Annunzio）　……　69
種子田重彦　……　765、891
田畑隆璋　……　579
田原剛　……　39
田村幸策　……　453、455、456、508、545、554、610、618、626
田村彰一　……　111
田村丕顕　……　115
田村満治　……　105
田村泰彦　……　997
田村幸男　……　514
ダメルジ（Muyad Said Damerji）　……　717
田森慧　……　76
團伊能　……　393、397
團琢磨　……　129、133、134、135、197

【ち】

地神裕史　……　1119
秩父宮雍仁親王　……　285
珍田捨巳　……　123、132

【つ】

津上退助　……　397
塚脇伸作　……　429
月成勲　……　57
筑紫熊七　……　252
筑紫豊　……　205
津口信男　……　550
辻喜次郎　……　38
辻小太郎　……　240、241、242
辻俊哉　……　1116
津島壽一　……　90
辻本一貫　……　323
土屋吉太郎　……　215、352
土屋敏雄　……　353
恒吉國秋　……　76
角田光五郎　……　171、172
津山弘明　……　549
鶴淵毅　……　39

【て】

出口一也　……　677
出口芳雄　……　281、284
手島勲　……　76
寺尾琢磨　……　149
寺尾亨　……　5、6、8、33、40、46、47、48、49、50、56、58、59、61、63、125
寺川喜四男　……　549

【と】

土居内数馬　……　76
土井晩翠　……　159
東儀鉄笛　……　36、78
東郷次兵衛　……　33、39
東條英機　……　4、299、323、324
東宮鉄男　……　256
頭山立助　……　39、104、267、270
頭山満　……　4、5、6、8、9、10、21、25、26、33、34、36、39、40、48、49、50、53、56、57、58、59、61、63、71、74、77、92、95、96、114、115、116、121、122、123、124、125、126、130、133、135、139、143、161、196、197、262、265、266、267、268、269、270、271、273、274、278、279、292、293、294、298、299、420

【た】

ダーギン（RusselL.Durgin）　……　354
醍醐敏郎　……　429
大正天皇　……　130、1178
平貞蔵　……　39
高石真五郎　……　294
高尾義則　……　719
高木久太郎　……　18、19
高木作太　……　397
高木波次郎　……　20、125、142、289
高木正朝　……　724
高木正得　……　35
高島菊次郎　……　394、397、416、429
高島基江　……　394、397
高杉晋一　……　443
高杉晋作　……　54
高杉善治　……　550、595、602、723
高田栄三郎　……　76
高田釜吉　……　98
高田早苗　……　7、42、43
高田真治　……　486、536
多賀恒雄　……　677、679
鷹取盛（高取盛）　……　215
高取芳武　……　465
高鍋日統　……　108
高西一宏　……　677、679
高野佐三郎　……　204
高野敏春　……　896
高橋彰　……　900
高橋一夫　……　39
高橋菊蔵　……　125
高橋源一　……　75、76
高橋是清　……　31、198
高橋三吉　……　420
高橋利子　……　575
高見之通　……　91
高椋幹樹　……　258
高村象平　……　465
高村正寿　……　76、246
高柳秀樹　……　678
滝沢喜秋　……　765
瀧正雄　……　90
武井重雄　……　866、1101
竹内謙二　……　509、510、554
竹下数馬　……　352
竹下少佐　……　153
竹田復　……　413
武田信盛　……　599
武田熙　……　65、74、75、76、77、83、104、105、111、112
武部欽一　……　134、276、277
武部小四郎　……　18
竹村俊幸　……　719
田崎仁義　……　453、509
田澤義鋪　……　86、87
田島梧郎　……　258
田尻稲次郎　……　4、5、6、8、36、38、40、48、49、50、53、56、59、61、95、96、125
田代茂樹　……　397
田代博司　……　914
多田清伍　……　641
立花小一郎　……　91、96、113、130
立花定　……　282
橘純一　……　205
伊達治一郎　……　579、661、675、677、678、679、1117、1154
建部武彦　……　18
建部遯吾　……　33
田中猪作　……　38
田中角栄　……　418、465
田中義一　……　55、123、132、135
田中熊雄　……　76
田中敬子（池田敬子）　……　429
田中健介（健助）　……　21、29、39、267、271、276
田中健藏　……　848
田中省三郎　……　39
田中捨身　……　112
田中都吉　……　294
田中俊蔵　……　5、37、39

新海英一　……　397
眞武直　……　535
進藤喜平太　……　57
眞藤愼太郎　……　393、396、397
眞藤義丸　……　39、68、71、84、104、204、205、262、263、265、267、268、269、270、271、272、273、275、276、279、280、281、282、283、289
神保規一　……　353、414

【す】

末次正尚　……　837、844
末永一三　……　56、91、104、126、134、197、218、262、270、271、272、273、275、276、277、279、280、281、283
末松鳳平　……　397
眇田熊右衛門　……　32、39
菅原克夫　……　441、576
菅原孫次郎　……　39
菅原弥三郎　……　675、677、679
杉浦重剛　……　63、125
杉野隆　……　914
杉森孝次郎　……　90
杉山重利　……　1121
鈴木馬左也　……　125
鈴木貫太郎　……　392
鈴木輝一　……　1079
鈴木桂治　……　1113、1118、1119
鈴木健次　……　274
鈴木三郎助　……　397
鈴木錠蔵　……　90
鈴木善一　……　76
鈴木惣吉　……　751、755
鈴木虎雄　……　76
鈴木八郎　……　429、430、441、576、765、771
鈴木久男　……　453
鈴木優　……　914
鈴木康明　……　896
須田利信　……　125
須藤明治　……　896
須藤磐　……　715、772
首藤忠男　……　551
砂田重民　……　704、709
スバス・チャンドラ・ボース（Subhas Chandra Bose）　……　67
角逸三　……　39
角徳一　……　105
住友吉左衛門　……　98、125

【せ】

関口洋五郎　……　323、324
関野直次（直治）　……　37、38、104、116、126
関法善　……　719
関屋貞三郎　……　123、124、132
瀬戸山三男　……　749
瀬野隆　……　910、913、914、915、916、1013、1154
千宗室（玄室）　……　933
千田萬三　……　75、76

【そ】

宋越倫　……　549
相馬愛蔵　……　34
相馬家　……　67
副島義一　……　67、84、91、110、113、148、156、157、162、207、219、220、255、262、263、267、270、272、273、275、276、279、280、281、282、283
副島民雄　……　165、205
添田壽一　……　6、33、38、40
曽我部和子　……　429
曽我部静雄　……　486
曾我祐準　……　58
十代田三郎　……　468
外山岑作　……　38
曽根原実　……　551
園部晃子　……　576
園部暢　……　576
園部泰文　……　468
孫文　……　114

124～135、141、142、144、147、150、151、153、156、171～174、187、196～198、200、204、205、207、222、238、240、242～244、247、249、261～285、288、289、291～294、296、298、299、305、306、308～310、315、316、318、320、328～330、339、340、343、351、354～356、362、368、389～394、396～399、404、405、407～409、411、414、417～422、424、429、430、433、434、436、437、439、442、443、449～451、454、455、458、461、462、465、466、472、478、489、494、496、502、508、514～516、521、524、532、534、535、544～550、552～559、561、564、567～569、574、578、585、586、594、599～601、603、604、606、610～615、626、631、641、680、723、746、839、868、928、994、1151、1154
柴田德文　……　713、747、755、769
柴田八平　……　19
柴田英明　……　1110
柴田寛　……　441
柴田フテ　……　18、19
柴田梵天　……　343、344、353、356、358、359、376、377、380、382、388、389、395、404、405、408、409、441、523、544、552、553、585、595、599、610、611、612、613、615、616、624、626、637、649、668、680、681、695、701、704、706、707、708、711、712、713、714、716、717、718、719、720、721、734、747、749、750、751、752、753
渋沢栄一　……　4、10、86、88、96、97、98、118、121、122、123、124、125、126、127、128、129、130、132、133、135、139、141、143、144、196、420、994
渋澤敬三　……　396、397、426
澁谷光時　……　39
島崎修次　……　1037、1122
島崎博　……　1096
島田孝一　……　407、411
島津定泰　……　549、577、606
島原逸三　……　90、104
島本源八　……　39
清水一広　……　575
清水洸　……　774
清水成之　……　754、755、763、771、784、798、804、857、1099
清水静文　……　91
清水忠蔵　……　65
清水敏寛　……　958、959、1008、1094
清水登　……　163
清水稔　……　363
清水豊　……　76
清水良三　……　766
下位春吉　……　69、110、113、114、116、124、298
下川慶雄　……　33、38
下重龍雄　……　550
下條美智彦　……　894
下中弥三郎　……　417、534
下村宏　……　131
下村誠　……　1117、1144
ジャコモ・バウルッチ　……　292
十時龍雄　……　276
樹下清　……　254
樹下信雄　……　20、271、276、356、389、409
樹下隆之助　……　615、695、755
庄司栄治郎　……　550
東海林透　……　370
松濤泰近　……　58
正力松太郎　……　294
昭和天皇　……　363
白石好夫　……　5、33、34、37、39、41、42、43、46、55
白銀良三　……　778、831、832、900、993、994、1076
城山昇　……　775

斎村五郎　……　5、32、33、37、39、67、74、78、84、104、110、149、176、204、205、206、229、240、265、352、414、429、441
佐伯梅友　……　353
佐伯弘治　……　354、852、888、1075、1076、1131、1132、1139
佐伯仙之助　……　33、39
佐伯唯一　……　22、269、271、276、389、409
佐伯矩　……　90
三枝茂智　……　453、508
坂井大輔　……　104、105
酒井忠雄　……　551
酒井永浩　……　593
酒井浩文　……　679
坂井正郎　……　429、441、576、578、699、700、784
坂牛哲　……　551
坂口二郎　……　271、293、296、297、298
坂本孝徳　……　892
坂本辰男　……　707、710、747
坂本孫四郎　……　39
坂本力　……　638、1125
阪柳豊秋　……　1013、1017
佐久間総次郎（惣治郎）　……　43
櫻井忠温　……　162
櫻井よしこ　……　1152
佐倉惣五郎　……　20、57
迫水久常　……　206
佐々木等　……　441
佐々木宗興　……　869
佐々木義宣　……　170、176
笹崎正明　……　551
笹森佐吉郎　……　39
佐滝亀官太　……　550
サダト大統領夫人　……　717
佐々博雄　……　519
佐藤圭一　……　1092、1137、1153
佐藤昭平　……　328
佐藤尋生　……　713
佐藤正　……　46、50、59、61
佐藤忠正　……　677、678
佐藤忠吾　……　264、265、274、275
佐藤俊夫　……　639、702、707、765、812、817、831、1013
佐藤英夫　……　429、575
佐藤義治　……　223
佐野保太郎　……　205
佐原恭輔　……　672
鮫島晋　……　39
佐山済　……　205
澤田正昭　……　1032

【し】

椎尾辨匡　……　49
椎名悦三郎　……　396、442、454、611
塩川寛和　……　677、679
塩崎彦市　……　419
塩沢正一　……　461、464、465、554、618、626
志垣有輝　……　76
志賀忠捷　……　720
重藤信英　……　713
茂本ヒデキチ　……　1154
宍倉靖　……　323
舌間幾世　……　38
志田又七　……　172
篠崎昇之助　……　38
篠崎彦二　……　149、205
信太友親　……　39、104
篠原秀吉　……　38
柴田喜一郎　……　38
柴田玉宗　……　50、52、67、84、91、124、139、149、165、176、205
柴田清　……　397
柴田宅兵衛　……　18、19
柴田德次郎　……　3、5、8、9、11、16～23、26、27、29～39、41～43、47、48、50～52、55～57、59～61、63、67～69、71、78～82、90、92、93、97、98、104、105、108、110～116、119、121、122、

倉林清巳　……　422
栗栖淳　……　988
栗野慎一郎　……　10、95、96、121、122、126、127、130、133、139、143
黒板昌夫　……　486
クロード・プルヴォー　……　720
黒須厚子　……　673
黒田修身　……　1047
黒田長知　……　18
黒山武彦　……　38
桑原善三　……　76

【け】

慶子・デギトール（木村慶子）　……　720
剱木亨弘　……　392、442、443、523

【こ】

小池國三　……　96、98、125
小池藤五郎　……　352,353、362
小泉英一　……　480、972
小泉純一郎　……　1069
小泉又次郎　……　294
小磯国昭　……　30、392、250
小岩井弘光　……　1024
康熙帝　……　68
黄智慧　……　1033
河本美緒　……　1115
小金井良一　……　428、441
古賀廉造　……　33
小坂順造　……　41、135、281、284、294、296、299、396、397、398、409、411、416、417、419、423、443
小坂善太郎　……　394、418
越知彦四郎　……　18
小島七郎　……　39
小谷文済　……　276
小谷正己　……　914
児玉光雄　……　593
児玉光規　……　362
後藤曠二　……　465
後藤新平　……　5、6、33、38、41
厚東常吉　……　290
後藤文夫　……　294
小西六　……　158
近衛文麿　……　290
小林成光　……　1028
小林惣重郎　……　641、711
小林為之助　……　38
小林徳一郎　……　57
駒井徳三　……　251
小松聖　……　1116
小村欣一　……　56、60、61、84、90、104、130、419
小村寿太郎　……　61、79
小村捷治　……　79
小村俊三郎　……　49
小山正之助　……　509
小山松寿　……　294
小山泰文　……　949
五来欣造　……　218
近藤勇　……　71
近藤誠一郎　……　39
権藤成卿　……　50、90
権藤誠子　……　50

【さ】

西園寺公望　……　17
西園寺八郎　……　132
西郷従徳　……　187
西郷隆盛　……　18、112
斉藤昭夫　……　606
齋藤和浩　……　1125
斎藤貞市　……　599
齋藤淳二　……　910
斎藤忠義　……　910
斉藤直　……　56
斉藤仁　……　579、673、677、679、689、848、1117、1118、1119
斎藤彌　……　205
財部甚吾　……　39
財部武　……　39
財部政彦　……　113

亀井光　……　525、837
亀山潔　……　755
賀屋興宣　……　442
カルマ・ウラ　……　931
川井克己　……　164、264、265、275
川上清　……　38
川越實　……　84、113
川崎治夫　……　914
川島常吉　……　576
川嶋奈緒子　……　1113、1118
川島浪速　……　250
川添哲夫　……　578、673
河田喜代助　……　352、353
川田瑞穂　……　204、205、206
川田儀博　……　896
川野一成　……　606、1063、1118、1132
川本喜三郎　……　376、380
簡牛耕三郎　……　65
簡牛凡夫　……　5、33、34、37、39、41、42
神崎正義　……　1047
神田鐳造　……　96、98、130
菅直人　……　1117
神部満之助　……　397

【き】

木川統一郎　……　704
菊竹淳　……　38
菊池秋城　……　40
菊池秋四郎　……　40
菊池武夫　……　220
菊池定信　……　480、481、570、818、866、869
岸田秀雄　……　551、641、695
岸信介　……　396、443、611
鬼島信雄　……　65、75、76
岸本健　……　910、911、1076、1125
岸要五郎　……　65
木曽重松　……　397
喜多一行　……　1028
北神正行　……　1094
喜多敬太郎　……　38
喜多忠一　……　38
北爪子誠　……　86、87
北原龍雄　……　41、42
北原誠之　……　38
木田宏　……　616
吉瀬猛　……　39
橘高重義　……　865
橘高倫一　……　486
鬼頭武士　……　380
木下吉佐　……　38
木下新吾　……　39
木村伊勢雄　……　486
木村清四郎　……　131
木村篤太郎　……　419、420、421、426
木村正彦　……　465
清浦奎吾　……　86、96、111、130
清瀬規矩雄　……　91
吉良氏　……　169

【く】

久我文男　……　364、365
釘宮清重　……　551
久坂玄瑞　……　54
草地貞吾　……　595、599、616
草場作三郎　……　19
楠本正継　……　535、536
久世庸夫　……　39
工藤一三　……　204、205、206、240
工藤進　……　702
国枝治平　……　627
国木田独歩　……　891
久邇宮朝彦親王　……　69
久能譲　……　550
久原房之助　……　397
窪川旭丈　……　108
久保田祐司　……　1154
久保浩　……　613
熊抱大彦　……　593
熊本哲之　……　1140
倉田主税　……　396、397

奥田春喜　……　104
奥津雄　……　38
奥原敏雄　……　536
小熊熊治　……　551
尾子千代次　……　551
尾崎士郎　……　43
尾崎行雄　……　17
小沢恒一　……　414、441
押川方義　……　33
押川清　……　32、39
尾高武治　……　156、157、207、218、262、275、276、277、279、280、281、289、291
小田定文　……　39
小田常胤　……　38
越知栄　……　243、246、714、715
越智隆雄　……　1153
越智通雄　……　613、806
乙野米和　……　1131
小野十生　……　205、206、324、352、441
小野喬　……　429、430
小野孟彦　……　593
小野寅生　……　324、325、329、331、354、360
小幡虎太郎　……　39、104
小汀利得　……　407
小原直　……　294、397
小俣夏乃　……　1115、1118
尾山万馬　……　246
尾山良太　……　246

【か】

カール・シュナイダー　……　67、84
貝島栄四郎　……　57
貝島家　……　98
貝島太市　……　98、396、397
改野耕三　……　31
海原清平　……　393
解良栄弘　……　38
各務虎雄　……　205
角田栄太郎　……　39
影山藤作　……　149、205、376、380
梶川乾堂　……　58、67、172
梶拓二　……　747、755
梶山弘志　……　1153
柏井総太郎　……　56
柏木究　……　677、679
柏原二夫　……　321
梶原景昭　……　933、1030、1032
春日重樹　……　593
粕谷慶治　……　710、773、774、824、898、899、910、927、929
片岡暁夫　……　1019
片岡大蔵　……　678
片山巍　……　626、652
片山哲　……　365
葛城弘樹　……　677、679
桂太郎　……　17、26、54
加藤堅武　……　18
加藤完治　……　256
加藤司書（徳成）　……　18、19
加藤助九郎　……　38
加藤礎一　……　39
加藤高明　……　42
加藤直臣　……　76
加藤直隆　……　1028
加藤彦馬　……　38
金成英夫　……　824
金子堅太郎　……　96、130
金子大麓　……　891、892
金子藤吉　……　429、441、576、707、708
金子喜三（喜蔵）　……　455
金田実　……　710
嘉納治五郎　……　204、289
樺澤信　……　39
樺山資英　……　31
鎌田栄吉　……　6、40
鎌田重雄　……　353
カマル・ハッサン・アリ（Kamal Hassan Ali）　……　717、770
神猪一郎　……　551
神川彦松　……　453、508、509、536、554

大澤英雄　……　614、641、643、744、747、886、901、910、912、913、914、958、1075、1076、1077、1131、1132、1137、1144、1149、1152、1154
大澤正男　……　1010
大沢衛　……　264、273、275
大澤通宏　……　39
大重潤一郎　……　723
大島治喜太　……　33、38、104、204、205、206
大島高精　……　91、104
大島泰信　……　205、276
大隅菊次郎　……　465
大角桂巌　……　32
太田淳　……　817、907
太田茂実　……　393、396、397
太田清蔵　……　98、394、397
太田博　……　930
太田正充　……　244
太田米蔵　……　288、576
大塚芳忠　……　165、553、615、618、624、695、701、706、707、708、710、747
大西貫也　……　606、686、1049
大西藤米治　……　508、699、700、701、702、704
大西信隆　……　747、752、755、769、982
大沼克彦　……　1094
大沼藤一　……　328
大野操一郎　……　429、435、441、576、695、720
大庭覺太郎　……　171
大場家　……　169、170
大橋新太郎　……　96、98、123、127、128、130、135、294
大橋与一　……　486
大畑篤四郎　……　453
大場信愛　……　170
大場信續　……　120、169、170、171、173、176、177、186、187、192、261
大浜信泉　……　465
大林一之　……　91、105、106、116、248、250、251、257、263、269、270、272、273、275、276、282、283
大町桂月　……　125
大間知芳之助　……　39
大山郁夫　……　6、38、40、42、90
大山照夫　……　723
大矢息生　……　480、1107、1108
大類純　……　755、765
岡崎為保　……　149、176
岡澤文一　……　710
小笠原長泰　……　711、719、770
岡島建　……　988
岡島胖二　……　641
岡武雄　……　39
緒方四十郎　……　429
岡田隆文　……　39
緒方竹虎　……　11、26、90、114、294、296、299、340、391、392、393、394、395、396、397、398、399、404、405、409、411、416、417、418、419、420、423、429、545
緒方二三　……　114
尾形裕康　……　486、554、618、626、627
岡田雅次　……　896、1119
岡野一櫻　……　164
岡野長重　……　264、274
岡野亦一　……　149、204、205
岡野光夫　……　328、361
岡部勇雄　……　258
岡部平太　……　428、441
岡本千代人　……　421
岡本秀樹　……　717、718、771
岡本正徳　……　389、408、409
岡本祐　……　76
小川清次郎　……　125
小川忠太郎　……　76、149、176、204、205、325、328、352、353、376
小川広枝　……　575
小川福次郎　……　380、413
荻原博達　……　778

犬養毅 …… 6、17、41、48、249
井上準之助 …… 123、126、127、128、134、197、198
井上武男 …… 606
井上正 …… 274
井上正成 …… 39
禱苗代 …… 105
伊保清治 …… 606
今泉来蔵 …… 39
今井和佐久 …… 65、75、76、77、83、254
今成元昭 …… 627
今藤邦宏 …… 606
今村貞治 …… 38、47、50、112
入江八郎（小樋八郎） …… 76
入沢甲寅 …… 441
岩井良雄 …… 486
岩城義孝 …… 76
岩倉正雄 …… 281、284
岩崎家 …… 98、143、246
岩田愛之助 …… 218、219、220
岩垂憲徳 …… 213
岩永裕吉 …… 294、296
岩渕公一 …… 1063

【う】

上田萬年 …… 204、205
植田英範 …… 910
上塚周平 …… 236
上塚司 …… 5、10、31、32、37、38、39、71、76、90、96、97、104、105、113、114、115、116、119、124、126、128、129、130、131、139、148、196、234、235、236、237、238、240、241、242、243、244、245、246、247、254、263、270、273
上塚秀勝 …… 114、115
上野孫吉 …… 441、576、615、695、837
上野正澄 …… 204
植村甲午郎 …… 397
植村澄三郎 …… 135、294
植村清二 …… 486
上村春樹 …… 1153
宇尾野宗尊 …… 453
宇佐美里香 …… 1116
氏家道男 …… 673、720
牛島幸太郎 …… 39
右代啓祐 …… 954、1113、1115、1118
臼井千秋 …… 806
薄田斬雲（貞敬） …… 5、37、39、104
内田寛一 …… 353、486、509、510
内田繁隆 …… 453、508
内田周平 …… 204、205、213、265、273
内田輝光 …… 549、869
内田康哉 …… 124、125、126、128、131、250、420
内田良平 …… 112
宇野哲人 …… 486、554
馬田誠 …… 229
梅津七蔵 …… 276
占部琢磨 …… 394

【え】

江木衷 …… 8、48、49、50、125
江崎侃 …… 39
江崎澄子 …… 844
江崎義人 …… 468
衛藤征士郎 …… 1153
江藤哲蔵 …… 33、56
江頭稔 …… 822、825、982
遠藤盛彌 …… 33、39
遠藤隆吉 …… 90

【お】

大岡育造 …… 86
大川平三郎 …… 98
大木勝博 …… 677、679
大桐菊郎 …… 681
大窪梅子 …… 486
大隈重信 …… 25、33、42、43、613
大倉喜七郎 …… 144
大沢慎一 …… 31、32

133、134、139、197
有高巌　……　353、486
有田八郎　……　294、393、396、397、398、404、418、419
有馬藤太　……　71
有馬頼寧　……　90
有光次郎　……　373
有吉明　……　236
有吉林之助　……　524
粟津金六　……　236、237、241
安西博見　……　914
安藤貫一　……　613
安藤進　……　264、273
安藤忠士　……　593
安藤正純　……　421
安藤嶺丸　……　108

【い】

井伊家　……　169
飯田昭夫　……　1028
飯田延太郎　……　61、98、139
飯田恒雄　……　593
飯塚國三郎　……　204、205、206、265、273
飯塚新吾　……　321、322、329、363
井伊直孝　……　169
飯渕辰夫　……　76
庵谷磐　……　710、722
井口暁　……　1117
池田林儀　……　298
池田延行　……　952
池田勇人　……　588
池田寛　……　328
池田睦彦　……　441
池田良栄　……　149、152
池坊保子　……　933
井坂孝　……　126、294
石井慧　……　1113、1118
石井澄之助　……　169、171
石井光次郎　……　396、429、443、610、613
イシェングル・ボルジュロワ　……　1033
石川明　……　704
石川佐久太郎　……　413
石川太郎　……　79、550
石黒英一　……　29
石田啓　……　429、441、576、710、752、755
石田健　……　397
石田昭二　……　380
伊地知隆武　……　37
石橋正二郎　……　394、396、397
石橋湛山　……　43
石橋恵　……　76、176
石原莞爾　……　256
石松半二　……　176
石母田武　……　551
磯田文男　……　1140
磯辺武雄　……　901、1078
板垣退助　……　6、41
板垣仁司　……　1049
板倉和政　……　76
板倉勝憲　……　91
市川一輔　……　551
市川昭午　……　541
市原弥右衛門　……　65
出井盛之　……　509
井出定彦　……　164
出光佐三　……　394、396、397、416、423、429
伊藤金五郎　……　76
伊藤啓蔵　……　65、75、76
伊藤七郎　……　39
伊藤重治郎　……　7、8、42、43、44、48、413
伊藤伝右衛門　……　57、98
伊藤博文　……　54
伊藤文吉　……　294
伊藤六郎　……　39
稲垣敏夫　……　551、553、618
犬飼吉兵衛　……　381、419、681、687、751

【あ】

相生由太郎　……　30
相川勝六　……　30、39
愛新覚羅溥儀　……　249
會田彦一　……　204、205、206、352、353、358、376、389、409、414、429、441、576
相原永吉　……　172
青木楠男　……　468
青木敏　……　39
青木茂康　……　702
青木茂　……　981
青木俊介　……　993
青木宗也　……　825
青山樹左郎　……　356
赤神良穣　……　218
明石元二郎　……　31
赤司鷹一郎　……　131
赤松勇　……　616
赤松嘉門　……　215、1201
彬子女王　……　1152、1153
秋元恵美　……　673、674
秋元千鶴子　……　673
秋山虔　……　421
秋山晋造　……　76
秋山桃水（久我桃水）　……　246
秋山雅之助　……　91
秋山命澄　……　105
芥川龍之介　……　892
淺井正純　……　67、68、78、83、84、104、149
朝倉利夫　……　677、679、1204、1205、1206
朝倉文夫　……　613
朝倉正昭　……　614、713、747、916、1077、1091、1199
朝倉万寿美　……　896
浅沼稲次郎　……　26
淺野総一郎　……　96、98、130
朝比奈宗源　……　610
東季彦　……　618、480、554
東捨次郎　……　39
東友市　……　397
麻生家　……　57、98
麻生太賀吉　……　396、397
麻生太吉　……　52、56、57、97、98、131、132、144、1212
安高武　……　391、449、466、514、516、550、552、612、615、624、649、650、695、696、706、710、722、724、746
安達謙蔵　……　41、294
アダム・スミス（Adam Smith）　……　536
アデマール・コガ　……　772
安彦和子　……　971
阿部昭　……　1149
安部磯雄　……　6、40、41
阿部賢一　……　397
安倍晋三　……　1072、1153
阿部野利恭　……　114
阿部秀夫　……　449、486、535、615、651
阿部秀助　……　6、8、38、40、43、48、50、51、56、61、63、67、69、78、84、90、104、125、142、289
阿部充夫　……　750、752
阿部守太郎　……　17
安倍能成　……　437
安保清種　……　67、90、104
天野弘一　……　67、90、104、276
天野為之　……　6、7、40、42、43、44、67、90、104、276
天羽敬祐　……　810、946
綾井九州彦　……　468
綾田文義　……　616
鮎澤巌　……　21、340、352、353、354、355、356、359、362、364、365、368、373、376、377、380、585
荒井政雄　……　677、679
荒川亨　……　641、747
荒木万寿夫　……　454、465、611
荒牧悟　……　39
有賀長文　……　96、126、128、129、130、

凡例

・『国士舘百年史　通史編』（学校法人国士舘、2021年3月30日）の中から人名に関わる語句を収録し、該当するページ数を抽出・表記した。
・各節に付した注記、また口絵や巻末「資料」は除いた。
・配列は、五十音順とした。人名の読みを推測した部分もある。
・外国人名については、『通史編』記載のカタカナ表記に則して配列した。
・（　）内で示した別称・通称のほか、『通史編』に誤記がある場合も、該当ページを表記した。

『国士舘百年史　通史編』
索引

人名編

国士舘史資料室

令和５年事業報告

国士舘史資料室の活動

新型コロナウィルス（ＣＯＶＩＤ-19）への対応

令和２（２０２０）年から続いたＣＯＶＩＤ-19の世界的な大流行により、本学及び当室においては例年実施してきた活動が制限されてきたが、令和５年５月８日にＣＯＶＩＤ-19の感染症法上の位置づけが５類へと移行し、様々な規制が大きく緩和された。５月10日には大学各キャンパスの入構制限も全面解除となり、おおよそコロナ禍前の状況に復した。既に再開されていた対面授業の実施に加えて、本年は学園の諸行事も制限を設けることなく開催され、キャンパスは活気を取り戻した。

そのなかで令和５年の当室の活動は、ほぼ例年通りの状況に復しつつあり、特に利用・公開の活動で好転をみた。ＣＯＶＩＤ-19対応のため、令和２年３月３日より臨時閉室、令和４年４月１日から学内関係者限定利用となっていた資料展示室と閲覧室は、令和５年６月１日から学外者の利用、土曜日の開室を再開した。また、キャンパスへの入構制限解除を受け、新たに「大講堂見学ツアー」と題して学外者を対象とした国士舘大講堂の周知活動を実施した。国士舘大講堂を会場に実施した創立記念展示は、学園祭期間中に東京都主催「東京文化財ウィーク」参加による特別公開も兼ねたことから、一般来場者を含む多くの方々を迎えることができた。本年、おおむねＣＯＶＩＤ-19流行以前の状況に復したといえる。

１　調査・収集

(1)　主たる資料調査

令和５年１月から12月までに実施した資料調査並びに

収集の主な活動は以下の通りである。

学内調査

(1)文学部文学科（日本文学・文化）鷲野正明教授研究室調査（於世田谷キャンパス10号館3階）

日　時：令和5年2月6日・2月17日・2月25日・2月27日

調査者：熊本好宏・村瀬貴彦

(2)文学部文学科（日本文学・文化）勝田政治教授研究室調査（於世田谷キャンパス34号館9階）

日　時：令和5年3月4日

調査者：熊本好宏

(3)教務課保管資料調査

日　時：令和5年6月22日・9月29日

調査者：熊本好宏・村瀬貴彦・清水邦俊・堀田理沙

(4)経理課保管資料調査

日　時：令和5年7月5日

調査者：熊本好宏・村瀬貴彦・清水邦俊

(5)学内発行物印刷データ収集調査

学内部課室で定期に発行される発行物のうち発行物原本とあわせて印刷製本後の印刷データ（PDF）を収集した（随時実施・部課室及び印刷製本業者）。

(6)イラク古代文化研究所資料調査

昨年に引き続き、資料の整理・電子化等について、デジタルアーカイブセンターの業務支援を行った。

調査者：熊本好宏

学外調査

(1)上塚司関連資料調査

日　時：令和5年1月10日、1月11日、1月27日、1月31日、2月2日、2月6日、2月8日、2月9日、3月17日、3月27日、3月29日、4月6日、4月10日、4月17日、5月11日、5月22日、6月8日、6月21日、6月22日、7月7日、7月21日、8月23日、8月29日、9月5日、9月16日、9月26日、9月28日、10月6日、10月17日、10月27日、11月6日、11月13日、11月22日、12月1日、12月19日

調査者：熊本好宏

（２）山田帽子店帽章・徽章資料調査

日　時：令和５年９月21日、10月10日

調査者：熊本好宏・清水邦俊

⑵　オーラル調査

（１）アンケート調査

本年は関係者へのアンケート調査を実施しなかった。

（２）オーラル・ヒストリー調査

本年は関係者へのオーラル・ヒストリー調査を実施しなかった。

⑶　主な寄贈資料

・学生時代の写真、ＬＰブック『国士』寄贈

寄贈者：大神硬司氏（昭和48年３月文学部卒）

・襟章、徽章、「国士舘学生心得」等寄贈

寄贈者：善林義一氏（昭和48年３月文学部卒）

・個人アルバム、舘旗寄贈

寄贈者：木村大輔氏（平成15年３月政経学部二部卒）

・「馬上創立者と大講堂」木版画（平成２年、岡本よし美画、柴田徳次郎創立者生誕１００年記念）寄贈

寄贈者：相楽秀和氏（昭和58年３月法学部卒）

・『講演（頭山満翁を語る）』１４１号（昭和44年５月15日、尾崎行雄記念財団）等寄贈

寄贈者：寺島正芳氏（映画史研究家）

・教育勅語、允可状、卒業証書、辞令等寄贈

寄贈者：福原一成氏（昭和53年３月法学部卒・元学校法人国士舘職員）

・佐々国雄配当証書一式（昭和３年頃）、兜坂香月宛春名好重書簡（平成元年４月19日）等寄贈

寄贈者：大庭裕介氏（平成18年３月文学部卒）

・『第10回専門学校卒業アルバム』、個人アルバム等寄贈

寄贈者：安田秀樹氏

・『第５回中学校卒業アルバム』等寄贈

寄贈者：大場毅氏

・高校野球部春甲子園出場関連資料等寄贈

寄贈者：柴田則夫氏（昭和52年３月工学部卒・学校法人国士舘元職員）

・頭山満夫妻写真、緒方竹虎書簡等寄贈

寄贈者：石部雄紀氏（平成26年3月21世紀アジア学部卒）

・授業ノート、専門学校入学願書様式等寄贈

寄贈者：山口国俊氏

・大正後期国士舘蔵書等寄贈

寄贈者：上塚芳郎氏

・国士舘業務記録資料寄贈

寄贈者：木下幸子氏（昭和48年3月文学部卒・学校法人国士舘元職員）

・学帽、帽章、徽章類等寄贈

寄贈者：山田輝夫氏（山田帽子店・昼間良次氏仲介）

2　整理・保存

(1)　資料目録作成状況

本年（令和5年12月31日現在）の国士舘史資料室の所蔵資料、調査収集資料、参考図書等の目録（データベース）作成状況は別表の通りである。

収蔵資料及び目録化の進捗状況

名称	内容	令和３年度 目録化済	令和４年度 目録化済	令和５年度 目録化済
法人記録史料	法人（教学を含む）組織が作成・発行したか、または外部機関より受領した文書	17,977	19,141	20,183
発行物	学内で刊行される出版物	9,892	10,406	11,294
写真・その他の映像・音声資料	国士舘に関わる写真その他の映像・音声資料	12,614	12,666	12,789
物品資料	国士舘に関わる物品資料	1,109	1,451	1,569
調査収集資料	学内外の関係資料所蔵機関への調査収集資料	6,302	6,439	7,159
参考図書	主に各関係機関が発行している出版物	2,139	2,217	2,321
合計		50,033	52,320	55,315

（令和５年 12 月 31 日現在）

(2) 資料電子化・保存処置

本年は、主に以下の資料について電子化及び修復・保存処置を専門業者に委託した。

・財務部資料経理元帳（平成中期）電子化
・教務部資料政経学部（昭和40年代）、文学部（昭和60年代～平成初期）成績原簿電子化
・上塚司関連資料電子化
・卒業アルバム電子化及び写真切出
・スポーツ国士（平成中期～末期）電子化

3　利用・公開

(1) 収蔵資料の公開（収蔵資料検索システム運用状況）

国士舘史資料室は、収蔵資料利用者へのサービス強化のため、平成23（２０１１）年４月に閲覧室を整備し、同時に資料室ホームページ上で収蔵資料検索システムのＷＥＢ公開を開始している。収蔵資料検索システムを利用後に、資料閲覧のために来室する利用者も増加傾向にあったが、令和２年４月以降、ＣＯＶＩＤ-19対策の観点から資料の閲覧サービスを停止していた。しかし、大学各キャンパスの入構制限全面解除に伴い、令和５年６月から、学外者の資料展示室と閲覧室の利用を再開した。

平成28年10月３日に学内教職員向けに公開した「国士舘アーカイブズ」は、令和５年12月現在、収蔵資料検索システムには２５９９２件、基礎年表検索システムには３５０８件、基礎データ集（略年表など）の内容であり、学内限定で利用できる。特にＣＯＶＩＤ-19の影響下では、大学の遠隔授業への支援をはじめ、学内教職員からのレファレンスへの対応に有効に活用された。

(2) ホームページ（令和５年更新）

［お知らせ］

・梅ヶ丘校舎で「国士舘の歴史」展を開催（令和５年３月７日）
・国士舘大講堂「春の開放週間」が行われました（４月24日）
・国士舘史資料室の利用について（５月10日）
・国士舘大講堂（国登録有形文化財）見学ツアーのご案内（参加者募集）（６月５日）
・梅ヶ丘校舎で「世田谷の今昔―国士舘ゆかりの地―」

展を開催（6月9日）
・梅ヶ丘校舎で「国士舘と学徒出陣」展を開催（8月4日）
・夏季の一時閉室について（8月5日）
・博物館実習を実施しました（8月5日）
・梅ヶ丘校舎で「学園祭の歴史」展を開催（9月26日）
・創立記念展「国士舘中学校・高等学校創設100年記念　応変×伝統」を開催（10月10日）
・東京文化財ウイーク2023　国士舘大講堂を特別公開します（10月10日）
・国士舘大講堂（国登録有形文化財）見学ツアーのご案内（参加者募集）（10月16日）
・国士舘大講堂見学ツアーを開催　創建104年の文化財を一般公開（10月23日）
・国士舘大講堂（国登録有形文化財）見学ツアーのご案内（参加者募集）（11月6日）
・創立記念「国士舘中学校・高等学校創設100年記念　応変×伝統」展を開催しました（11月11日）
・国士舘大講堂（国登録有形文化財）見学ツアー2023は全日程を終了しました（11月24日）
・梅ヶ丘校舎で「国士舘大講堂」展を開催（11月29日）

［刊行物］
・『国士舘史研究年報　楓原』第14号の全頁（PDF）掲載（4月）

アドレス
https://www.kokushikan.ac.jp/research/archive/index.html

(3) 教育普及活動

(1) 常設展示

国士舘史資料室では、柴田会館4階に展示室を設け、国士舘の歩みを示す関係資料を一般公開している。国士舘の創立者柴田徳次郎ゆかりの資料や、創立以来の支援者、各時代の学生生活に関する貴重な資料などを展示している。

なお、COVID-19対策のため、令和2年3月から令和4年3月末まで臨時閉室、同年4月からは学内者限定利用としていたが、令和5年6月1日から学外者の利用、土曜日の開室を再開した。

開室日時　月曜～土曜10：00～16：00
（日曜祝祭日、学園の定める休日等を除く）

※観覧無料

令和５年１月～12月の観覧者数は、以下の通りである。

・学内者数　　３７１名
　学生・生徒　３３１名
　教職員　　40名
・学外者数　３０９名
　卒業生　　33名
　一般　　２７６名
・総観覧者数　６８０名

（２）梅ヶ丘校舎展示コーナー企画展（出張展示）

世田谷キャンパス34号館（梅ヶ丘校舎）１階の展示コーナーにおいて、次の企画展を開催した。

・令和５年３月～５月「国士舘の歴史」展
・令和５年６月～７月「世田谷の今昔―国士舘ゆかりの地―」展
・令和５年８月～９月「国士舘と学徒出陣」展（博物館実習成果展示）
・令和５年10月～11月「学園祭の歴史」展
・令和５年12月～令和６年２月「国士舘大講堂」展

（３）イベント企画展（出張展示）

令和５年は、５月にＣＯＶＩＤ-19の感染症法上の位置づけが５類へと移行したことに伴い、大学のオープンキャンパスや本学主催高等学校教員対象入試相談会は昨年同様の事前申込制となったものの、大学の父母懇談会は通例通りの開催となった。

それぞれのイベント開催日には、国士舘大講堂において写真パネルによる企画展示「国士舘の歴史」を開催した。国士舘の歴史を写真で紹介すると共に、「国士舘１００年の軌跡」（ＤＶＤ）等を上映した。

それぞれの実施日及び入場者数は、次の通りである。

・３月26日（日）　オープンキャンパス　１６１名
・５月12日（金）　本学主催高等学校教員対象入試相談会　16名
・５月21日（日）　父母懇談会　１８１名
・６月11日（日）　オープンキャンパス　４６７名
・７月16日（日）　オープンキャンパス　１０３名
・７月30日（日）　オープンキャンパス　１３３名
・８月27日（日）　オープンキャンパス　３７７名
・９月10日（日）　オープンキャンパス　１７８名

（4）創立記念展「国士舘中学校・高等学校創設100年記念　応変×伝統」（出張展示）

国士舘の創立106年を記念して、国士舘大講堂を会場に、本学の歴史をたどる創立記念展示を行った。また、本年は、中学校・高等学校創設100年の節目の年にあたることから、「応変×伝統」をテーマにその歴史を振り返る企画展を実施した。

展示期間は、楓門祭（大学学園祭）と秋楓祭（中・高文化祭）の実施にあわせて、10月26日（木）～11月4日（土）とした。また、11月2日（木）・3日（金）は「東京文化財ウィーク」に参加して、大講堂の一般公開事業とあわせた位置づけで、この企画展を実施した。あわせて11月3日には、ホームカミングディも実施され、卒業生をはじめ多くの来場者が訪れた。昨年から導入した大講堂グッズガチャ（カプセルトイ）も設置し、期間中235件の参加を得るなど盛況であった。

入場者は、全期間で2050名、うち東京文化財ウィーク・楓門祭・秋楓祭の開催期間（11月2日・3日）は1865名であった。

創立記念展

創立記念展ポスター

（5）文化財「国士舘大講堂」愛護啓発（定期開放等）

本年も学内外に国登録有形文化財「国士舘大講堂」の意義や特徴を周知し、あわせて文化財保全への啓発等を行った。キャンパスへの入構制限解除を受け、学外者を対象とした大講堂の開放も新たに実施した。

・国士舘大講堂「開放週間」の実施

学生・生徒が大講堂内に入って建造物に親しみ、その意義や特徴の理解を高める機会を設けるため、昨年に引き続き大講堂「開放週間」を実施した。各月の１週間（月曜～金曜日・各日２回実施）大講堂を定時に開放し、参加者に対して学生キャスト（学生ガイド）が15分程度の解説を行った。学生キャストの有志学生は、必要となる知識をオンデマンド等で修得し、模擬解説を経て大講堂のガイドに臨んだ。なお大講堂キャスト（12月末現で９名）は、オープンキャンパス等の出張展示でも、大講堂での解説・対応を行った。開放週間の実施日及び入場者数は、次の通りである。

４月17日～21日　61名
５月15日～19日　50名
６月12日～16日　73名
10月16日～20日　24名
11月13日～17日　46名

・国士舘大講堂「見学ツアー」の実施

本年５月10日の入構制限解除を受け、大講堂「見学ツアー」と称して定期開放を一般に拡大した。午前・午後の２部制とし、各回１時間程度、定員

大講堂見学ツアー

10名で実施した。学生キャストが大講堂の特徴を案内し、多くの人々が文化財としての大講堂に親しみ、その存在価値を理解する機会を創出した。併せて柴田会舘4階展示室も案内し、国士舘の歴史を紹介した。見学ツアーの実施日及び入場者数は、次の通りである。

6月17日　19名
10月21日　20名
11月18日（午後の部のみ実施）　3名

・国士舘大講堂グッズ（含ガチャ）

国登録有形文化財としての建造物保全への啓発を図る一環として、大講堂グッズ制作を学生キャストの企画のもとで実施した。本年は大講堂を象徴する意匠（マーク）をあしらった付箋を作成して、学内外に配付するなどした。また、大講堂ガチャ（カプセルトイ）も年間を通して大講堂に設置し、メモ帳・一筆箋・付箋の大講堂グッズをはじめ、先の記念事業で制作された「コクシバ」グッズも交換品とした。なお全投入金は、創立110周年記念事業募金（「大講堂の保存および防災対策」を含）として取り扱った。

（6）レファレンス（含資料閲覧）

令和5年1～12月のレファレンスは、学内・学外合わせて99件であった。また、本年6月に学外者の利用を再開した資料閲覧は延べ7件の対応であった。

（7）講義等支援

平成21年4月の国士舘史資料室発足後、資料室を

グッズ制作企画会議

利用する講義支援等の依頼は、毎年増加傾向にある。特に、大学各学部で開講する初年次教育関連ゼミの支援依頼や、博物館学関連の講義支援については、毎年恒例となっている。

昨年度に引き続き、政経学部開講「フレッシュマン・ゼミナール」、経営学部開講「フレッシュマンゼミナール」、文学部教育学科開講「教育学の基礎Ａ」に設けられた自校史教育のコマについて講義支援を実施した。今年度は、全学部の授業が対面形式での実施となり、一部の講義では追加での支援対応を行った。また講義支援に留まらず、新採用教職員研修への支援なども随時実施した。

主な講義等の支援と担当者は、次の通りである。

・新採用教職員研修支援：４月１日職員10名（於大講堂等）、４月８日教員23名（於大講堂）（熊本好宏）

・政経学部「フレッシュマン・ゼミナール」講義支援（講義・大講堂見学、１年生）：４月26日川島耕司ゼミ・柴田怜ゼミ・佐藤恵ゼミ合同（２限１年生83名）（熊本好宏・村瀬貴彦）、４月26日波多野圭吾ゼミ・関口博久ゼミ・八木堅二ゼミ合同（５限１年生69名）（熊本好宏・村瀬貴彦）、４月27日齊藤良子ゼミ・石山健一ゼミ・許海珠ゼミ合同（２限１年生84名）（清水邦俊・堀田理沙）、４月27日柴田徳光ゼミ・加藤将貴ゼミ・本間良則ゼミ合同（５限１年生84名）（清水邦俊・堀田理沙）、４月28日川上有光ゼミ・貫名貴洋ゼミ・永冨隆司ゼミ合同（２限１年生77名）（清水邦俊・堀田理沙）、４月28日石見豊ゼミ・足立公平ゼミ・鈴木智行ゼミ合同（５限１年生83名）（清水邦俊・堀田理沙）、５月１日古坂正人ゼミ・赤石秀之ゼミ・助川成也ゼミ合同（２限１年生85名）（清水邦俊・堀田理沙）、５月１日石見豊ゼミ・北村仁代ゼミ・三輪晋也ゼミ合同（５限１年生62名）（清水邦俊・堀田理沙）

・体育学部体育学科自校史教育支援：４月５日新入生オリエンテーション（於多摩キャンパス、１年生２６０名）（熊本好宏）

・文学部教育学科教育学コース江川陽介教授・郡司菜津美准教授・本間貴子准教授「教育学の基礎Ａ」講義支援：５月11日（大講堂見学、１限１年生80

名)、5月18日(資料展示室見学、1限1年生80名)、5月25日（講義、1限1年生80名）（熊本好宏）

・文学部教育学科初等教育コース河野寛教授・青木聡子講師・室町さやか准教授「教育学の基礎A」講義支援：6月22日（講義・大講堂見学、1限1年生45名）（熊本好宏）

・経営学部「フレッシュマンゼミナール」講義支援（講義・大講堂見学、1年生）：4月27日顔菊馨ゼミ・田淵泰男ゼミ・山下修平ゼミ・粟野直之ゼミ合同（1限1年生170名)（熊本好宏・村瀬貴彦)、4月28日三谷華代ゼミ・伊藤直樹ゼミ・水師裕ゼミ合同（1限1年生126名）（熊本好宏・村瀬貴彦）

・4月11日文学部史学地理学科考古・日本史学コース1年生学外研修「吉田松陰・国士舘と彦根藩主井伊家ゆかりの地をめぐる散策」大講堂及び展示室見学ほか対応（1年生110名）（熊本好宏）

・5月1日経営学部山下修平准教授「専門ゼミナールI」資料展示室見学対応（4限3年生15名）（熊本好宏）

(8)　発行物

・令和5年3月10日　『国士舘史研究年報　楓原』第14号発行

・令和5年3月30日　国士舘大講堂オリジナル付箋制作

(9)　講演会

令和3年から百年史編纂事業後の成果周知の一環として開催する学園史講演会は、昨年（第2回）に若手・中堅職員対象の「学園史研修」も兼ねた実施となった。この経緯から本年の開催については職員研修委員会（SD・総務部人事課）に企画を委ねることとなったが、担当課の諸般の事情によって実施されなかった。

(10)　博物館実習の受け入れ

博物館学芸員資格課程の資格取得要件である博物館実習（館園実習）を実施し、実習生の受け入れを行った。博物館実習は、資料室の業務を通じて博物館の一連の諸業務に対する理解を深めるとともに、主に公開業務である企画展示の立案から展示作業までの業務を実践する内容とした。その成果は、梅ヶ

博物館実習

丘校舎の展示コーナーにおける企画展示として一般公開を実施した。

・7月28日（金）～8月4日（金）　博物館実習文学部4年生1名、21世紀アジア学部3年生1名

(11)　中学生の職場体験学習の受け入れ

世田谷区内の中学校から職場体験学習の依頼を受けて、生徒の受け入れを行った。資料室の職場や社会マナーについて学び、このうち「展示」を主な課題として取り組んでもらった。

・9月13日（水）～15日（金）　世田谷区立船橋希望中学校2年生3名

・10月10日（火）～12日（木）　世田谷区立梅丘中学校2年生3名

(12)　第１３１回全国大学史資料協議会東日本部会研究会の開催

全国大学史資料協議会東日本部会より、本学での研究会開催の依頼を受けて、次の内容で実施した。

開　催　日：令和5年1月26日（木）

特別講演：阿部武司（政経学部教授）「企業アーカイブズと大学アーカイブズ　―企業史料協議会での経験より」

講　　演：熊本好宏「百年史編纂事業と国士舘史資料室の取り組み」

施設見学：国士舘大講堂（学生キャストによる解説）

参　加　者：対面24名・オンライン27名

4　室の構成

(1) 職員（令和5年度）

室　　長　長谷川　均（理事・副学長・文学部教授）
事　務　長　熊本　好宏
担当事務長　村瀬　貴彦
職　　員　齊藤　英樹（令和5年4月1日着任）
　　鈴木　正博（令和5年10月1日着任）
準　職　員　清水　邦俊
　　畠山　典子（令和5年3月31日退職）
　　堀田　理沙（令和5年4月1日着任）
アルバイト学生
　　角田優衣　丸山藍花　鈴木怜亜
　　馬場英梨香　寺垣卓敏　諸川涼
　　山口杏里　山嵜大輔
（限大講堂キャスト）
　　丹澤麻樹　髙木優　福崎隆成
　　山本哲史

(2) 施設の概要

所在地　〒154-0023
　　東京都世田谷区若林4-31-10
名　称　柴田会舘
構　造　鉄骨鉄筋コンクリート造、地下2階、地上4階
資料室施設面積
　2階：舘史事務室15・3㎡、舘史研究室38・4㎡、第1史料収蔵庫63・8㎡、第2史料収蔵庫21・5㎡（平成23年3月設置）、第3史料収蔵庫16・2㎡（平成28年8月設置）、第4史料収蔵庫21・1㎡（平成28年8月設置）
　4階：室長室13・7㎡、閲覧室13・7㎡、展示室119㎡
34号館（梅ヶ丘校舎B棟1階）
　　展示コーナー：13・1㎡

5　活動日誌

（令和5年1月～12月）

【1月】

1日　『防災総研ニュースレター』第12号「『国士舘アー

カイブズ』にみる『防災』第３回　戦災危機と国士舘大講堂（熊本好宏）」掲載

19日　政経学部経済学科佐藤恵ゼミ「フレッシュマン・ゼミナール」講義支援・大講堂・資料展示室見学対応（２限１年生28名）（村瀬貴彦）

25日　『国士舘大学新聞』第５３１号「国士舘史資料室だより48　50年前の卒業記念品（熊本好宏）」掲載

26日　第１３１回全国大学史資料協議会東日本部会研究会を開催（於メイプルセンチュリーホール５階第１会議室、大講堂ほか、参加者　対面24名・オンライン27名）

【２月】

24日　課外活動クラブリーダーズキャンプ研修支援（次年度課外活動クラブ主将予定者等53名）（熊本好宏）

【３月】

7日　留学生コンソーシアム大講堂見学対応（40名）（熊本好宏）

7日～5月31日　企画展「国士舘の歴史」展開催（於34号館Ｂ棟１階展示コーナー）

10日　『国士舘史研究年報　楓原』第14号発行

26日　オープンキャンパスにて「国士舘の歴史」展開催（於大講堂、入場者１６１名）

31日　準職員畠山典子退職

【４月】

1日　職員齊藤英樹着任、準職員堀田理沙着任

新採用職員研修大講堂見学対応（10名）（熊本好宏）

『防災総研ニュースレター』第13号「『国士舘アーカイブズ』にみる『防災』第４回　資料保存と「レスキュー」活動（熊本好宏）」掲載

5日　体育学部体育学科新入生オリエンテーション自校史教育支援（於多摩キャンパス、１年生２６０名）（熊本好宏）

8日　新採用教員研修大講堂見学対応（23名）（熊本好宏）

11日　文学部史学地理学科考古・日本史学コース１年生学外研修「吉田松陰・国士舘と彦根藩主井伊家ゆかりの地をめぐる散策」大講堂及び展示室

見学ほか対応（１１０名）（熊本好宏）

17日　大講堂（国登録有形文化財）グッズオリジナル付箋学内配付

17日～21日　大講堂「春の開放週間」（学生ガイド、入場者61名）

25日　『国士舘大学新聞』第５３２号「国士舘史資料室だより49　80年前の卒業仮証書（村瀬貴彦）」掲載

26日　政経学部川島耕司ゼミ・柴田怜ゼミ・佐藤恵ゼミ合同「フレッシュマン・ゼミナール」講義支援（講義・大講堂見学）（２限１年生83名）（熊本好宏・村瀬貴彦）

政経学部波多野圭吾ゼミ・関口博久ゼミ・八木堅二ゼミ合同「フレッシュマン・ゼミナール」講義支援（講義・大講堂見学）（５限１年生69名）（熊本好宏・村瀬貴彦）

27日　経営学部顔菊馨ゼミ・田淵泰男ゼミ・山下修平ゼミ・粟野直之ゼミ合同「フレッシュマンゼミナール」講義支援（講義・大講堂見学）（１限１年生１７０名）（熊本好宏・村瀬貴彦）

政経学部齊藤良子ゼミ・石山健一ゼミ・許海珠ゼミ合同「フレッシュマン・ゼミナール」講義支援（講義・大講堂見学）（２限１年生84名）（清水邦俊・堀田理沙）

政経学部柴田徳光ゼミ・加藤将貴ゼミ・本間良則ゼミ合同「フレッシュマン・ゼミナール」講義支援（講義・大講堂見学）（５限１年生84名）（清水邦俊・堀田理沙）

28日　経営学部三谷華代ゼミ・伊藤直樹ゼミ・水師裕ゼミ合同「フレッシュマンゼミナール」講義支援（講義・大講堂見学）（１限１年生１２６名）（熊本好宏・村瀬貴彦）

政経学部川上有光ゼミ・貫名貴洋ゼミ・永冨隆司ゼミ合同「フレッシュマン・ゼミナール」講義支援（講義・大講堂見学）（２限１年生77名）（清水邦俊・堀田理沙）

政経学部石見豊ゼミ・足立公平ゼミ・鈴木智行ゼミ合同「フレッシュマン・ゼミナール」講義支援（講義・大講堂見学）（５限１年生83名）（清水邦俊・堀田理沙）

【5月】

1日　政経学部古坂正人ゼミ・赤石秀之ゼミ・助川成也ゼミ合同「フレッシュマン・ゼミナール」講義支援（講義・大講堂見学）（2限1年生85名）（清水邦俊・堀田理沙）

経営学部山下修平ゼミ「専門ゼミナールⅠ」資料展示室見学対応（4限3年生15名）

政経学部石見豊ゼミ・北村仁代ゼミ・三輪晋也ゼミ合同「フレッシュマン・ゼミナール」講義支援（講義・大講堂見学）（5限1年生62名）（清水邦俊・堀田理沙）

10日　大学各キャンパス入構制限（COVID-19対応）全面解除、HP告知

11日　文学部教育学科教育学コース江川陽介教授・郡司菜津美准教授・本間貴子准教授「教育学の基礎A」大講堂見学対応（1限1年生80名）（熊本好宏）

12日　本学主催高等学校教員対象入試相談会にて「国士舘の歴史」展開催（於大講堂、入場者16名）

15日～19日　大講堂「新緑の開放週間」（学生ガイド、入場者50名）

18日　文学部教育学科教育学コース江川陽介教授・郡司菜津美准教授・本間貴子准教授「教育学の基礎A」資料展示室見学対応（1限1年生80名）（熊本好宏）

21日　父母懇談会にて「国士舘の歴史」展開催（於大講堂、入場者181名）

25日　文学部教育学科教育学コース江川陽介教授・郡司菜津美准教授・本間貴子准教授「教育学の基礎A」講義支援（1限1年生80名）（熊本好宏）

【6月】

1日　資料展示室・閲覧室の学外者の利用制限を解除

5日～7月31日　企画展「世田谷の今昔―国士舘ゆかりの地―」展開催（於34号館B棟1階展示コーナー）

6日　カナダ国マキューアン大学2名案内対応（於大講堂、国際交流センター支援）（熊本好宏）

中高大接続行事「国士舘の歴史・伝統を知る」講話・見学対応（於資料展示室、大講堂ほか・含学生ガイド対応、国士舘中学校1年生55名）

（熊本好宏・堀田理沙）

11日　オープンキャンパスにて「国士舘の歴史」展開催（於大講堂、入場者467名）

12日　令和6年度開講予定・全学共通教育科目「国士舘を知る（建学の精神と教育理念）」コンテンツ作成の依頼書受理（4回分予定）

12日～16日　大講堂「初夏の開放週間」（学生ガイド、入場者73名）

17日　大講堂「見学ツアー」（学生ガイド解説2回、参加者計19名）

22日　文学部教育学科初等教育コース河野寛教授・青木聡子講師・室町さやか准教授「教育学の基礎A」講義支援・大講堂見学対応（1限1年生45名）（熊本好宏）

22日　教務課保管資料（成績原簿等）調査・整理作業（熊本好宏・清水邦俊・堀田理沙）

【7月】

5日　経理課保管資料（経理元帳等）調査・整理作業（熊本好宏・清水邦俊）

16日　オープンキャンパスにて「国士舘の歴史」展開催（於大講堂、入場者103名）

25日　『国士舘大学新聞』第533号「国士舘史資料室だより50　理工学部創設60年（熊本好宏）」掲載

29日～8月4日　博物館実習実施（文学部4年生1名、21世紀アジア学部3年生1名受入）

30日　オープンキャンパスにて「国士舘の歴史」展開催（於大講堂、入場者133名）

【8月】

4日～9月22日　企画展「学徒出陣と国士舘」展開催（於34号館B棟1階展示コーナー、博物館実習企画）

27日　オープンキャンパスにて「国士舘の歴史」展開催（於大講堂、入場者377名）

【9月】

10日　オープンキャンパスにて「国士舘の歴史」展開催（於大講堂、入場者178名）

13日～15日　世田谷区立船橋希望中学校職場体験（2年生生徒3名）

21日　山田帽子店帽章・徽章資料調査（熊本好宏・清

水邦俊）

25日～11月27日　企画展「学園祭の歴史」展開催（於34号館Ｂ棟１階展示コーナー）

29日　教務課保管資料（成績原簿等）調査・整理作業（熊本好宏・村瀬貴彦・清水邦俊）

【10月】

1日　職員鈴木正博着任

4日～6日　フォローアップ監査・書類確認

10日　山田帽子店帽章・徽章資料調査（熊本好宏・清水邦俊）

10日～12日　世田谷区立梅丘中学校職場体験（2年生生徒3名）

11日　フォローアップ監査・確認会

16日～20日　大講堂「秋の開放週間」（学生ガイド、入場者24名）

21日　大講堂「見学ツアー」（学生ガイド解説2回、参加者計20名）

25日　『国士舘大学新聞』第534号「国士舘史資料室だより51　国士舘中学校・高等学校創設100年（村瀬貴彦）」掲載

26日～11月4日　創立106周年記念・中高創設100年記念「国士舘中学校・高等学校創設100年記念　応変×伝統」展開催（於大講堂、入場者2050名）

27日　「世田谷図書館まちの歴史講座」大講堂・資料展示室見学対応（熊本好宏・村瀬貴彦）

28日　東京シティガイドクラブ大講堂・資料展示室見学対応（鈴木正博）

【11月】

2日～3日　東京文化財ウィーク特別公開事業参加（国士舘大講堂の公開）

9日　柴田会舘自衛消防隊訓練

13日～17日　大講堂「紅葉の開放週間」（学生ガイド、入場者46名）

18日　大講堂「見学ツアー」（午後の部のみ実施・学生ガイド解説1回、参加者計3名）

29日～令和6年3月4日　企画展「国士舘大講堂」展開催（於34号館Ｂ棟１階展示コーナー）

【12月】

8日　柴田会舘前掲示板改修工事

国士舘創立 110 周年記念事業

寄付金募集

■募金の趣意

学校法人国士舘は、来たる 2027 年の創立 110 周年に向け、学園の総合整備、奨学基金の 充実、スポーツ・文化活動の振興及び国士舘大講堂の保存環境整備に取り組んでいます。皆様方のご支援ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

■事業の概要

期　　別	主な事業項目
通　期（2020/4～2028/3）	学生・生徒への修学支援事業 スポーツ・文化活動の振興 国士舘大講堂（国登録有形文化財）の保存および防災対策 高等学校・中学校の教育環境の充実 3 キャンパスの教室等の重点整備 防災教育の推進強化 世田谷キャンパスの再整備の検討
第 1 期（2020/4～2022/3）	町田キャンパスの整備 国士舘楓の杜キャンパスの運用開始 多摩キャンパスの拡充整備 近隣の救急病院等との連携構築
第 2 期（2022/4～2025/3）	多摩南野キャンパスの整備 国士舘楓の杜キャンパスへのスクールバス運行
第 3 期（2025/4～2028/3）	4 キャンパスの施設環境の充実

※計画の具体化により若干の変更を伴います。また、寄付金は、総事業費の一部に充当させていただきます。

■申込方法

専用の払込用紙のほか、インターネット（オンライン決済）またはコンビニエンスストア、クレジットカードを利用した決済もできます。寄付金は税制上の優遇措置を受けられます。詳細は募金事務室までお問い合わせくださるか、下の QR コードをご参照ください。

募金についてのお問い合わせ

学校法人国士舘　募金事務室

電話 03-5451-8207

〒154-8515　東京都世田谷区世田谷 4-28-1

（世田谷キャンパス梅ヶ丘校舎 1 階）

この QRコードから、国士舘大学 HP 創立110周年記念事業募金 募集要項のページにアクセスできます

国士舘史資料室規程

（趣旨）

第1条　この規程は、国士舘史資料室（以下「資料室」という。）の組織及び運営について定める。

（目的）

第2条　資料室は、国士舘の歴史に関わる文献、文書及び物品等（以下「資料」という。）を収集・整理・保管し、将来に継承して、建学の精神の高揚と学園及びその教育・研究の進展等に資することを目的とする。

（資料室長）

第3条　資料室長は、理事会の議を経て理事長が委嘱する。

2　資料室長の任期は2年とする。ただし、再任を妨げない。

（職員）

第4条　資料室に、必要な職員を置く。

（学術調査員）

第5条　資料室に、学術調査員を置くことができる。

2　学術調査員は、本学園の教職員のうちから資料室長が推薦し、理事長が委嘱する。

3　学術調査員の任期は2年とする。ただし、再任を妨げない。

4　学術調査員は、資料室長の指示を受け、次の調査研究等に従事する。

(1)　本学の理念及び本学史に関すること

(2)　資料の収集・整理・保管等に関すること

(3)　年史・資料集等に関すること

(4)　その他資料室に関わる学術的事項

（専門員）

第6条　資料室に、専門員を置くことができる。

2　専門員は、資料室長の指示を受け、次の業務に従事する。

(1)　資料の収集・整理・保管・展示及び情報収集

(2)　年史・資料集等の企画及び編纂

(3)　その他資料室に関わる専門的事項

3　専門員の任用期間は、1年とする。ただし、再任を妨げない。

（収集資料）

第7条　資料室は、次の資料を収集する。

(1)　国士舘の建学の精神に関する資料

(2)　国士舘の発展の経緯に関する資料

(3)　国士舘が設置する諸学校に関する資料

(4)　国士舘の創立者及び先人に関する資料

(5)　その他国士舘に関する資料

（所蔵資料の開放）

第8条　資料室は、学園内外の希望者に所蔵資料を開放し、教育研究に資するとともに学園の歴史の紹介に努めるものとする。

2　資料室の開室及び所蔵資料の閲覧等の細部は、別に定める。

（資料の貸出し）

第9条　資料室の所蔵資料は、貸出しをしないものとする。ただし、教育研究及び学園の広報に役立つ等、特に必要性が認められた場合は、所定の手続を経て貸出しをすることができる。

（資料の管理）

第10条　資料室の資料及び物品の物品管理責任者は、資料室長とする。

附　則

この規程は、平成21年4月1日から施行する。

編集後記

『国士舘史研究年報　楓原』は、第15号の刊行を迎えました。本号へご寄稿いただきました、高岡萌氏、大神硬司氏、館正史氏をはじめ、皆様のご尽力に厚く御礼申し上げます。

本号では『国士舘百年史　通史編』索引の人名編を掲載しました。編集にあたり、これまでの歴史に関わってきた先人たちの名前を目にしましたが、百年を超える本学の歴史においては、索引には掲載のない多くの学生・生徒とそのご家族、地域の方々、そして本学関係者の存在があることも忘れてはなりません。多くの人々の手によって、今日の国士舘があるのだと改めて感じました。

本年五月、新型コロナウイルス感染症に関する制限もようやく解除となりました。学内・学外の方と直接対面する機会も増え、本学の歴史や文化財である大講堂の魅力などをより一層伝えられるよう、取り組んでまいります。また、資料の調査・収集にも注力していく所存です。引き続き、ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

（村瀬貴彦）

執筆者紹介（順不同）

高岡　萌　福井県こども歴史文化館学芸員
大神　硬司　国士舘大学文学部卒業生
館　正史　国士舘大学文学部卒業生

国士舘史研究年報　楓原　二〇二三　第15号

令和6年3月10日発行
編集　国士舘史資料室
発行　学校法人国士舘
〒一五四―八五一五
東京都世田谷区世田谷四―二八―一
TEL〇三―三四一八―二六九一
FAX〇三―三四一八―二六九四
E-mail archives@kokushikan.ac.jp
印刷　河北印刷株式会社

ISSN 1884-9334